
とある魔術の頂上戦争

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の頂上戦争

【Nコード】

N5727X

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

9月28日…上条当麻はマンホールに落ちた。そして辿りついたところはドブ臭い下水道……ではなくて、『白ひげ海賊団』の船だった。しかも、これからエースの処刑を止めるためにマリンプォードへと向かう途中の……

プロローグ（前書き）

新連載です！不定期更新ですがよろしくお願ひします。

もし、誤字脱字、誤りがあったら、ご指摘してくださいませるとつねしいです。

プロローグ

9月28日

そう……その日も上条当麻は、朝から「不幸」だったと断言できた。

朝から同居人のシスターさんに頭を噛まれ（彼女の好きなアニメの録画を消してしまったからだが……）

学校へ行く途中で2回くらい車と衝突しそうになり（焦って信号無視をしたからだが……）

自販機に2000円飲み込まれたり（よく考えてみると、以前もこの自販機に飲まれた気がする……）

だが、それだけだったのなら、上条当麻の許容範囲内だっただろう。事実……彼も、この時までには「仕方ない」と諦めていた。

そう……この時までには……

そのあと彼は、家……と言っても学生寮だが……に一応、帰宅。制服のまま夕食のしたくをしている。

「ねえ、とうま、とうま……とうま……とうま……」

居間で声を張り上げているのは、同居人の禁書目録インデックスという名のシスター。

『シスターさんと高校生が同居しているってどういうシチュチュレーシヨン!?!』

っと思うだろうし、説明がほしいに違いないが……それは上条当麻自身も言えることなので、省かせてもらう。

そう……実は、彼には夏休み上旬以前の記憶がない。何故、記憶が飛ぶような事態になったのか分からないが、とにかくにも、インデックスというシスターの少女と出会った時の記憶がないのだ。だから、どうして彼女が、この家に居候しているのか分からない。

「とうま!ねえ聞いている!?!もしかして、シカトっっていうやつかも!?!」

「はいはい、行きますよ。なんですか?」

火を止めて上条が居間へ向かうと、インデックスは雑誌に釘付けだった。

「ねえねえ、とうま!!!これ見てよ!!!」

「ん?……なんだ?」

「見て分からないの?海賊の話だよ!!!」

「海賊?…ああ…ワンピースね…」

めちゃくちゃ最近はやっている漫画…少しなら上条も内容を知っていた。

「あのね、この漫画って…」

「はいはい…どうせ『悪魔の実』はナンタラの魔術の応用で生み出されたもの』とか『ワンピースの正体はウンタラ錬金術の応用』みたいなことだろ？」

「…とうま〜魔術を馬鹿にしてるでしょ…」

冷めた目をするインデックス。

「馬鹿になんてしてませんよ。……ん？」

ポケットの中の携帯が音を立てた。

「ん？…メール？」

差出人は不明…

5

「『上条当麻：今から下のコンビニにすぐ来られたし』？誰だこれ？……まあ、行かないと、さらに不幸になったら嫌だしな……わりいインデックス。ちよっと出かけてくる。」

「とうま。どこか行くなら、お菓子買ってきてほしいかも。スフィックスが勝手に食べちゃって…」

見てみると爪らしきものでズタズタに引き裂かれたお菓子の袋が散在していた。

「はいはい…買ってきますよ。」

上条は外に出た。

第1話：マンホールを抜けるとそこは…

…上条当麻は、マンホールの中をダイビングしていた。

背中から落ちていたので、下の様子が全く見えないのが、怖い。ただ、黒い空間だけが、上条の周りにあった。

しかし、いつまでも落下しているわけがない。これはマンホール。いつかは下水道にたどり着くはずだ。

…いずれ来るであろう衝撃を予想し、思わず上条は目をつむった。

バツシャーン！！！！！！

ゆっくりと目を開けると、もやで視界が悪いが、一面茶色の世界だった。

……そしてこの時…上条は、はっきりしない意識の中で、妙な事に気が付いた。

自分は、どこにでもあるマンホールに落ちた。ということとは、辿りつく先は底冷えするような下水のほず。

なのに、今…自分が浮かんでいるのは水…じゃなくて、ちょうどいい感じのお湯……

下水道といえば、誰もが口元を覆うドブ臭さで充滿しているはずなのに、鼻に入ってくるのは、どこことなく甘い匂いだった。

それ以前に、下水道なら天井が茶色のわけがない…もっと…汚れた灰色のはずだ。

上条は、そつと立ち上がった。……幸いなことに、お湯は浅いようで、ちゃんと足の裏が地面についた。

お湯は自分のヘソの位置までしかない。

もやで視界が悪い中、ゆっくりあたりを見わたす。

見ると、悪い視界の向こうで、何人かの人影が身を寄せ合っているのが見えた。

「あゝ、すみません。ちょっと尋ねたいことが…」

ココまで口に出した時、上条はあることに気が付いた。

まず、人影が恥じらうような仕草をしているということ…

その次に、その人たち全員が、何も身にまわっていないということ…

最後にその人影が…

(なんで、マンホールの下に銭湯が広がっているんだ!？
いや…そんなことよりも、まずは上を目指そう!!地上へ戻らな
く
ては!!)

上条は、ひたすら走った。途中でなんか人とすれ違った気がするが、
今はそんなところではない。
ただひたすら上を目指した。

「出口か!？」

階段を上り切り、扉を開けると、確かにそこは外だった。

「……………なにこれ？」

耳に入ってくるのは波の音……………だけ……………。

そう……………たどり着いたのは地上ではなく……………海の上……………正確に言えば、ど
こかの船の上だった。

第2話 空から落ちてきた少女

上からは眩し過ぎる太陽が肌をやく。…頬を撫でる風には潮の香りが混ざっていた。

リゾート地に早変わりできる気候の中で、上条当麻は縄で縛られていた。

周りにいるオッサンたちの気迫に負けないように、上条は精いっぱい声を張り上げる。

「さっきから言ってるじゃないですか！

マンホールを抜けたら何故か女湯で、人畜無害な上条さんは、あわてて地上に戻るため外に出たら何故か甲板で船の上だったんですって！…！」

彼に『この場から逃げる』という考えが全くなかったので、正直に本当のことを話す。

上条はいままで…といっても記憶にある限り、かなり喧嘩をしている。

元々の不幸体質のせいで武装したスキルアウトや能力者の不良の喧

嘩に頻繁に巻き込まれるため、その経験上ある程度は喧嘩慣れしており打たれ強く体力もそれなりに自信がある。

戦闘スタイルも、右手に宿る力『幻想殺し』で相手の能力を無効にしているから、近接格闘に持ち込んで直接拳を叩きこむ事を基本戦術にしている、この方法で、学園都市のNO・1の実力者を倒したことがある。

しかし、それは相手が能力に頼り切っていて、基礎的な身体能力が低いからだからだ。

つまり、目の前にいる人たちのように、筋肉が凄くて見るからに『強い』人になうわけがない。

武器でもあれば、話が変わるかもしれないが、彼が今持っているものは、菓子が入った袋だけだった。到底、武器と言える代物ではない。

だから、正直に話して分かってもらうほかなかった。

「ホントかよいい？」

「本当ですって……！」

こんないつ殺されるかどうか分からない状態で嘘がつけるわけない

じゃないですか!!

だいたい俺は『霸气』ないし『悪魔の実の能力者』じゃない、普通の『彼女いない歴〃年齢』の高校生ですよ!? 恋愛フラグが一切ない人畜無害な高校生を縛り付けるって、おかしいじゃないですかー
!!!

「まあ…嘘を言っているみたいには見えませんが……」

「でも、いきなり現れるっておかしくない?」

「でもここは、『偉大なる航路』^{グランドライン}だから、何があっても不思議でないよな。」

……

「(あれ?なんか今…ものすごい聞き覚えのある単語が……?)」

あの、すみません!!いま、グランドラインって言いましたか?」

「言ったが…それがどうした?」

上条はじいじいっと一人一人の顔を見直した。

『偉大なる航路』というのは、漫画・ワンピースに出てくる海の名前。

こうしてじいじいと見てみると、目の前にいる男たちにも見覚えがある。

…もっとも、名前が分かる人は2・3人だったが。

「ここって、もしかして『白ひげ海賊団』ですか？」

「それを知らずに、乗り込んだのかよい？」

見事なパイナップル頭の男：白ひげ海賊団一番隊隊長のマルコが、
答える。

「だから、何回目ですか！？」

俺はマンホールから急降下ダイビングして、気が付いたらここに
たつて！！

つーか、異世界トリップか！？なんでワンピースの世界！？
不幸だ！！！！

なんで、こんな死亡フラグが半端なさそうな世界に来てしまったの
だろうか。

今までも死にそうになったことが沢山あったが、今回は本当にここ
で死ぬかもしれない。

「異世界トリップ？よく漫画とかである？」

この船にしては珍しく平均的な体つきの男……隊長格なのは確かだ
が、上条は名前が思い出せなかった。

「はい！物わかりが良くて嬉しいです！！」

「本当か？胡散臭いな……」

「証拠はあるのか？」

「証拠？」

考え込む上条だったが、証拠なんて思いつかない。この世界に来ようと思ってきたわけではないのだ。そんな証拠となるようなものなんて持っていない。

「ん？」

「きゃあああああ！！」

頭上から声が降ってきた。上条を囲む人たち（つまり、白ひげ海賊団の隊長たち）が上を向くので、つられて上条も上を向く。

なにかが近づいてくる……見る限り人のようだ。

「なっ！？」

上条の顔が引きつった。

なぜならその人物は……

「うぐっ！！」

「いたたた……」

なんで、この私がマンホールに落ちないといけないのよ……
？……って……ああ！……あんた！……なんでわ……私の下にいんの！？」

女はあわてて上条の上をどいた。

「うう…なんでビリビリまで……………」

これから事態が好転するとは思えない…

「不幸だ……………」

上条当麻は、ビリビリ中学生こと、学園都市のNO・3…………御坂美琴をみてため息をついた。

第3話 何事も口裏合わせが大事

「なんであんたがここにいるの!? っていつか、なんでマンホールから落ちたのに、海の上!?!」

「…お前もマンホールからトリップかよ……」

「な…なによ!!」

仕方ないじゃない! 黒子の奴が、いきなり飛びついてきたのが悪いのよ!」

「あゝ……それで避けようとしたら落ちたってことか……」

「文句あるわけ!?!」

「いや…文句というよりこの状況……なんつーの……不幸だー」

上条は真っ赤な顔で怒ったように話す美琴を見て、ため息をついた。

「不幸だつて……ん?」

美琴は周りの状況に気が付いたらしい。

じいーっつと周りにいるオッサン達の顔を見る。

「ねえ…もしかして……ここ…… 『モビー・ディック号』!?!」

「も…モビー…?なにそれ?」

「はああ!?!あんた知らないの!?!」

バツかじゃない！？っという顔をする美琴。

「いい？『モビー・ディック号』っていうのは、『ワンピース』に出てる『白ひげ海賊団』の船のことよ。

頂上決戦の時に燃えちゃったけど、ルフィ達の『ゴーイング・メリー号』や『サウザンド・サニー号』より、はるかに大きくて…はつきり言ってるあのマンガに出てくる船の中で最大級なんじゃ……

……っつて、どうかしたの？」

「い…いや……よく知ってるな…っつて…」

ペラペラ漫画知識を披露する美琴に若干引く上条。

学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』のお嬢様のイメージから、かけはなれていた。

「なによ？こんなの当たり前の知識じゃない？

アンタは読んでないの？」

「いや…少しだけならな。『アバラスト編』位までなら…」

「『アラバスタ編』ね。

っつていうか、まだそこなの！？もう本誌でルフィは、とっくに19歳になっているっつて言うのに。」

「あんなあ…」

「おい、なに不吉なことを言っているんだよい？」

見るとマルコが殺気を出していた。

「この船が燃える！？なに言ってるんだよい！？」
「……………」

何故か黙り込む美琴。

「おい！！なんとか言えよい！！」

「……………」

本当にブーチの護と同じ声だ！！」

「はぁ？」

「お願いだから『正解』って叫んでみて！！」

または、『ペガサス 星拳』でも構わないから！！」

目をキラキラさせる美琴。

「……………おい、御坂…相手が困ってるぞ？」

「えっ？」

「そんなことよりも…ちよつとこっちに来い！」

「えっ！あ…ちよつと…！！」

マルコに『ものまね』をせがむ美琴の腕を引っ張る上条。
そのまま船の端の方まで連れて行った。

「あのなあ……って、なんで赤くなってるの？」

「そ…それはあんたがいきなり………」

「いきなり…なんだ？」

「ああもう！！で、なんなのよ！！」

「実はさあ……ちょっと原作知識を披露するのは止めないか？」

「？なんでよ？」

「いや…だってさあ……気味悪いつて思われるだろフツー？」

だって、誰か不特定多数の人たちが俺たちの知らないところで俺たちの存在や行動を知っているってなんか嫌だろ？」

「そりゃ………そうね。悪かったわ。」

うなだれる美琴。なんか、罪悪感を感じる上条だった。

「ああ…それでさあ、言ったことはもうアレだから、口裏を合わせるぞ？」

「そ……そうね。」

額を合わせて話す上条と美琴。

「おい！！話はすんだのか！？」

さっさと答えるよい！！」

「あ…あはは…悪い悪い。」

作り笑いを浮かべて上条は振り返った。

「俺たちはさっき言ったみたいに『異世界』から来たんだ。」
「で、異世界の奴らがなんで、この船を知ってるの？」

和服を着た人が話しかけてきた。

「じゅ…数年くらい前に、一度この世界にトリップしてきた人がいたみたいなんだよ。」

で、その人が遠くからこの船を見た時に、なんか…」

「火柱が上がってたから、燃えたように見えたんだって。『モビー・ディック号は燃えた』って伝わってたのよ。」

「数年前…火柱…ああ…エースの仕業かな？」

「あ〜…ありえるよい。」

まだ、完全に信用していない眼だったが、納得の色が見え始めた。

「でも、異世界から来たって証明できるのか？」

空島の住人についても考えられるだろ？」

「そ…空島？」

原作知識にない言葉が出て戸惑う上条。

「空島ってというのがどういうところか知らないけど、これを見たら

納得してくれる？」

空島を知っている美琴は、上条に合わせて空島を知らないふりをする。そして、ポケットから携帯電話を取り出した。

「これは、携帯電話って言って、いわゆる電電虫みたいなもので、遠くの人と話が出来たり、写真が取れたり、メールが出来たりするの。つていつても、今はアンテナが圏外だから通話もメールも無理だけどね。」

携帯を受け取りいじくる隊長たち。

「たしかに、この世界にはないモノだね。」

「面白いな、異世界人なんて。」

「さすが『偉大なる航路』だぜ！！」

そんな様子を見た上条と美琴は『上手くいった』と目を合わせた。どうやら、信じてくれたみたいである。

「で、どうやって帰るんだ？」

「そ…それが…肝心なところが伝わってなくて…」

このまま、白ひげ海賊団に居候させてもらえれば、衣食住の心配はなくなる。

「そうか…困ったな…早く帰ってもらわないと、危険なのに…」

「危険？」

「そうなんだ。実はこの船…」

今にも処刑されそうな仲間を救出するために、全勢力を集結させてある敵の本拠地へ乗り込むところなんだよ。」

しばらく固まる二人……

「なんだか分からないけど、不幸だ!!!」

「ええええええ!!! (今って頂上戦争の時期なの!?)」

それぞれ違う意味で絶叫する、上条と美琴だった。

第3話 何事も口裏合わせが大事（後書き）

10/18…誤字が発覚したので、一部訂正しました。

第4話 どの世でも許されないことがある

「仲間？一体誰が………つて、どうしたんだよ、顔色悪いぞ？」

上条は真っ青な顔になった美琴をみて首をかしげた。

「も…もしかして、処刑されるのつて…エース…？」

美琴の震える口から紡ぎだされた言葉に一同が驚いた。

「おい、嬢ちゃんはなんでエースを知ってるんだ？」

「そ…それは………以前にトリップした人が、エースの母親のルージユさんがエースを出産する場面に立ち会ったから………」

「つてことは、エースの父親の事も知ってるんだな？」

美琴はうなづいた。

「私も手伝う！！エースを死なせるわけにはいかないわよ！！」

私、こつ見えても元の世界でNO.3の実力者なんだから！！」

「おう！そうなのか！？助かるぜ！！」

「でもよ、そういう話は親父にとおさねえと不味いんじゃないかよ
い？」

「確かにそうだな…よし！親父の所へ………」

「待て待て待て」

上条が盛り上がっている中に割り込む。

「な……何つーか……話についていけないんだけど……」

その…… エースって誰？つてか、なんで処刑されそうになったわけ？」

「……あんた……アラバスタまで知ってるんじゃないの？」

「そうだけど……そんな隅から隅まで知ってるわけじゃ……」

はあ……… っとため息をつく美琴。

「エースっていうのは、麦わらのルフィのお兄さんで、海賊王『ゴール・D・ロジャー』の息子よ。」

「……ああ……あのメラメラね……… ってことは、ルフィの奴も海賊王の息子なのか！？」

「いや……そうじゃないけど……」

「で、なんで処刑されそうなんだよ？」

「そ……それは………」

美琴はあさつての方向を向いた。

恐らく美琴は、なんでエースが処刑されるのかを知っているのだろうが、先程『あまり原作知識を人前で言わない』と約束していたので言うことが出来ないのだろう。

「奴の部下の“黒ひげ” ティーチが白ひげ海賊団最大の罪「仲間殺

し」を犯して逃亡したんだよい。だからエースはティーチ討伐に向かったんだよい。

だがよう、負けて海軍に引き渡されたんだよい。

海軍は海賊王の血を完全に断つため、エースの公開処刑を行うことに決めたんだよい。」

マルコが苦々しそうに説明する。

他の隊長たちも顔から怒りがにじみ出ている。

「つまり…裏切り者を倒そうとして返り討ちに合って…ん？じゃあその「黒ひげ」って奴はどうなったんだよ！？」

「ティーチは…エースの首を手土産に『王下七武海』に入りやがったんだ。」

「『王下七武海』？…どっかで聞いたことが…ああ！！思い出した。クロコダイルが入っていたやつか。」

その瞬間、上条の思考が一旦とまった。

『王下七武海』…それは簡単に言うと、政府に略奪を許可された海賊の事だ。

クロコダイルとは、その王下七武海に所属していた海賊で、アラバ

スタ王国の紛争を巻き起こした張本人。秘密犯罪会社「バロツクワークス」を密かに立ち上げると、ダンスパウダーを使って、アラバスタ国民の国王への反感を煽るなどして、国の転覆と、国に伝わる古代兵器「プルトン」を手に入れようとした奴だ。

最終的に、政府を凌ぐ軍事国家を築くことが目標だったらしいが、そのために何十…何百もの人の血が流れたかは考えたくもない。それも、自分の配下の血だけではなく、全く関係のない一般人の血がほとんどなのだ。

「ゆるさねえ……」

上条は拳を握りしめた。

インデックスが見ていたワンピースの再放送に出てきた「王下七武海」のドンキホーテ・ドフラミンゴも脳裏に浮かんだ。

彼の真の目的は分からない…だが、人身売買を行っていたのだ。一応は手を引いたらしいが、その理由は「順調過ぎて退屈だった」からだ。

「ゆるさねえ……あんな葉巻鱈や、もふもふピンクの仲間になるためだけに、元々の仲間を殺して……海軍に引き渡したりしたら、公開処刑が待っていることを知っていても……目的のために自分の上

司を海軍に差し出すなんて……」

ぎりぎりつと歯を食いしばる上条。
そして、じつと自分の右手を見た。

「おい、お願いだ！！俺も仲間に加えてくれ！！
俺がこの右手で、エースを処刑するっていう幻想をぶち壊してやるんだ！！」

どことなく無気力そうだった少年の雰囲気が一気に変化した。
「誰かを絶対に助けたい」という気持ちが全身からにじみ出ていた。

「って！何すんだよ、ビリビリ！！」

上条はいきなり美琴に後頭部を叩かた。

「あんたって、本当におせっかいよね。」

「そういうお前だって『手伝う』って言ってたじゃないか！！」

「そりゃあ、エースに死んでほしくないからに決まってるじゃない。
アンタより私はエースについて知ってるし。」

でも、アンタは、ほとんど今まで知らなかったんでしょ？よく毎回
見知らぬ人のために動けるわね。」

「ほっとけないだろ。仲間を利用するなんて許せないしな。」

美琴はそれを聞くと呆れたように笑った。

「なんだよ？なんか悪いか？」

「悪くないわよ。あんたらしいって思っただけ。

感謝しなさいよ。このLv5で学園都市No.3の超電磁砲レベルガンの美琴様がアンタの味方なんだからね。このLv.0さん。」

「……馬鹿にしてるのか？」

「し……失礼ね！！！」

「だいたい、私はアンタに一度も勝ったことがないから、ここでアンタより先に救出して、アンタより強いことを証明してやるんだから！！！」

「証明って……御坂さんのほうがはるかに強いですよー。

「この間の大覇星祭の賭けでも、お前が勝ったじゃないか。」

「そりゃそうだけど……それとこれとは違うの！！！」

「……痴話げんかはそこまでにして、そろそろ親父のところへ行くよい。」

マルコの言葉で一気に覚める2人。

……そこで二人は親父……世界最強の海賊・エドワード・ニューゲートと対面し、彼の「息子」と「娘」になる。その時、エース処刑場で……残り約6時間で……

刻一刻と船は、海軍の待ち受ける「マリンフォード」へ針路を進めていく……。

そして、同時刻……もう一つの物語が動き出していた。

……インペルダウン……

そこは、拷問室と死刑台が立ち並び、世界中で暴れ回っていた凶悪な犯罪者達でひしめき合っている大監獄であり生き地獄。

その地下6階「LEVEL6」「無限地獄」

起こした事件が残虐の度を越えたため、政府により存在をもみ消された終身囚・死刑囚が幽閉されるフロア。超大物や伝説級の危険人物が幽閉されているため、存在は秘匿されている……

しかし、このフロアに似つ合わしくない人物が突如、現れた。

「痛ったいってミサカはミサカは打ったお尻を触ってみたり。
ってゆーか階段から落ちたはずなのに、なんでこんな所にいるんだ
ろうってミサカはミサカは疑問を口に出してみたり。」

ワンピースを着た外見年齢10歳前後ほどの少女……ラストオーダー打ち止めが現
れたのだった。

第5話 誤解は意外と簡単に生まれやすい

……学園都市第七学区にある病院……

「ってことは、あの子はこの階段から落ちたということだね？」

カエル顔だが、腕は一流と言われている医者：冥土返しが、無表情のまま階段を指差す少女に尋ねた。

「……ヘウンキャンセラー」

「正確に言えば、トイレに行こうと走った結果、足を滑らせてここから落ちてしまった」ということですね、とミサカは説明します。」

「……で、俗に言う『異世界トリップ』というのをしたということね……」

「そうとしか考えられません、とミサカは断言します。

なぜならミサカネットワークで伝えられた情報によると、検体番号20001号は現在、見知らぬ牢獄らしきところで、ワンピースに登場する『クロコダイル』と会話をしているところですから……

それに『「階段」という場所は異世界へ通じやすい』という情報を手に入れたミサカがいますし……と、ミサカは懇切丁寧に説明します。」

「……漫画の世界にトリップってわけかよ……
で、どうすれば奴は帰って来るんだ？」

学園都市No.1の能力者：で、この病院に入院中の少年、アクセラレ一方通行は先程から無表情で説明をしているクローン人間：シリアルナンバー検体番号10032号 ……通称：妹達シスターズor御坂妹に詰め寄った。

「異世界トリップというのは、何かしらの目的を達成しないと帰ってこれない場合が多いから……」

シスターズ妹達の代わりに同じくこの病院に入院している科学者、芳川 桔梗が答える。

「この場合だと、おそらく『Eース救出』をクリアしたら戻ってこられるんじゃないかしら？」

ただ…一生帰ってこれない場合もあるから、なんとも言えないけどね。」

「あいつ1人でEースを助けられるとは、考工られねエな。」

「じゃあ、君が助けに言ったらどうかね？」

「あア？」

「幸いにもバッテリーの予備はかなり用意したからね。」

「頂上戦争まで行くようだと、戦いが多いから予備は出来る限りたくさん用意しないと……」

「オイ、芳川！俺はまだ、行くとは言ってねエぞ！！！」

「あら？でも、この状況下で彼女を助ける力があるのは貴方だけよ？幸いにもミサカネットワークが通じるから、貴方の演算能力も使えると思うし。」

「……っち、くそつたれがア！！！」

こうして、最強の能力者は階段でわざと足をふみ外したのだった。

「……おい！！イワちゃん！！誰か降ってきたぞ！！！」

新旧七武海のジンベエとクロコダイルを檻から出して、逃走経路を確保した時だった。

ルフィの目の前に突如、何も無い空間から1人の少年が落ちてきたのだ。

白い短髪と赤い瞳に中性的な体格をしていて、杖をついていた。そして…白とグレーの縞柄の長袖Tシャツから察するに、囚人ではなさそうだ。

その少年はクロコダイルをまっすぐ睨んだ。

「…オイ。正直に答える。ここにガキが来なかったか？」

「ガキ？あぁ……アホ毛のガキか？」

「クロコボーイの知りあい？」

「いや…さつき煩いくらい一方的にしゃべりかけてきやがった…
テメエがアレの保護者だったのか？」

「どこにいるんだ？」

「海の上です、とミサカは即座に答えます。」

「！？お前…いつの間に……」

振り返ると先程の妹達シスターズが立っていた。

「おっ！！お前も急に現れたな！！」

「ヴァナアタ…どうやって……」

「冥土返しに言われて来ました、とミサカは答えます。

私ならミサカネットワークで打ち止めの居場所も分かりますから、
とミサカは面倒なことに巻き込まれたことを恨みつつ、説明をしま
す。」

「それより、海の上ってなんだ？説明しやがれ！！」

「それはワシが走りながら説明しよう。」

ジンベエが前へ出た。

「早くしないとエース君の処刑も、彼女の処刑も止められなくなっ
てしまうのだからな。」

「そうだった！！急ごう！！……って、彼女も処刑ってどういう
意味だ？」

ルフィがイナズマの作った坂を走りながら問いかける。

「うむ。実はだな……………」

〈回想シーン〉

「うわぁ！！本物のエースだ！！ってミサカはミサカは興奮してみる！！」

『エースはもう来ているって』クロコダイルが言ってたけど本当だったのね、ってミサカはミサカは一瞬疑ったことを心の中で謝ってみたり。てゆうか、本物のエースだよぉ！！！！」

1人の幼女がピョnpionと檻の前で跳ねていた。

「エース君の知り合い？」

「いや……………だれだ？」

「打ち止めっていうの、助けに来たんだよってっミサカはミサカは胸を張って答えてみる！！」

「ラストオーダー？変な名前だな。」

「へ…変な名前って……………これはミサカの意志で命名したのではないから、変って言われたらちよつと悲しいかもって、ミサカはミサカはしょんぼりとうなだれてみたり……………」。

ってか、助けに来たんだよって言ったのに、何の感慨もないわけ？

ってミサカはミサカは疑問を問いかけてみる！」

「…………お前…ミサカって名前なのかラストオーダーって名前なのか、ハッキリしたらどうじゃ？」

「えつとね…………」

ミサカは御坂美琴のDNAマップを元に作られた妹達シスターズが反乱や暴走をした時に備えてつくられた上位固体で、他の個体に対する制御や命令権を持つミサカネットワークの管理者なの。

だから、口癖で一人称が「ミサカ」なんだよってミサカはミサカは説明してみるけど、理解できる？」

「いや、さっぱり分からねえ。」

っていうか、さっさと逃げやがれ！！あぶねえぞ！！」

エースが声を張り上げるが、幼女は動こうとしなかった。

「だって…………見殺しには出来ないよってミサカはミサカは真剣に答えてみる。」

その瞳は言葉通り真剣そのものだった。まっすぐエースをみつめている。

「ミサカは単価18万円…つまりこの世界に換算すると18万ベリシスターズ1で製造可能のクローンで、20000体の妹達の総称の事なのってミサカはミサカは妹達のせつめいから始めてみたり。」

で、妹達は「絶対能力進化（レベル6シフト）実験」で1号から1

0031号まで殺されたんだけど、それまでは計画のためだからって特に何も思わなかったの、ってミサカはミサカは告白してみる。たしかにミサカ単体が破壊されたときには、全ミサカをつなく脳波リンクからその個体の存在が消されるけれど、ミサカの最後の一体が死ぬまで破壊されたミサカの記憶や情報自体が消えるわけではないから、実験にはなんの損傷もないわけ。

でもね……ミサカ単体が死ぬことに涙を流す人がいるんだってことをミサカは知ったの。だから、これ以上は誰一人として死ぬわけにはいかないってミサカはミサカは宣言してみる!!」

「……なんか難しい話でよくわからないんだが……」

「つまりね……人造物のミサカ単体のために涙を流す人がいるんだから、貴方だって死んだら涙を流す人がいるはず、だから死ぬのは良くないってミサカはミサカは説得を試してみる。」

そういうと、打ち止めは優しい姉のように微笑んだ。

エースは何も言えなくなった。

「お前……」

「そこで何をやっている!!!!」

その時厳しい声がとんだ。

打ち止めの後ろには、いつの間にか監獄長のマゼランをはじめとする監獄職員が立っていた。

「お前……」

「うひゃあ！ちょっと不味い状況下もってミサカはミサカは恐怖でわなわな震える身体を押さえられなかったり……」

「この男を助けに来たのか？」

マゼランが問うと、打ち止めはガクガクしながらうなずいた。

「ラストオーダー！！逃げろ！！」

エースが力の限り叫ぶ……が……

「こ……腰が抜けて動けないみたい……ってミサカはミサカは現状報告をしてみる……」

顔が引きつっている打ち止め……

それを見たマゼランは……

（これはなんだ？）

現状把握に苦しんでいた。

服装や健康状態からさっするに、どう見たって外部の人間だ。しかも幼女……

侵入者の” 麦わらのルフィ”と一緒に侵入したとも考えられるが、この少女はなんでこの最下層のフロアにたどり着くまで、監視の目に留まらなかったのか……………そもそも、なんでこの少女はエースを救出に来たのか……………

「おい、これもエースと共に連れて行くぞ。」

「えっ?」

マゼランについてきていた女職員は、急なことでイマイチよく分かっていなかった。

「しかし…拷問の上で監獄へほおりこめばいいのでは?」

「火拳のエース」を助けに、誰にも知られぬようにココまで来たコレがただモノに見えるか? 恐らくこれは……………

エースの実妹だ。

先程の会話の中にも、よく理解できなかったが「妹」という言葉が出てきたしな。

そうでなかったとしても、海賊を助けに向かったものへの見せしめともなる。

いずれにしろ、本部へ送った方が身元も早く割れるだろうしな。

……………連れて行け。」

〈回想シーン終了〉

「…………クソ餓鬼がア…………」

話を聞き終えた一方通行は、呆れと怒りがごちゃ混ぜになった声を出した。

「…麦わら。俺も仲間に入れやがれエ。オツと勘違いすんじゃないぞ？俺はアノ餓鬼を取り戻しに行くだけで、お前の兄貴なんて知ったこっちゃねエ。」

ただ、目的地が同じだから手を貸してやるってことだ。」

「…いいぞ。ってか、お前の能力ってなんなんだ？」

「…………気が付かねエのか？俺が今、どうやって動いていんのかをなア？」

そう…今、一方通行は、少し浮くようにして走っていた…否、走っているのではない。滑っていたと表記した方が正しいだろう。

「アルビダみたいな感じで『摩擦』をなくしてるのか？」

「摩擦ウ？違エな。」

これは反射…正確に言えば『ベクトルの向きの変換』だア。

そついやア…自己紹介がまだだったなア……………

俺は学園都市最強のLV5の超能力者…「アクセラレータ一方通行」だア!!」

白い髪に赤い目の少年はニタリと笑った。

第6話 彼を止める者は誰もいない

……海の上……

鳥の声1つしかない……聞こえるのは処刑台のある町へ近づいていく船の音のみ……

「悪いな。せつかく助けに来てくれたのにこのざまだ……」

もう二度と見上げることはないだろう空を見つめたままエースは隣にいる幼女「ラストオーダー打ち止め」に話しかけた。

「確かにミサカは貴方を助けられなかったけど……ミサカは全然不安じゃないよってミサカはミサカは自分の感情をあらわしてみる。」

「なんで不安じゃないんだ？」

「だって……あの人が助けに来てくれるから……貴方の弟と一緒にミサカ達を助けに来てくれるってミサカはミサカはミサカネットワークを通じて分かった喜びをあなたに伝えてみる……」

確かに打ち止めの声色には全く「死の恐怖」を感じさせないモノだった。

監獄で出会ったとき同様明るくて、楽しげな感じで話していた。

「ところで……ってミサカは話題を変えるけど……いい？ってミサカは

「ミサカは許可をとってみたい」

「？なんだ？」

「えっとね……」

『悟飯！』って言って欲しいの！ってミサカはミサカは懇願して
みる！！

出来なかつたら『魔貫光殺砲』でも構わないかも！ってミサカはミ
サカは……」

「待て待て待て！……」

今が護送中だということを忘れてツッコむエース。

「何を言わせたいんだ！？ってかどういう意味なんだそれ！？」

「だって……エースの声優さんとピッコロの声優さんは同じだから
…生エースの声が聞けたから、ついでにピッコロさんの声も聞きた
いかもってミサカはミサカは密かな願望を打ち上げてみたり！！」

「せ…声優ってなんだよ！それ以前に、ピッコロって何者だ！？」

「えっとね……ナメック星人だよってミサカはミサカはエースに教
えてあげることにする！！」

「人間じゃないのか！？そのピッコロって！！」

「人間のわけないよ、肌が緑色で触覚生えてるし……でも、カツコ
イイんだよってミサカはミサカはピッコロさんのことを述べてみる
！！」

「……………」

「ねえねえ！！いつてみてよあ〜ってミサカはミサカは目をキラ
キラさせながら懇願してみる！！」

「……………」
「ま…『魔貫光殺砲』……………」

「だめ！！もつと低い声で！！ってミサカはミサカは注文を出して
みる！！」

あと、これはピッコロさんの必殺技の一つだから、もつとテンション
上げて言っただけでもいいかもってミサカはミサカは追加注文してみ
た
り！！！！」

「……………」

「ほらほら早くくくくってミサカはミサカは足をバタバタさせなが
ら懇願してみる！！！！」

「……………」
『まかた「ひびく」魔貫光殺砲』！！！！」

「うわあ！！本物そっくりってミサカはミサカは感動してみたり！
！！！！」

(緊張感ねえなあ……………)

真つ赤な顔をしながらも、ピッコロをはじめとする古川さんの物ま
ねをするエースと、それにはしゃぐ打ち止めを見て、ため息を隠せ
ない護送警護中の中将を含む海兵たちだった……………

Level 5 Level 4への階段付近

そこを走り抜ける4つの人影があった。

「処刑つてのは、いつ始まりやがんだ!？」

「今が約10時前…処刑は午後の3時!!」

その時刻には必ず処刑は実行される!!!

白ひげのオヤジが来るとするのならその何時間も前にしかけるハズ。

エースさんはもう海の上!!!

戦いはいつ始まってもおかしくない!!!」

「3時まで殺されることはないんだな!!!ならまだ間に合う!」

「フン………」

クロコダイルが列から抜き出ると、扉の前に躍り出た。

「扉なんざ無意味…」

この右手は渴きを与える。」

彼が右手を当てると、扉が砂になって消えていく……

そう、彼はスナスナの実の能力者で、大ざっぱにいうと、右の手のひらはあらゆるものの水分を吸収し、砂へと変えることができるのだ。

扉の向こうには大量の獄卒が待ち構えていた。

「こちらLevel 4!!!」

囚人「ジンベエ」「クロコダイル」侵入者「モンキー・D・ルフィ」
それから見覚えのない少年が現れました!!!!応戦します!!!!

撃て!!!!!!」

しかし、銃弾など砂人間のクロコダイルには無意味。

「三日月形砂丘!!!」
バルハン

獄卒を砂にするクロコダイル。その一方で…

「撃て!監獄弾だ!!!」

「ゴムゴムのお……………」

ルフィはそれを交わすと彼らの頭上に飛び上がり……

「雨!!!!!!」

回転状態で放つゴムゴムの銃乱打する。

「魚人空手 唐草瓦正拳」

ジンベエも正拳突きのような形を行った後、全方位360°に衝撃

波を発生させて、獄卒たちを吹っ飛ばす。

「うわぁー！勝てるわけがねえ！！……ん？おい、あの餓鬼はどうした！？」

見覚えのない少年の姿が見当たらなかった。

この戦いのさなか巻き込まれて死んだか？とその獄卒が思った時だった。

その少年はいた。平然とLEVEL 3 へ続く階段に向かって歩いてくる。彼はかすり傷一つ負わないで平然と笑っていた。

「撃て！！あの少年も妻わらたちの仲間だ！！」

「ア~~~~めんどくせエなア……」

弾丸は彼に当たらずに、すべてが反射される……いや、正確な反射ではない。

そのすべてが的確に監獄弾を撃っていない獄卒にまであたるのだ。

一方通行はベクトルの向きの変換をして、銃弾をすべて監獄弾を持っている獄卒に当てていたのだ。

が、もちろんそんなこと理解できる獄卒たちではない。

「どうしたア！？その程度かア！？」

その程度じゃアこの一方通行様は止まらねエぜ？

ってか、このままじゃア、てめエらは自滅だぜ？」

「か…構わん!!撃て!!数で何とか抑える!!」

構わず撃ってくる(ばかな)獄卒たち。

「はっ!!馬鹿だなア!!」

迷わず”向きの変換”をする一方通行。

その変換は極めて効果的な変換で、次々と監獄弾を持っていない獄卒のみ殺されていった。

「報告します!!!!」

無線を使う獄卒。

「謎の能力者が現れました!!銃が効かず、ただの反射ではなく…その向きまでコントロール…うわああ!!」

「勝手に情報与えてンじゃねエの!!!!」

弾丸をものともせず…かといって槍を振りかざしてくる獄卒も近づきだけで吹っ飛ばされ…

まだルフィ達が後ろで戦っているのを感じながら先へと進む。

「貴様!!何者だ!!どこ出身だ!?!」

「聞きてエのかア?」

俺は……アクセラレータ一方通行。地獄の土産に知っておくんだな！！」

学園都市最強の彼を止められるものは誰もいない。

彼は誰よりも早く、LEVEL 3へと続く階段を上り始めた。

第7話 助けられるものは助けるに越したことはない

「おい！！そういえば、アクセラレータの姿がみえねえぞ！！」

はあはあと荒い息をつきながらルフィは周りを見わたした。

ブルゴリの軍団や獄卒たちばかりで、特徴的な白髪のやせた少年が見当たらない。

「彼なら絶対に無事です、とミサカは断言します。」

軍用ゴーグルを装着し銃器を構える少女が言った。

「大丈夫って…何を根拠に言っているツチャブル？」

オカマ王イワンコフも言うが、少女は無表情のままだった。

「問題ありません。一方通行は現在予備のチョーカーをいくつも持っていますし、それに彼は学園都市最強の能力者で、一万体弱のミサカを無傷で殺した張本人ですから、とミサカはこいつらの頭じゃ分からないだろうと思いつつ説明します。」

「よくわかんねーけど、能力者なら心配いらねえな！

それより、出口はどこだ！？」

ルフィがLEVEL 4 の出口を探しているとき、すでに一方通

行はLEVEL 2 まで来ていた。
つい先ほどまでこのフロアには監獄長のマゼランがいたのだが、LEVEL 4 へ向かう大型リフトに乗り込んだところだったので、このフロアには毒の壁対策を考えているバギーとゆかいな仲間たちしかいない……

が、そんなことは最強の能力者には関係ない。

「な……なんだお前!？」

「脱獄者には見えないんだカネ!！」

とかごちゃごちゃ言う奴らには見向きもせず、ただ毒の壁をじいつと見た。

「……毒か……めんどくせエ……」

チョーカーの電源を入れ直すと、毒の壁に手を伸ばす。

「おい!! あぶねえぞ!!」「自殺行為だ!!」

「うっせエなア……」

彼が毒の壁に触れるや否、彼の能力によって毒の壁は反射され、向こう側へと吹き飛んだ。

毒が消し飛んだのが分かったと、チョーカーの電源をいったん切る。

「おお!! すごい!!」

「LEVEL 1 への道が開いたぜ!!……って……」

壁の向こう側に立っていたのは……黒いひげを生やしたデカイ男が率いる謎の集団だった。

「ゼハハハハ！面白い能力だな、小僧！！」

「……………」

「どうだ？俺の仲間になんねえか！？」

「…くだらねエ…………俺は自分の目的を果たすだけだ。」

ここで上条当麻や御坂美琴、おそらく打ち止めやその他、異世界トリップした一般人だったら目の前の男”黒ひげ”に敵意や悪意・憎悪といった感情が沸々と湧き出てくるだろう……………が、彼は違った。

彼はエースの処刑なんて知った事ではない。

海軍にも海賊にも興味がない。

物語の主人公・ルフィが今、ハンニバルと戦ってこの後すぐ、マゼランとまた戦うなんて知った事ではない。

54

彼の目的はただ一つ…………あの少女…………ラストオーダー「打ち止め」を助け出すこと…………
そのためだけに動いていた。

（確か…この世界の移動手段は『船』だったんだよなア…………となる
と軍艦を奪うしかねエか
つか、なりゆきで『協力する』ことになったアイツらが全然現れる
心配しねエ…………）

後ろを振り返るが、囚人たちを開放しながらはしゃぎまくるバギー
たちしかいない。

…………どうやら一人で軍艦を調達しなければならぬみたいだ。

外へ出ると、マゼランの命令で船が今まさに海へ乗り出そうとして
いるところだった。

「どれにしようかなア」

一方通行はニタリと笑みを浮かべると、チョーカーの電源を再びO
Nにした。

「一人で残る気ですか、とミサカは心の中を見破ってみます。」

ミサカは包帯グルグル巻きでクルクル回っている男：いや、オカマ
のMr.2 ボン・クレーに問いかけた。

彼は一方通行が手に入れた船にまだ、乗っていないかった。

……ジンベエ達やバギー一行がこの場所に着いたとき、10隻あつ
た船のうち、この船を残し、他の船は人の屍を乗せたオンボロ幽霊
船とかしていた。

ルフィが着次第、いつでも出航できる……それなのに、ボン・クレ
ーだけが乗船していなかった。

「誰かが残って『正義の門』を開けないといけないのよ。

あつしが一番確実にできる……！」

『正義の門』……インペルダウンを取り囲む門……これは内側から
開けないと開かない……」

「確かに成功確率は99%です、とミサカは分析結果をいいます。ですが、そのあとはどうするつもりなのか、とミサカはそのあとに待っている運命が分かっているのか聞いてみます。」
「それ聞くのヤボじゃナイ？」

苦笑するボン・クレー……ミサカは無表情のままだった。

「私の方が安全かつ正確に開けることができます、とミサカは宣言します。」

「あんたね……分かってるの!？」

あの門を開けるにはここに残る……つまり、誰かが犠牲にならないといけないってことなのよ!!

「アンタは脱獄囚ですらないじゃナイの!!」

「……確かにそうですが……」

ですが、ミサカの能力を駆使すれば船の上からでも開けることができます、とミサカは断定します。」

ボン・クレーの顔に驚愕が走った。

「ええ!!あなた、能力者だったの!!」

「ええ。ミサカは……」

「おい!!みんないるか!!」

「麦ちゃんのかえ!!」

ボン・クレーが振り返ると……………

「逃げるぞ！！軍艦はあるかっー！！！！」

こちらに向かって走ってくるルフィ達が出た。

……………猛毒を滴らせる監獄長のマゼランを連れて……………

「「「なんかすごい連れてる！！！！」」」

「確かに連れていますが…原作とは違い、こちらには船があります。だから少しは動揺が少ないようですね、とミサカは分析をします。」

「原作？」

「あなたには関係ありません、とミサカは断言します。では、私達も乗船しましょう。」

ボン・クレーやミサカ、ルフィ達も乗り込み、マゼランにやられたはずのイワンコフも『地獄ウイ^{ヘル}ンク』で地上に戻ることができ、船は出航した。

「いったいこれはどうということだ……………」

残っている船が全船、使えない状態になっていた。

「一体どうということだ！！」

微かに息のある獄卒に尋ねる。

「はぁ…はぁ…白髪の悪魔が…赤い目をした痩せた少年が…
たったひとりで…」

「たった一人!？」

「は…はい…攻撃を全て跳ね返し…何をしても歯が立たず…」

そんな囚人…聞いたこともない…驚愕を隠せないマゼランだったが、ここは冷静になるように努めた。

「まあいい…正義の門が開けられることはない。

奴らはあのままあそこで立ち往生をし、逃げることは出来ない。対策はゆっくり考えれば…」

マゼランは己の目が信じられなくなった。

正義の門が…開き始めている…

マゼランは動力室に走った。

「はぁ…はぁ…動力室!!何をしている!!!」

「そ…それが…何者かにハッキングされたらしく!!」

こちらからのコントロールが出来ません!!!」

「なんだと……！」

「……うまくいったのはミサカのお蔭ですね、とミサカは原作を変えたことを自慢してみます。」

「……この手があったとはなァ……そっぴや、てめェも能力者だったな。」

弱すぎるから忘れてたぜ。」

「……一応これでもレベルは2〜3なんですよ、とミサカはシヨツクを少し上げたのでうなだれます。」

ミサカ…シスターズ妹達の能力はレベル2〜3程度の発電能力『レイデオノイズ欠陥電気』。
本物の御坂美琴の『レベルガン超電磁砲』には二万體全員でかかっても歯が立たないとされているが、ハッキングなんてお手の物だった。

「でも……少しは人のためになれてよかったです、とミサカは安堵します。」

ルフィ達と笑っているボン・クレールを見たミサカ。

……本来なら彼が開けていた正義の門……

原作にはない仲間を加え、ルフィの奪った軍艦は……処刑の行われる

街、マリンフォーフォードへとタライ海流に流され進んでいく……

第8話 父親ってろくでなしに見えることが多い

「うわぁ………すげえな………」

ぐるりと360度どこを見ても水・水・水………まるで水中トンネルを思わせるところだが、水中トンネルの中ではなく、上条当麻は海の中にいた………しかも乗船している船ごと………。

上条は妙な事に気が付いた。

海の中にいるのになにも生物の気配がしない………

ONE PIECEの世界なんだから人魚や魚人がいてもおかしくないのに、魚一匹すら見かけなかった。

海の生物たちは、これから起こることを予測しているのだろうか？
そう考えると少し気味が悪くなってきた。

「ちょっと………聞いているの………」

ビリビリつと前髪に青白い電気を走らせる美琴がバシィつと上条の頭を叩いた。

「いてっ！聞いてますとも………」

ただどういう技術で海の中を船が進んでいるのか、気になっただけだっ………て………！………」

「………そっか、アンタの知識はまだシャボンディまでいってないの

よね……

いいわ！！この美琴様が教えて上げる！！」

美琴が得意そうに腕を組む。

「見て分かると思うけど、船の周りをシャボン玉で覆うのよ。これをコーティングっていうの。」

えっと……たしか、船全体をヤルキマン・マングローブのシャボンで包みこむことで海中航海を可能にするの。これは深海1万mの水圧にも耐える事が可能で、多少の穴が開いたくらいでは影響はないんだけど、海王類などに噛まれて多数の穴が開けば潰れるのよ。」

「へえ……学園都市も真つ青な技術だな。」

「そういうこと。」

で、話を戻すけど……アンタは何をするのか分かった？」

美琴が話を”作戦”の方に戻した。

作戦とはもちろん、エースをいかに被害最小限で救い出すかという作戦だ。

原作を知らない上条は美琴にまかせつきりだったのだが……

「でもさ、これって俺、あんまり必要なくない？
ってかさあ、俺、いらなんじゃない？」

作戦内容を聞いた上条がツッコむ。

「だって、アンタの能力は確かに凄いけど、敵さんは能力+体力+腕力…ついでに脚力もあんの。^{アクセラレータ}能力者だからって一方通行やアタシみたいに能力に頼り切っている奴は少ないの。」

ほら、例えばエースだって、能力者だからそれに頼り切れればいいのに、筋肉が凄いでしょ？だから、仮にアンタの力で能力を消したところで気休めにしかならないのよ。」

「……ってことで、俺はこんな役回りしかできねえってのか……」

なんかやるぞ！！って盛り上がったのに……不幸だ……」

がつくし…と肩を落とす上条…

「まあ、気になさるなって！！これも重要な仕事よ！？」

美琴が上条の肩を笑いながら叩く。

「うう…中学生に慰められる高校生って……」

ってか、前もこんなこと感じたような気が……」

上条の憂鬱に関係なく…白ひげ海賊団はマリンフォードへ進んでいく……

海軍本部のある島”マリンフォード”

ここにはおもに海兵の家族が暮らす大きな町がある。

現在、住人達には避難勧告が出ており……

避難先のシャボンディ諸島からモニターによって…人々は公開処刑の様子を見守っていた。

各所から集まった記者やカメラマンたちもまた

ここから世界へ情報をいち早く伝えるために身構えていた。

海軍から出される監視船は出航の度に撃沈され、”白ひげ”の情報も皆無……

マリンフォードに集まる緊張は高まるばかりで

せまる処刑の時間までとつとつ3時間をきっていた。

ここには世界各地より集められた名のある海兵たち総勢約10万人の精銳がにじり寄り寄る決戦の刻を待っている……

三日月形の湾頭及び島全体を50隻の軍艦が取り囲み、湾岸には無数の大砲が立ち並ぶ……

港から見える軍隊の最前列に構えるのは、戦局のカギを決める曲者たち

海賊”王下七武海”

そして広場の最後尾に高くそびえる処刑台には事件の中心人物

白ひげ海賊団二番隊隊長”ポートガス・D・エース”が運命の刻を待つ……

その眼下で処刑台を固く守るのは、海軍本部最高戦力

3人の”海軍大将”

今考えうる限りの正義の力が、白ひげ海賊団を待ち構える……

が、そこにイレギュラーが混ざっていた。

「……おい！エースの横にもう一人……誰かいるぞ？」

「本当だ！ってかアレ……子供じゃないか？」
「エースとどういった関係だ！？」

ざわざわと報告とは違う事態に周囲と話す海兵たち……だったが、
処刑台に海軍大将・仏のセンゴクが現れたことで水をうつたかのよ
うに、シーン……となった。

アフロヘアと口ひげが特徴で、実物大のカモメのオブジェを載せ
た軍帽と黒縁の丸眼鏡を着用している男……それが海軍元帥・センゴ
ク……。

センゴクが手のひらに載せている電伝虫を使おうと口を開いたその
とき……！

「うわぁ……あそこにスモーカーがいる……！ってミサカはミサカは
原作キャラに指をさしてみたり……！っていうか、手錠されているから
本当は指をさしていないんだけど、心の中では指しているからそれ
でいいか、ってミサカはミサカは自分で納得してみたり……！」

……エースの横で手錠につながれていた打ち止め^{ラストオーダー}が声を上げた。

シーンと静まり返った中だったので、彼女の甲高い声は島全体に響

き渡っていた……
もちろん、シャボンディ諸島のモニターを通じて、シャボンディ諸島にも……

「……スモーカーさん……知り合いですか？」

彼の部下で眼鏡の女剣士・たしぎ少尉が尋ねた。

「いや……しらねエ……だれだあれ？」

常に2つの葉巻を吸っているほどのヘビースモーカーで、自然系悪魔の実・モクモクの実の能力者・白獵のスモーカー准将は少し眉間にシワを寄せた。

あんな小娘みたことがない。なのになぜかもものすごく馴れ馴れしい……
……
忘れているだけかとも思ったが、全く記憶にない……。

「ねえねえ、結局”けむりん”って誰と付き合っているの？ってミサカはミサカは長年の疑問をズバリ聞いてみたり!!」

「てめえ!!何を分けわかんねエこと言ってるんだ!？」
「つてか、そのあだ名は止める!!」

「ええ!？なんで?つてミサカはミサカは抗議の色をあらわしてみたり!!」

つていうか、質問に答えてほしいんだけど、つてミサカはミサカは

口をタコのように膨らませてみる！

ねえ、誰？たしぎ？それともヒナ嬢？どっちってミサカはミサカは二択にしてみる！」

「どっちでもねえ！！！」

「一体そのガキは何者なんですか！！！」

スモーカーはセンゴクにむかって声を張り上げる。

「分かった。今から説明しよう。」

センゴクは、実は自分も気になっていた事柄だったのに話題を変えられ、少し機嫌が悪かったが、気を取り直すところにした。

……で、話が始まったのだが……若干2人……怒りに燃えてセンゴクの話など耳に入らない男たちがいた……

「ゆるさねえ……アイツもヒナ嬢を狙っていたのか……！！！」

「愛しのヒナ嬢はこのフルボデイのものなのだ。だれにも渡すものか！」

海軍大佐・黒檻のヒナの部下で雑用要員のジャンゴとフルボデイが沸々とライバル出現の怒りに燃えていた……

が、そんなことはどうでもいいので、さっさとセンゴクの話に戻すことにしよう。

「…エース…お前の父親の名前を言ってみる。」

「俺の親父は…白ひげだ!!」

苦悶の表情の後、エースは絞り出すように答えた。

「違う!!!!」

「違わねエ!!他にいねエ!!」

「……南の海にバテリラという島がある……」

母親の名前はポートガス・D・ルージュ……」

この女は我々の頭にある常識を覆し…我が子を思う一心で海軍の目を欺くために、20か月もの間エースを胎内に宿し続けた……」

センゴクの重々しい口からエースの出生の秘密が語られていく……

「そしてお前を生むと同時に力尽き果て死んだ。」

父親の死から一年と三か月を経て……世界最大の悪の血を引いて生まれてきた子供…それがお前だ。」

打ち止めが現れた時以上にざわつく海兵たち。
エースが唇を噛みしめ下を向き続ける…

「お前の父親は海賊王”ゴールド・ロジャー”だ！！！！」

「……………！！！！！！？」

周囲に今日最大のざわめきが走った。

シャボンディにいる記者の中には手帳を落とす者までいた。

「い…生きていたのか…海賊王の血が…」

「じゃ…じゃああの女の子は？」

「白猫の知り合いか？それがなんで処刑？」

「この少女…ラストオーダーは誰にも見つからずに地獄の監獄・インペルダウンに侵入に、エースの元へとたどり着いた…：まあそこでとらえたわけだが…」

インペルダウンの職員が言うには、彼女は”エースの親族”らしい
…」

正確にはインペルダウン職員は”妹”と伝えられたのだが、伝言ゲームに例えると分かりやすいと思うが、最初は”妹”と伝わってきたのに、いつのまにか”親族”に変わり…：そのままセンゴクの耳に入ったのだった。

「それもただの親族ではない…
お前がいつ生まれたか言え。」

「言っても分からないと思うけど…」

ミサカは元々筋ジストロフィーの治療という題目で御坂美琴が提供したDNAマツプを元に作り出されたレベル5の「超電磁砲^{レベルガン}」の量産を目指す「量産能力者計画^{レイオノイイス}」の上位固体で、薬を投与したりして成長を速めたから、こう見えて実は生まれてから1年もたつてなったり、ってミサカはミサカは自分の出生について語ってみる。」

「……つまり、少し頭がおかしい子だ。」

「おかしいつて女性に対して失礼かもって、ミサカはミサカは地団太をふんでみたり!!!」

「つまり、こうして複雑な嘘までついて必死に素性を隠そうとして
いる……」

そこまでして隠す必要がどこにある？

ちなみにルージューにもロジャーにも兄弟はいない。

彼らの両親も彼らが幼い時に他界しており、彼らにも兄弟はいない…

なのに”親族”と名乗る少女……

そう…つまり、エースの実子!!!」

「……!!!!!!」

さらなるざわめきが沸き起こった。

「ガープ…本当かい？」

一応エースの育て親…海軍中将ガープに、同じく中将の紅一点…にしては歳を召されているツルが尋ねた。

「いや、知らん。馬鹿者が…」

あんな可愛い娘を作ったならなぜワシに報告せん!!」

「ちげえよ、ジジイ!!!」

ガープの声を聞いたエースが声を張り上げた。

「嘘はいかんど、エース!!
いったいいつ作ったのじゃ!!!いや、そもそもその子の母親はどうした!？」

「母親も何も俺の子じゃねエ!!!」

「”白ひげ”の所の女か？ナースか？」

「だから!!!聞けって!俺は…」

「センゴク元帥!!!報告します!!!」

「!？」

いきなり声を上げた海兵…ものすごく必死な顔をして敬礼をしてい

た。
なんか涙が出かかっていた。

「せ…『正義の門』が誰の指示もないのに開いています！
動力室とは連絡が取れず…」

「なんだと!？」

見てみると、確かに開いている……

エースもガープも言い争いをやめてしまった。

「来たぞおー！ー！！全員戦闘態勢！！」

「突如現れたぞ、一体どこから！！！！」

ゴゴゴー！と音を立てながら徐々に近づいてくる船…
それも一隻に二隻ではない。

個性それぞれの色を持つ大艦隊だった。

海軍は大慌てだった。

「海賊船の大艦隊だあ！！」

”白ひげ”はどこだ！？確認しろ！！」

”遊騎士ドーマ””雷卿マクガイ””ディカルバン兄弟”…”大
渦蜘蛛スクアード”………！！！！

総勢43隻…”白ひげ”と隊長たちの姿がありません！！

しかし間違いなく傘下の海賊たちです！！！！」

「……………」

……………お前らまで……………！！！！」

いつの間にかエースは小刻みに震えていた。

センゴクを含む海兵たちは”白ひげ”がいないことに気をとられていて、そのことに気づいていなかったが、打ち止めは気が付いていた。

「ほらね、みんなエースが死んじゃうの嫌なんだよってミサカはミサカはニコツて笑いかけてみる。」

そういつてエースに微笑むミサカ。

「親父さんはちゃんと来るよ、ほら！もうそこまで来てるってミサカはミサカはネタバレを試してみたり！」

「！？どこにいるんだ！？」

「よ～～く耳をすましてってミサカはミサカは助言を試してみたり！」
「？」

エースはじつと耳をすました……………聞こえるのは海兵の声と傘下の海賊の声……………
その時だった。

ゴボボ……ゴボボ……

耳にとらえるは泡の音……

「まさか！！」

そのことにセンゴクをはじめとする何人かの海兵が気づき始めた。

「えっ！この音……どこから？」

ゴボボ……ゴボボボ……

一般海兵たちに聞こえるくらい大きくなってきた泡の音……

「……こりゃあ、とんでもねえ場所に現れはしねえか？」

「布陣を間違えたかねェ」

みるみる間に三日月形の湾内に四つの巨大な影が浮かび上がってきた。

「湾内に海底に影が!!」

「まさか……」

そうだったのか、あいつら全船……!!

コーティング船で海底を進んでたのか!!」

驚きの色を隠せないセンゴク……

ザッパアアン!!!!!!

突如、巨大な白い鯨型の海賊船が湾内に姿をあらわした!

「”モビー・ディック号”が来た!!!!」

「次いで3隻の白ひげ海賊団の船!!!!」

新たに現れた3隻の船はモビー・ディックより少し小柄な黒鯨型の船だったが、巨大であることには変わらない。

「湾内に侵入されました!!!!14人の隊長もいます!!!!」

「”白ひげ”……」

恨みのこもったまなざしをむけるセンゴク……

「グララララ……何十年ぶりだ？センゴク……」

カツン…カツン…とモビー・ディック号…白鯨をかたどったの頭部
に向かって進む足音が響く…

「俺の愛する息子は無事なんだろうな……！！！」

三日月のような白ひげを蓄えた、地肌 directly コートをマントのよう
に羽織っている、常人の数倍はある体躯の筋骨隆々の大男……”白
ひげ”こと……”エドワード・ニューゲート”が姿を現した。

「グララララ……」

ちよつと待つてろ…エース！！！」

なんで来たんだよ……おれなんかほっておいてもいいのに……

「オヤジイイイ！！！！！」

エースは力いっぱい叫んだ。

第9話 誤解は誤解を生む

「まさかこれほど急接近されるとは…」

グララララッと笑う男を見て苦々しげにつぶやく海軍元帥・センゴク…

先程までの空気と一変。辺りは緊張という文字が支配していた。

…それは無理もないことかもしれない…

かつて海賊王ロジャーと唯一互角に渡り合った、大海賊時代の頂点に君臨する「世界最強の男」。「ひとつなぎの大秘宝」^{ワンピース}に最も近い存在とされ、その伝説的・怪物的な雷名は世界中に轟いている男…それが目の前に突然現れたのだから…

「…」白ひげ” ってどんな技を使うんですか？」

1人の海兵が隣にいる先輩海兵に尋ねた。

「ば…バカ！お前知らないのか！？」

「え…？」

「よく見ているよ…こんな戦い滅多にない…」

アレは…世界を滅ぼす力を持っているんだ…」

「世界を…滅ぼす？」

なんだかスケールがデカイ話だ…

確かに今、何か力をためるように腕をクロスさせているあの男からは威圧感を感じる……が、威圧感で言えば七武海やセンゴク元帥…青キジをはじめとする3人の大将達からも威圧感を感じる……彼ら全員の力を合わせれば楽々あんな爺さん倒せるんじゃないか？

恐れることはない……と思う。あんな爺さん…俺たちの正義に勝てるはずはない！

先輩海兵達はビクビクしていて唾を飲みこんでいる……が、俺はあんな爺さんには負けない。

でも…

”白ひげ”がニヤリと笑みを浮かべ、クロスさせていた両腕をほどいて、まるで壁に叩きつけるように空気を一気に叩いたとき……俺はその考えが甘いことに気が付いた…

”白ひげ”の叩いた空気にビシビシッとひびが入る。

そして波が…海が…グググッと持ち上がり、それにつられて俺たちのいる陸地もぐらりと持ち上がったのだ！

……すぐにそれは収まったが……こんなことで終わるわけがない…

ふいに安全なところにいる家族の顔が浮かんだ…

…俺は…帰れないかもしれない……

俺は首を振って、そんな不吉な想像を消し飛ばそうとした。

ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だって全員集まっている……

俺は…安全だ。

絶対に…生き残ってやる！俺はそう誓った。

「うう…今のがさつき言ってた”海震”って奴か？」

「そう。親父さんは”グラグラの実”の能力者で空間を殴りつけ大気にヒビを入れることで震動を起こす事が出来る地震人間なの！超人系悪魔の実の中では最強よ。」

「最強…か…」

上条当麻は美琴の説明を聞いて納得した。

地震は”津波”を呼び起こす……それは舞台のほとんどが”海”というこの世界にとって恐怖となるからだ。

津波の対処策は”とにかく高台へ逃げる”こと……だが、船に乗っていて津波が突如来たら…逃げられない……

つてか、まずここにも高台ないし……俺たち…無事だよな？いくらなんでも”自滅”はないよな？

「……ところで……御坂。エースの隣に座ってるのって……妹達シスターズに見えるんだけど、何者なんだ？」
「へっ!？」

頓狂な声を上げた美琴は、じいっと目を細めてエースのいる処刑台を見た。
状況が理解できなくて思考がフリーズする美琴……

「なんで見捨ててくれなかったんだよ!!
俺の身勝手にこうなっちまったのに……!!!!!!」

そうしているうちにエースが叫び声が耳に届いた。
その言葉を聞いたとき、上条の中で何かがキレた。

「見捨てられるかよ!!!!!!」
「!?!？」

”白ひげ”が何か言おうとしていたみたいたったが、上条の方が早かった。

「お前は……この船の”家族”なんだから!?
家族を見捨てる奴なんてどこにいるんだよ!!」
「……!?!？」

でもよお…俺はその”家族”の制止を振り切って、勝手に負けたんだ！俺の責任だ！！」

「…いや…俺”行け”と言ったはずだぜ…息子よ…」

「……………！？嘘つけ！！」

嘘つくんじゃねえよ、親父いい！！！！」

「いや”行け”と言った…そうだろ？マルコ…」

「ああ…俺も聞いたよい！！」

とんだ苦勞をかけちまったな、エース！！」

パイナップル頭の一番隊隊長のマルコが静かな怒りを身にまとっていた。

「この海にいる奴ならだれでも知っているはずだ…」

俺たちの仲間に出せば一体どうなるかってことくらいはな！！

「！」

「お前を傷つけた奴は誰一人として生かしちゃおけねえ、エース！

！！」

「待ってる！！今助けるぞおお！！！！！！」

ウオオオオと声上がる。

「ゲララララ！！」

ところでセンゴク……処刑する人数が増えてねえか？」

”白ひげ”も気になっていたのだろう……処刑台の上にはエース以外のイレギュラーがいることに……

センゴクは眉を上げた。

「お前は知らなかったのか？

これは……エースの実の娘だ!!」

「「「……ええっ!!!!!!!!」」」

先程までの”士気”より”驚愕”が勝った”白ひげ”海賊団……船という船から驚愕の声が上がった。

白ひげの声にも驚きの色が混ざった。

「……エース……俺の孫を作ったなら俺に何故言わん……」

「お……親父！これは誤解だ!!!!」

「ったく……まだシラをきるのか、エース？

それよりも……おい”白ひげ”!!何を言っている!?

この娘がエースの娘なら……ワシの”孫”じゃ!!」

海軍中将のガープが声を張り上げた。

「ジジイの孫は”ルフィ”だろ!!
ってか、本当に俺の娘じゃねエ!!!!」

「グララララ……エースは俺の息子だア…ガープ。
つまりエースの子は俺の孫だ。」

「何を言うか!!」

ワシは悪党に同情はねエ……

だが、エースを引き取って”強い海兵”になるために育てたのはワシじゃ!!

エースはワシの家族!!

つまりワシの孫じゃ!!」

「ちよつとミサカを取り合わないで!!…ってミサカはミサカは”一度は言ってみたいアニメヒロインのセリフ”を声高々に叫んでみたり!!」

「………って、やっぱりお前!御坂妹かよ!!…ってか…御坂妹より小さいから御坂妹の妹か!？」

上条は叫ぶと、口論がピタリ…とやんだ。

「と…トリップしたのはミサカだけじゃなかったのね!!…ってミサカはミサカは驚いて目を丸くしてみたり!!

ほ…本当はこの場で貴方にミサカ達が受けた恩を返したかったりするんだけど、ちよつと難しそうだからミサカはミサカはしょんぼりうなだれてみる…。」

「やっぱり御坂妹か!!…でもなんかしゃべり方が違うみたいな

……」
「それ以前にサイズも違うでしょ!!」

「……おい……アレはまさか……」

セングクがじいっとこちらを見てきた。
その視線の鋭さに思わずビクツと体が震える上条と美琴……
タラリ……と冷や汗まで出てきた……

「まさか……エースの女か!？」

「は……はいいい!？」

これ以上ないってくらい真っ赤になる美琴。

「お前……」

「じよ……冗談じゃないわよ!……!」

わ……私はエースと直接会ったのは今日が初めてだし!……!」

しかし、いくら否定しても一度広がった噂は止められない……

「そうか……実は一度トリップしていたから俺たちの世界について詳

しいんだな!!」

「なるほど…だからトウマが知らないことまでミコトは知っているんだな!!」

「水くせえじゃねえか!!なんで教えてくれないんだ?」

「エースの嫁ってことは、俺たちにとって姉御みたいな感じになるって事か?」

新たな事実…といっても誤解なのだが…を知った海賊たちは現状を半ば忘れて美琴に群がる……

「だ〜から!!違うって言うてるでしょ!!」

ほら!アンタもなんか言いなさいよ!!」

美琴が上条の方を向く…と、上条は思案顔でこういった。

「そうか……お前は一度こっちにトリップしてたのか……」

ぷっちーん

「だから違うって言うてるでしょ!!!!」

キンッと小さな金属音……

美琴の親指が、一枚のコインを弾いた音だった。コインはゆっくりと、ゆっくりと彼女の頭上を舞っている。

「うわっ！…ちょっとタンマ…！」
「問答無用よ！…どうせアンタには…！」

コインが再び美琴の親指に着地した。

「……こんな攻撃効かないんだから…！」

瞬間…！

彼女の異名・超電磁砲^{レールガン}の由縁ともいえる一撃が、解き放たれた。

コインは空気摩擦で赤熱し、オレンジ色のレーザーと化して上条に襲い掛かった。

「や…やめろって…！」

上条は超電磁砲^{レールガン}を紙一重でかわす。

そのまま超電磁砲^{レールガン}は処刑台へとツッコんでいく…

「やれやれ仕方ないねえ…！」

色の薄いサングラスとストライプの入った黄色のスーツを着用した

”ピカピカの実”の能力者……海軍大将・黄猿……本名・ボルサリーノが足を振り上げた。

あまのいわと
「天岩戸」

彼の足に光が集まり、レーザー光線となって超電磁砲と激突した。

ズウドオオオン!!!

っという音と共に相殺される天岩戸と超電磁砲。相殺された余波の爆風で建造物が破損した。

「!!!あの娘：能力者だったのか!?!」

「黄猿の攻撃とほぼ同等の攻撃力を持つだと!?!」

「お姉さまは学園都市N.O.3の能力者で”常盤台の超電磁砲”レールガンと呼ばれているんだよってミサカはミサカはって……ひゃあ!!!」

ラストオーダー
打ち止めは突如感じた揺れに驚いた。

ズズズズズズ!!!

驚いたのは打ち止めだけではない。

海兵から七武海まで……突如始まったの地鳴りに対して動揺が広がっていく……

「何だ、この地鳴りは……!!」

「そら来たぞ……」海震”が”津波”に変わってやってくる……!!」

次の瞬間！海兵たちの目に信じられない光景が飛び込んできた。

「な……なんだよアレ……」

上条も目の前に起きている出来事に驚愕の色が隠せなかった。

「実際に聞くのと見るのは違うわね……」

”グラグラの実”の能力者で『地震人間』の親父の作り出す津波は

……」

美琴も思わず目を見開いてしまった……この光景は漫画で知っているはずだった……

だが、実際に現実の光景として見てみると……これが現実かと疑いたくなるような光景だ。

いつのまにか身体が武者震いをおこしていた。

マリンフォード……海軍本部を挟み込むように、島全体をも飲み込むことが可能な巨大さの津波が襲い掛かってきたのだ……!!

開戦の士気を高めるためセンゴクが海兵に向かって叫んだ。

「勢力で上回ろうが勝ちとタ力をくくるなよ……!!」

最期を迎えるのは我々の方かもしれんのだ……

第10話 死にそうになることって朝から何回もあったりする

「すげえ……………」

上条当麻は目の前で行われている戦いに手に汗握っていた。

……………まず仕掛けたのは親父……………つまり”白ひげ”の方だった。

先程の白ひげが起こした”海震”で起きた特大の津波が海軍を襲う。それはマリソフアードに覆いかぶさるように襲ってきているので、彼らに逃げ場はない。

「自滅って展開にならなくてよかった……………」

「グララララララ……………」

おれがそんなへマすると思うのか、トウマ?」

「親父がそんなことするとは思えないけど、俺って不幸体質だからな……………」

だが、これであっけなく幕引きになるとは思えない……………だったら、美琴があんな真剣な顔しているわけがない。きつとなにかがあるはず……………」

その時だ。なんか全体的に青のイメージの男が宙に浮いていた。……………まるで津波を止めようとするかのように……………」

「おい、御坂…あれは？」

「あれは海軍の大将”青キジ”よ。本名はクザンっていう”ヒエヒエの実”の能力者だ…って…あんだ！！知らないのそんなことも！？」

「知るかよ！！どうせ俺の知識はアラバスタ止まりだよ！！」

青キジという男は津波に向かって両手を広げた。

すると青キジの両方の手のひらから、氷がまっすぐに津波に向かって伸びて行った。

「アイスエイジ 氷河時代”！！！！”」

その瞬間！！

パキパキっという音を立てて、あっという間に津波が凍りついていったのだ！！

「そうか…凍らせるから”ヒエヒエ”なんだな……」

「だからアイツは船を使わないで自転車で海を移動しているのよ。」

「へえ………って、マジで！？海王類とかにありしたら……」

「海軍の実力者トップ3が海王類に負けるわけないじゃない。負けたなんて言ったら切腹モノよ。」

冷めた目で上条を見る美琴……

白ひげは一発で終わらせられなかったからだろうか？苦々しい顔をした。
それから重そうに口を開いた。

「青キジイ……！！若僧が……！！！」

すかさず白ひげに向けて攻撃を仕掛ける青雉。

「バルチザン 両棘矛”！！！」

4本の氷の槍が放たれる！

だが、白ひげは怯む事なく青雉の方に拳を振るって大気にヒビを入れる。

「あらら

青キジはそうつぶやくと、槍と一緒に青雉の体が粉々に崩れて、海へ残骸が落ちていく。

「おい！！大將がアレでいいのか！？
ってか確実に今は”あらら”って問題じゃないよな？あんな軽い

ノリですむ問題じゃ……」
「いいから黙ってなさいって!!」

前髪にビリビリっと青い電気を走らせる美琴……話の展開も彼の能力も分からない上条は黙って青キジが落ちていくのを見ていた。

だが、青キジは無事だったみたいだ。

海上で氷の体になって再生したのだ。……美琴はイライラしているので確認をとることは出来ないが、おそらく彼の実の能力に関係しているのだろう。

クロコダイルの”スナスナの実”みたいに”自然系”^{ロギア}の悪魔の実の能力者って再生能力があるみたいだから、おそらく”ヒエヒエの実”^{トト}というものも、その一種なのだろう。

そう思っているうちに、再生した青キジが海を凍らせていった。

……海が凍ったことでもう……船は引き返せない……

悪く言えば、帰りにくく（逃げにくく）なった。
だが……よく言えば……足場が出来た。

それを思ったのは他の人も同じだったのだろう。
次々と戦場へ降りて行った。その中には先程、上条や美琴を取り囲んでいた”隊長”と呼ばれる人たちも混ざっていた。

美琴に蹴られ、上条は船上から一気にダイブすることになった。

「うう…不幸だ…まあ、エース助けるためだから仕方ない…か…」

思いつきりぶつけた尻をさすると走り出す上条…だったが…

「アレは…確か”鷹の目”!？」

以前、麦わらの一味の剣士・ゾロでも歯が立たなかった最強の剣士…鷹の目って呼ばれていた奴が立っていた。
そつえばアイツも七武海だった…と頭の片隅で上条が考えていると…

「押し量るだけだ…あの男と我々の本当の距離を…」

と言って鷹の目は黒い大刀を振り下ろしたのだ!!

ドオン!!

刀の放った斬撃が氷の海を割りながら白ひげに向かって飛んできた。
いや…彼自身は白ひげに放ったのかもしれないが…その斬撃の直線状には白ひげの他に…

「不幸だ!!!!」

上条もいたりした。彼の右手にはすべての能力を無効化する力……
イマジンプレーカー
幻想殺しが宿っているが、それは”能力”に効くのであって、”斬
撃”には効果がない。

走馬灯が上条の脳裏を駆け巡り、上条は目をつぶった……

……が、一向に何も起きない……

「大丈夫か、トウマ？」

恐る恐る目を開けるとそこにいたのは……

「たしか……3番隊隊長のジヨズさん!？」

「……覚えていたか……？」

「なんで……アイツの斬撃は”世界一の斬撃”だったはず……って」

その時、上条はジヨズの身体の一部が変化しているのを見て目を大きく見開いてしまった。

「だ…ダイヤモンド!？」

そつ…… ジョズの体の一部が世界一の強度を誇る宝石…ダイヤモンドに変化していたのだ!!

「ああ…俺の能力は体の一部をダイヤモンドにすることが出来る。」
「へ…へえ…… なんかすげえな…… って…… 親父い!!」

ジョズの顔を見上げた時、さつき美琴と戦った(?) 黄猿という男が白ひげに攻撃するのが見えた。

「やさかにのまがたま
八尺瓊勾玉」

親指と人差し指で作った輪から、無数の光の弾丸を発射する黄猿。先程の技とは違うが、美琴の超電磁砲とほぼ同等の威力を持つ技をつかう奴だ……

「心配するな…親父の所にはマルコがいる。」
「マルコって特徴的なしゃべり方とパイナップル頭の？
本当に強いのか？」

上条がマルコに抱いた正直な感想は”あまり強くなさそう”だった。少なくとも、このジョズつという大男の方が強そうに見える。

「いや…マルコは強い…ほら、見てみる。」

見てみると、青い炎をまとった男が攻撃を全て受け止めている。

「いきなり”キング”は取れねエだろうよい」

「え…えっ！？なんか再生してる！！」

「そりゃそうだ。1番隊長のマルコは別名”不死鳥のマルコ”。世にも珍しい”動物系幻獣種^{ソオン}”の能力者で不死鳥の再生能力を持っている男だ。」

驚く上条に説明をするジヨズ。

確かに上条のしている目の前で青い鳥…おそらく不死鳥に変化して黄猿に一気に向かっていくマルコの姿が見えた。

「アイツは心配しなくていい…ところでトウマ。」

お前はあの嬢ちゃんに蹴り飛ばされてここに落ちて来ていたが…
…船に戻るなら今のうちだぞ？」

「戻らねえよ。俺にはすることがあるんだ…っっていうても、ここからあそこまでは距離があるんだよな…」

それを言うとジヨズがニヤッと笑った。…正直怖い…

「なら一気に向こうまで進ませてやる。」

「はい？」

「つかまってるよ……！」

「う……うわぁあ……！！！」

上条の一気に視界が高くなった。上条は必死で氷塊にしがみついていた。

そう………ジヨズが凍った海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して何と投げ飛ばしたのだ。…上条ごと………。

「まぁ……一気に進めるからいいけど………て……うわぁ……！！！」

目の前から溶岩のようなモノが襲い掛かってきた。
アレを喰らったら………死ぬ……！！

上条は直感的に右腕を前に突き出した。

狙いの中！

溶岩は能力によって生み出されたものだったので、”幻想殺し”で消し去ることが出来た………のは良かった。

「ふ……不幸だぁあ……！！！」

手を放したことでバランスを崩し、本日2回目の急降下ダイブをす

る上条。

とにかくこのまま落ちたら”死”確定だ。
慌てて自分を支えてくれるモノを手探りで探す。とはいっても……
今はダイブ中……そんな都合の良いものは……

ガシィ！

あつたりした。

「あゝ……助かったぜ……って……なんか暖かくて柔らかい気が……つて……」

掴んだモノの正体に気が付いたとき……上条の顔がこれ以上ないってくらい赤くなった。

あわててソレから離れる。

「あ……えっと！今のは事故って言うか……なんていうか……生命の危機を感じていたので……その……必死で……」

「ほう……わらわを前にして言い訳か？」

わらわの体に触れていいのはアノ方だけじゃ。」

静かな怒りをにじみだす絶世の美女……女ヶ島「アマゾン・リリ」の九蛇達による海賊団・九蛇海賊団船長であり王下七武海の紅一点で別名が”海賊女帝”……ボア・ハンコック”が上条の前に立っていたのだ……。

第11話 美しく性格もいい女なんていない

「…あれは一体……？」

白ひげ海賊団12番隊隊長であり、大柄な隊長たちの中では珍しく常人程度の身長ハルタは、目の前で起こった出来事に目を思わず見開いていた。

同僚のジョズが持ち上げた凍った海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して、海軍が誇る巨人部隊の半数を潰したから……だけではない。

その氷塊が落ちてくるのを阻止しようと、海軍大将の赤犬が立ち上がり、右腕を溶岩に変化させるとそれを氷塊に放っていた……。まるでそれは同じく同僚で親友のエースが操る”火拳”のようなマグマの拳……。

このままでは、跡形もなく蒸発してしまい、そのまま火山弾として地面に落ちてくると思ったハルタは、隊員たちに避難を呼びかけようとした……。が、その溶岩が氷塊にぶつかる前に、跡形もなく消えたのだ。

……ジョズの能力は確か「肉体の一部を”ダイヤモンド”に変化させること」であって、相手の能力を無効化する力なんてない。というより、そんな”海楼石”みたいな効果を操る能力者なんて聞いた

こともない。

元々溶岩なんて放たれてなかったのか？でも……赤犬の能力で確かに溶岩が放たれていた。なのにそれが一瞬で影も形もなくなってしまうた。

……こんなことってあるのだろうか……

「ボサつとするなって!!」

ズカーンっ と銃声と共に何かの頭の上を通りぬける。

ハルタが振り返ると、ドサツと海兵が銃弾を浴びて倒れるところだった。

考え事をしているうちに注意力が散漫になっていたようだ。気を引き締め剣を握り直すと、自分を助けてくれた人物を探した。

「サンキューな、イゾウ!!」

「全く……隙だらけだ。」

16番隊隊長で、歌舞伎の女形のような姿かたちをした男…イゾウがはぁ……っ とため息をついた。彼の持っている二丁拳銃のうち一つの拳銃からは、まだ銃弾を放った時の煙がつつすら立っていた。

「何か考え事でもしてたのか？」

「うん……そのさ、今ジョズが放り投げた氷塊あるだろ？あれを赤犬が……」

「あ……溶岩が一瞬で跡形もなく消えたって奴？

あっちこっちで海兵達も俺たちの仲間も驚いているぜ？いったい誰の仕業だろうかってな。」

「じゃあ……見間違いじゃなかったのか……

本当に誰の仕業だろう？ジョズの新しいダイヤモンド応用術か？」

「ダイヤモンド応用術!？」

ハルタのつぶやきを聞いたイゾウは笑い始めた。

「あれはトウマの技さ。」

「と……トウマの技だって!？」

あいつにそんな力があるのか!？」

ハルタは襲い掛かってきた海兵を切り捨てながらイゾウに問いかける。

トウマというのは異世界から”白ひげ海賊団”の浴室にトリップしてきた少年の事で、今回のエース救出に協力してくれると言った、これといって戦闘力がありそうには思えない少年だった。

「俺って目がいいだろ？だから氷塊の上にトウマがへばりついてるのが見えたんだよ。

で、赤犬の溶岩が迫ってつ来たときに、トウマが右手を前に出して溶岩を消したのさ。」

イズウは襲い掛かってくる海兵達に向かって的確に打ち込みながら答えた。

二丁拳銃使いのイズウは目がいい。だから彼が言うなら本当にトウマが消したのだろう。

まさか…あの少年にそんな力があつたなんて……

あの短髪少女の方が強いと思っていたけど、違つかもしれない。

「その事……海軍は気づいているのか？」

「どうだろうな……至近距離で見た赤犬は気が付いているかもな。だからセンゴクのところまで情報がいつている可能性は高い。」

「そうか……ん？」

そういえばトウマの奴は今、どこにいるんだ？」

「……実は……」

イズウの顔色が悪い。トウマになにかあつたのだろうか？

「あいつ……そのままバランス崩して落ちてさ………ハンゴック………こともあろうくに海賊女帝”に抱きついたんだよ………。」

一発逆転の切り札になりそうな少年……トウマ………彼の寿命はここで終わったかもしれないと、ハルタは思った。

「わ…悪かったって！そんなつもりじゃなかったんだって！！
つか、あのタイミングで溶岩が目の前に現れたのが悪いんだって
！！
なんか…もう…不幸だー！！！！！」

顔を赤らめながら、頭を抱え込む上条当麻。氷塊に襲い掛かる溶岩を、右手に宿る力……”イマジンプレーカー幻想殺し”で消したのはいいのだが、そのせいでバランスを崩し氷塊から落ちて………あわてて、支えとして抱きついたモノはなんと、絶世の美女だったのだ。

「ん？ってというか、なんでこんなところにアンタみたいな人がいるんだ？

御坂がいうには一般人はみんな、なんたら諸島に避難しているって聞いたんだけどな……まさか、逃げ遅れたのか！？」

……上条は目の前にいる美女…ハンコックが”海賊女帝”と恐れられる”七武海”だとは知らない。彼の主な原作知識はアラバスタどまりで、それ以降は穴だらけだからだ。

”麦わらの一味がバラバラにされた”という事実は知っているが、誰の仕業かは知らないし、その後、彼らがどこへ飛ばされどんな運命を辿ったのか知らない。

だから、目の前にいる美女は”逃げ遅れた一般人”として認識していたのだ。

「ほう…主はわらわが一般人に見えるか？」

「えっ！い…一般人じゃないのか？」

「……なんと…わらわのことを、この戦場で知らぬものがいたとは……
まあよい…特別に教えてやろう……」

美女は相手を見下し指さしながら後ろにのけぞるポーズをとった。
それは、あまりにも見下しすぎていて、逆に見上げていた。

「わらわは”王下七武海”の1人、”ボア・ハンコック”。
その名をよく心に刻んだまま……その心にある邪心にやられるが良
い……」

両手の指でハートマークを作るハンコック。
嫌な予感がした上条は、ハンコックの美しさに顔を赤らめたまま一歩後ずさりした。

「な…なにをやる気だよ!？」

「メロメロ甘風……!」

ハートマークのようなピンク色の光線が上条を襲った

……が……

「「？」」

何も起こらない。

「おい……あの少年……”海賊女帝”の技が効かなかったぞ？」

「邪心が無いようには見えないが……」

「まあいい……もし、本当に”女帝”の技が効かぬようなら、俺たちであの少年を倒せばいいからな。」

遠巻きに2人を見ていた3人の海兵が口々に憶測をかわす。

「あゝ……たぶんだけど……俺の右手がその能力を消したんだと思う……」

「能力を消す能力じゃと？そんな”海楼石”のような効果があるわけなかるう！！」

”メロメロ甘風”^{メロウ}！！！！」

「つつぶねえ！！！！」

上条は避けたが、そのせいで後ろにいた3人の海兵が”奇妙”としか形容できない形で石像になってしまった。

「なぜ、わらわの攻撃を避けるのじゃ!？」

「いや…だって…避けないと不味いし…万が一、右手以外に当たったら不味いし……」

「つてか、こいつら…海兵だよな?お前つて……」

「スレイファロー 虜の矢”!!!!」

投げキスで作った巨大なハートマークを弓のようにして破裂させ、大量の矢を上条に向けて放った。

避けることが不可能だと感じた上条は右手を使い、自分に矢が当たるのを防いだのだが……

彼らの戦いを見ていなかった海兵達や海賊たちが矢に当たり、一気に石に変化してしまった。

「なぜじゃ!?!なぜわらわの技が効かんのじゃ?…こんなこと…あの方以來じゃ……」

「待て待て!!…なんで話の途中で攻撃してきたんだよ!？」

「…知れたことを…わらわはなにをしようとも許される……」

「なぜならば……美しいから!！」

「……………」

呆れて言葉が返せない上条だった。

「いや…確かにあなたは美人だけど……人間していいことと悪いこ

とがあるだろ？

「つてか、海賊はアンタの敵だから何も言わねえけど、一応、お前は海軍側の人間だろ？」

「なんで海兵にまで攻撃すんだよ!？」

「ふん……」白ひげ”と戦うことまでは承諾したが……わらわは仲間になるとは言っておらぬ。

男など皆同じじゃ……あの方以外は……」

「……あの方？（だれだそれ？）

でもよお……それで協力している以上さ、”仲間”っていうんじゃないのか？」

「言つたはずじゃ……わらわは何をしようとも、美しいから許されるのじゃ。」

男などどうなっても構わぬ。むしろ石になった方が邪魔なのが消えて、清々する。「

そういうと、最初に石になった3人の海兵のうちの1人を足蹴りで粉々にした。

それを見たとき、上条の中で何かがキレた。

「お前さ……男にだって命つてもんがあるんだぞ!？」

「何度も言わせるでない。わらわは……」

「命ある者は皆平等なんだ!どうなっても構わない命なんて……そんなの無いんだよ!……」

例えそれが人工的に生み出されたものであっても……

『”人間がいる”と思わせる』物理的情報の集合体のようなものであっても……

奴隷だったとしても……

生きている限り…そこにいて笑ったり話したり悲しんだりできる限り……命ある者なんだ!!

簡単に消えてはいけない大切なものなんだよ!!

消えたら悲しむ人がきつとどこかにいるものなんだよ!!

だから……それを簡単に”どうなっても構わない”なんて言うんじやねえ!!!!”

ハンコツクの動きが止まった。

そして…その美しい顔が一瞬、歪んだように上条には見えた……が、次の瞬間には元の凍てつくような顔に戻っていた。

「ぬしは…わらわが”男”という下等生物をなぜ嫌うか知らないくせに、勝手なことを言うのではない!!

わらわは何をやっても許されるのじゃ……美しいから!!!!

パフューム・フェムル
”芳香脚”!!!!”

ハンコツクは休む間もなく蹴りを連発していく。そのけりが当たった個所はすべて石と化し、崩れて行った。

最初は避けようとしていた上条だったが……

パシイ

「!?!?」

右手でなんとかハンコックの足をつかんだ。
その瞬間、ハンコックは、まるで海楼石に触れたかのように足に力が入らなくなってしまうた。

「お前がなんでそこまで”男”が嫌いになったのか俺は知らない。
でもさ、相当、嫌なことがあったんだろってことは想像つくぜ？」
「……………」

「その…なんだ？信じてもらえないと思うけど、俺はココとは違う
異世界から来たんだよ。
で…もしさ、俺がエースを救い出しても帰る術が見つからなかった
ら……………」

お前が抱いているその幻想をぶち壊してやる！！！！
そのお前の中にある最悪な出来事を消して、救い出してやる！！
…”男”ってそこまで悪いモノじゃないぜ？」

…ハンコックは黙ったままだった…

そして…彼女が口を開こうとしたとき！！

「エースくん！！！！！！
今そこへ行くぞオオオ！！！！」

野太い声が湾内に響き渡った。

見ると、巨人族の二倍以上はある巨体を持つ…編み笠をかぶった人間（？）…白ひげ傘下の海賊・リトルオーズJr.が海軍の船を持ち上げているところだった。

「やべえ！！あの犬男が船を持ち上げた時には市街地に入って”赤犬”とかいうオッサンかスクアードとかいうオッサンを探さねえと行けねえんだった！！」

慌ててハンコックの足を放す上条。

「待て。主…名をなんという？」

走り去っていかうとする上条の背中に声をかけるハンコック。
上条は振り返った。

「俺？俺は上条当麻！！って…うわぁ！！」

流れ弾をスレスレノところで避ける上条。そのまま慌てて走り去ってしまった。

「……カミジヨウ・トウマ…か…」

ハンコックの脳裏に、彼女の愛しの人…麦わら帽子をかぶった少年が浮かんできた。

彼も…” 奴隷” を…” 生きている人間” だとみなしてくれた。

ハンコックは自分の背にある…一生消えない刻印を服の上から触った。

「…異世界から来た” 男” …か…」

何もハンコックのことを知らないのに…敵なのに…” 幻想をぶち壊す” だの” 救い出してやる” だの…

…… 不思議な奴だ。

人の価値観なんて…そう簡単に変わるわけがないのに…

……ハンコックはもう一度、上条に会ってみたかったりしたくなってきた。

「オーズに気を取られていると、攻め落としちまうぞ!…」

下の方から男の声が聞こえた。

ハンコックは黙って唇に手を当てると、投げキッスを作り出した。

「「スレイファロー」
” 虜の矢” ! ! ! !」

たちまち男たちが石になっていく。

ハンコックは考えるのを止めて、戦場に向き直った。
いずれ来るかもしれない、最愛のあの方……死刑囚・エースの弟……
ルフィを待つために……

第12話 しばらく会ってないと顔って変わってたりする

「はぁ…はぁ………」

マリンフォード市街地を走り抜ける1人の海兵の姿があった。

…ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だって全員集まっている……

俺は…安全だ。…絶対に…生き残ってやる！

…そう心に誓ったはずだったのに……その決心が揺らいでしまった。

いや……正確に言えば音を立てて崩れてしまった。

中将達があんなにそろっているのに、有利に戦を進めていない。

巨人より大きい人間が…あんなにあっさりと湾内に侵入していた。

海軍が誇る巨人部隊だって……さっきの氷塊で半分がつぶれてしまっていた。

そもそも海軍の実力者…3人の大将たちだって、そこまで活躍しているわけではない。

そりゃ…青キジ大将は津波を凍らせたが…海まで凍らせたので足場をつくられてしまった。

黄猿大将だって、あの短髪の小娘が放った光線を相殺させていたが

…あの不死鳥になれる能力者に海面へ蹴り落とされていた。

赤犬大将だって……確かに、あの氷塊を消そうと溶岩を出した…

…のに、氷塊に当たった瞬間に溶岩が跡形もなく消えてしまっていた。……否。正確に言えば……氷塊の上にへばりついていた少年の右手が身体の何倍もある溶岩を消していた。それは……見間違いではないはずだ。だって……自分は”視力”を買われ海軍へ入隊できたのだ。見間違えるわけがない。

改めてそう思うとゾクウツと体に電気が走ったかのように震えた。

黄猿同等の光線を放つ少女……巨大津波をいつでも起こせる”白ひげ”……どんな攻撃を受けても再生する不死鳥……あんな巨大な氷塊を楽々持ち上げる男……それに……まるで海楼石のような能力を持った少年……

「勝ち目が……あるわけない!!」

「どこへ行く気じゃ?」

びくうっとして立ち止ると……そこにいたのは……

軍帽と薔薇を胸にさした赤いスーツ……海軍大将・赤犬がそこに立っていた。

「早く戦場にもどれ!!!」

「はぁ……はぁ……」

まさか…ここで出会うなんて…海兵は走ったせいで荒い息をしながら赤犬を見た。

誠心こめて言えば…伝わるかもしれない……

「…み…見逃してください…!!!」

死ぬことが怖くなった。家族を思うと…

足がすくむんです……!!!どうか……」

「本当に家族を思うちよるんなら…

”生き恥”をさらすな……!!!」

見る見るうちに身体が溶岩へと変化していく赤犬…

ああ…俺の人生終わった………つと海兵が思った瞬間だった。

「てめえ!!!待ちやがれ!!!」

「き…君は…!?!」

「…誰じゃ?」

はあ…はあ…つと膝に手をつき息を整えていたのは…つんつん頭の

少年……

たしか……

「君は…あの氷塊の上にした…?」

「あつ…お前見てたのか?」

つてことより……お前!今さ、何しようとしたんだよ!!!」

キリットした目で赤犬をにらむ少年……なんで海賊の少年が俺を助けようとするんだ？
海兵には理解できなかった…

「…何をしようとしたか…じゃと？
それは………こうしようとしたんじゃけん……！」

赤犬は溶岩に変化した腕を振り下ろした。

目の前に現れた少年は…先程、氷塊の上にへばりついていた少年だ
ったはずだ。

よく覚えている…確か少年の右手が自分の溶岩を消したのだ……飛
ばしたのではない。初めからなかったかのように消えたのだ。

…このことはまだ上に報告していない。
本当に彼の右手が消したのか？海楼石のようなものを仕込んでおいたのか？それとも…あの氷塊自体に細工を施しておいたのか…
不確定なことが多すぎるからだ。下手な情報を流して混乱させては

元も子もない。

……これから大事な作戦を控えているからというのもあるが……

どちらにしろ……ここで少年を潰す。潰せなかったら……その時考えればいい。

「やられるかよー!」

少年が右手を前に出すと……やはり溶岩が跡形もなく消えた。

「な……んで……」

少年の後ろにいる腰抜け海兵がオドオドと尋ねていた。

「決まってるだろ!見捨てられるか!

ってかオツサン!!なんで仲間に攻撃すんだよ!見てたけどよお……

こいつはもうとっくに戦意がなかったのにさ……

なんで”生き恥”って発想になるんだ?

死んで家族を悲しませるより……生きて帰って笑いあった方が幸せじゃねえか!」

「……海兵が”悪”かいぞくに背を向けるなど言語道断じゃからじゃけん。」

笑わせるガキだ……と赤犬は思った。

何故、海賊が海兵を助けるのだ?それ以前に海賊が正義面している

ことに腹が立った。

正義は海軍。悪は海賊なのだ。

それよりも……あのガキは、やっぱり右手で攻撃を無効にしていた。左手の方が出しやすい状態だったのに……やはりあの右手に何か隠されているのだろう。

さっさと始末した方がいいかもしれない。

「に……逃げる!!」

「アレは海軍・大将の”赤犬”様だぞ!!」

「へえ……アレが美琴が言っていた……で、あんたは海兵……なんだよな？」

「は……はい……」

「あー……不幸だ。」

スクアードって奴じゃなかったのか……」

「おしゃべりは……そこまでじゃ。」

再び身体を溶岩にする赤犬。

そして次は……右手だけじゃ抑えきれないくらいの大きさの溶岩を作り上げる。

「まだ……能力は……右手だけじゃないんだぜ!!」

ずっと握っていた左手を高く上げる少年。一瞬だけ赤犬の動きが止

まった。

それを見逃す少年ではなかった。

「とりゃー!」

ポワン!!!

少年が左手に持っていた丸い球が霧散し、辺りに煙が立ち込めた。

「煙幕…」

煙幕が収まったときには、あたりに誰もいなかった。

「サカズキ大将。作戦の準備が整いました!!」

電伝虫から声が聞こえる。

「分かった…それからセンゴクに伝えるんじゃ…」

”海楼石”に似た能力を右手に宿す少年が海賊にいるとな……」

「あゝ死ぬかと思った……」

ぐてえゝゝつとその場に横になる上条。

「御坂の奴がしっかり考えておいてくれたおかげで本当によかったぜ……」

戦争の前、美琴がイゾウから「女の子が戦っちゃ不味いだろ。言ってもいかないと思うけど……まあ……万が一のためにコレを渡して置くぜ」つと言われ渡された”ワノ国特製煙玉”……。

「どうせアンタにはガチンコ勝負は出来ないでしょ？ さっさと隙を見つけてコレを使って逃げなさいよ！」

つと言つて煙玉を譲り受けたのだった。

「にしても、アンタもありがとな。」

「い……いえ……だって……なんとなく……このまま死なせられないって思いましたから。」

ピンクの髪にバンダナにメガネを額にかけた少年が弱弱しく笑った。

煙玉に紛れて、海兵と一緒に横道に入った時に、この少年が
『こつちです！』

つと言つて安全そうな場所まで連れてきてくれたのだった。

「まったく…海賊がなんで海兵を助けたんだ!？」

ピンクの少年の友人なのか…一緒についてきていた金髪の少年が呆れた感じで声を上げた。

「だってよお…フツー助けねえか？」

「そうか?…まあ…そういうものか？」

「それより、いやぁ…助かった…ん?その声…どっかで聞いたことがある気が…」

名前…なんていうんだ？」

「ぼ…僕はコビーと言います。海軍曹長です。」

「俺は海軍軍曹・ヘルメツポだ。」

「コビーに…ヘルメツポ…って…」

ええ!?!あの贅肉だるんだるん少年とモーガンの七光りのバカ息子
!?!」

物語超序盤で登場した弱気な少年と、ゾロを処刑しようとした七光りを振りかざす少年が…目の前にいるなんて…

「えっ…昔の僕たちを知っているんですか？」

「うう……その……まあいろいろとあつてな。」

2人から目をそらす上条。…そして目をそらすとそこには、うずくまっつて震えるさっきの海兵がいた。

「なんで…俺を……海賊のアンタが……」

「あゝ…俺つて海賊じゃないんだよ。なんつーの？一般人なんだけどエースを助けに来たつて感じか？

それにさ、人を助けるのに理由つているか？

俺はあの赤犬とかいうオツサンの正義に共感できなかったから助けただけだつて。」

「……………」

「義のために死ぬよりさ、しっかり生きて帰って家族と笑う方がいいに決まってるだろ？」

「…あ……ありが……とう……！」

海兵はオウンオウンと泣き始めた。

しかし…これから、どうしたらいいのか…

美琴から言われた作戦は、『スクアードが白ひげを刺すのを止めさせる』こと。

そのために『スクアードが赤犬の言葉に騙されている途中で乱入し、煙玉を使ってスクアードと一緒にその場を離れる。そして、安全そうな場所で説得を試みる』…ということ。

だが、もう頼みの綱の煙玉は使ってしまった。
今からもう一度、赤犬とスクアード探しをしても構わないが、逃げ切れる自信は0%だ。
ぶっちゃけ、あの怖面男ともう一度、ご対面したくない。

「…き…聞いた！？ヘルメツポさん…今の作戦！？」

上条が考え事をしている間に、コビーが何か作戦を無線か何かで聞いたらしい。

「ああ。」

「一体どうしたんだ！？」

上条が尋ねると、一瞬、言おうか言わまいか戸惑う顔を見せていたが、言うことに決めたようだ。
コビーは半分、震えていた。

「エースさんの処刑を予定を無視して執行するって…!!」

「はあ！？そ…そんなことしたら…!!」

そんなことしたら…”白ひげ”が黙っていない…はず…何を考えているんだ？

「ん…あれって…」
「何か降って来るぞ？」

海兵はいまだに泣いているので動かなかったが、上条・コビー・ヘルメツポは上を向いた。

なにかが…落ちてくる……

「だから おめーはやりすぎだっただよー!!」

「コイツのまばたきのせいだ」

「ヴァターシのせいにする気!!!? クロコオ!!!」

「どーでもいいけどコレ死ぬぞ!! 下は氷はっただぞ!!!」
「！」

その声は他の海賊・海兵達にも聞こえたらしい。

戦う手を止めて上を見上げる者が増える。

処刑台の上のエースも上を見上げ…ラストオーダー打ち止めも満面の笑みで上を見上げる。

「来た! ようやく来たよ!! っつてミサカはミサカは喜びを全身で表してみたかったりするんだけど、手に重い手錠が付いていて表せなかつたり!!」

「来たっつて…誰が…?」

エースは言葉を失った。…落ちてくるものの正体に気が付いたからだ。

「ああああああ……」

あ！おれゴムだから大丈夫だ！！！！」

「貴様一人で助かる気力ネ！！！！ 何とかするガネ！！！！」

「ためエの提案なんて聞くんじゃないやなかつたぜ

麦わらア！！ 畜生オ！！！！」

「こんな死に方 ヤダツチャブル！！！！

誰か止めて~~~~~ンナ！！！！」

「うち…うるせエなア……」

「安心してください！！落ちるのは海のはずです……と、ミサカはミサカが抱いている落下の恐怖を我慢して、皆さんを安心させようと叫びます！！！！」

そう…落下してきたのはインペルダウン脱走組。

「ルフィ…と一方通行に御坂妹！？」

あっ…クロコダイルに…バギーに…だれだあの顔でか！？」

原作を知らない上条は驚愕の声をあらわにした…

第13話 空から少女…じゃなくて脱獄囚が落ちてきたら、パズーは助けなかつ

「ど…どういこと…？」

万が一…上条に頼んでおいた「スクアード説得作戦」が失敗に終わることも考え、船内に隠れていた御坂美琴は自分の目を疑った。

監獄・インペルダウンから脱走したルフィ達が乗ってきた軍艦は、急に大きな津波に攫われ、その後突然海面が凍った為に、その津波の上に取り残されてしまう。

まさか”白ひげ”VS”青キジ”の仕業だとは知らないルフィ達…
…というより、主にバギー一行がパニックに陥る…そのうちにク
ロコダイルが、戦争はすでに始まっていることに気が付く…

そこで、ルフィが状況を打破するために、”凍った波を艦で滑り降りて抜け出す”という作戦を立てるのだが、賛同はあまり得られない…。

そんな時のことだ。

”全艦全兵に連絡！”

目標はTOTZ 陣形を変え通常作戦3番へ移行…準備ぬかりなく進めよ 整い次第予定を早め…

「エースの処刑を執行する」

という無線が軍艦に入ったのだ。

エースの処刑が早まってしまふ…そこで、これを聞いたルフィ達はエース救出に向かうべく、急いで艦の下にある氷を破壊……したのはいいのだが……

「ルフィ達に乗った艦は、滑り落ちる事なく逆方向に落ちて……みんなの注目を浴びながらド派手に参戦！……つてハズなのに……

なんで一方通行アクセラレータがいるわけ！！！！！！」

美琴は、はるか上空からダイブ中の人影の中に、見覚えのある白髪の少年をみつけたのだった。

まさかトリップしてきたのが自分と上条だけではなかったのか……と驚く……が、よく考えてみると、エースの隣にちよこん……と座っている幼女は、どこからどうみても学園都市の産物……妹達シスターズの1人だ。…他にトリップしてきた人がいてもおかしくはないのだが……

「でも…よく、あの第1位アクセラレータが人助けする気になったわよね……それ以前に、あんな奴でも漫画読むんだ……」

アクセラレータ一方通行的にはエースなんてどうでもいいのだが、エースの横で今にも処刑されそうな幼女…ラストオーダー打ち止めを救出するために来たなんて、美琴が知るはずがない。

夏休みに起こった、とある一件から…いやその前から”残虐で悪党
キャラの学園都市第一位の能力者”
と認識していたのだが、新たな一面をみたような気がして、なんと
なく複雑な気持ちになる美琴だった…。

…さて、軍艦が空から真つ逆さまに落ちてきたことに海軍も海賊
も…シャボンディ諸島で戦争を見ている一般人も何事か！？と注
目する…その中で、まっさきに姿を現したのは…

「はあ…はあ…いた…」

赤い服に…麦わら帽子がトレードマークの少年が荒い息をしている
…
…
それを見たエースは目を見開き…

「る…ル…」

「あなた一方通行ああ！！！！ミサカを迎えに来てくれたのねって、ミサカ
はミサカは喜びのあまり満面の笑みを浮かべてさけんでみたりー
ー！！！！」

……エースが力いっぱい、ここまで来てしまった弟の名前を叫ぼうとしたのだが、打ち止めが遮ってしまった……。
ルフィの方も、エースを見つけたら開口一番で「エース~~~~!!」
って叫ぼうと思っていたのに、見知らぬ幼女が、エースと一緒に処刑台の上にはいたので、驚きのあまりリアクションが出来なかつたりする……。

「まったく……世話かけんじゃアねエっての!!」
無事かア、打ち止めラストオーダー!!?」

白髪に赤眼が特徴的で、近代的な松葉づえついている少年が声を張り上げた。

「……おい……アレはだれだ?」

センゴクは、落下してきたのが、クロコダイル・ジンベエ・イワンコフといった面々からして、インペルダウン脱走組だということは分かっていたし、この戦場に”このような形”で七武海のジンベエが来たので、”ジンベエが七武海の称号剥奪を覚悟して動いている”ということに怒りを感じていた……。

だが、それを上回る以上に突如、現れた少年に得体のしれない不安感を感じていた。

自分の知らないザコ海賊囚人かもしれないのだが、少年の鋭い瞳孔……ただずまいから強い気迫みたいなものをセンゴクは感じていた。

「はっ……すぐさま調べ……」

「学園都市・最強の能力者……アクセラレータ一方通行だよってミサカはミサカはセンゴクさんに教えてあげちゃったり！」

エースの娘（？）が海兵の言葉を遮ってセンゴクに笑顔を向けた。

「アクセラレータ……？聞いたことがないぞ？」

「あの人は強いよ……また……助けられちゃうなってミサカはミサカは、せつかく今度はミサカがアノ人を護るって決めたのに早々にまたあの人に頼ることになったから……しょんぼりしてみたり……」

「強いのだな……どんな強さなんだ？」

ダメもとで尋ねるセンゴク……だったが……

「平たく言えば”反射”だよってミサカはミサカはアノ人の技を教えてあげちゃったり！！」

これはアノ人を売ったのではなく、教えたところで勝てるわけがないって思うからなのだってミサカはミサカは説明を追加してみたり

「！！」

「……”反射”……か……」

超新星の1人：南海出身の3億5千万ベリーの賞金首：”ユースタス・キッド”の能力：”反発^{リベル}”のように、磁力で鉄を操る能力なのだろうか……

まあ…直に見た方が早いのかもしれないな……
そう思うとセンゴクは、戦場に目を戻した。

「ん？クロコボーイは？」

さっきまで近くにいたはずの元・七武海のクロコダイルの姿がないことに気が付くオカマ王で革命軍の幹部：イワンコフ。
それとほぼ同時の事だった。

「！」

白ひげの背後にいつの間にかクロコダイルが回り込んでいたのだ！
そもそも、この男の中に”エースを助ける”というキーワードは全くない。

元々は敵だったルフィに協力したのは、恨みに思っていた”白ひげ”の首を取るためだった。

そして今！その悲願を達成しようと行動に移ったわけなのである。

「あそこだ！！
あんにやる！抜け駆けしやがって！！！」

クロコダイルより、はるかに実力が劣るのに”白ひげ”の首を本気で取るつもりでいたバギーが叫んだ。

「クロコダイルが”白ひげ”を狙った！！！！」
「親父いい！！」

口々に叫ぶ”白ひげ”傘下の海賊たち…

「久しぶりだな…」白ひげ”！！」

今にもクロコダイルが襲い掛かろうとしたその時！！！！

ドカーン！！

ルフィがクロコダイルを蹴ることで攻撃を阻止したのだった！！
本来なら自然系ロキアの彼に触ることは出来なかっただろうが、”スナスナの実”の能力者で砂人間のクロコダイルは”水”が弱点だ。
さつき海から落ちた時にルフィの足は濡れていたの、攻撃するこ
とが出来たのだった。

邪魔されたことでクロコダイルのご機嫌は斜めだった。

「俺とお前との協定は達成された……なぜ”白ひげ”をかばう!?」
「やっぱり、このオツサンが”白ひげ”か……」
「じゃあ手を出すな。エースがこのオツサンを気に入ってるんだ!」

…そんなルフィを見た”白ひげ”は彼の麦わら帽子…を見て”ある男”を思い出していた。

「小僧…その麦わら帽子…昔よく”赤髪”がかぶっていた奴によく似てるなあ……」

「おっさん…シャンクスを知ってるのか!?」
これはシャンクスから預かってんだ。」

振り返って”白ひげ”を見るルフィ…その顔を見た”白ひげ”は、
エースが手配書片手に自慢げに話していた”弟”を思い出した。

「兄貴を助けに来たのか？」

「そうだ!!!」

「相手が誰だかわかってんんだろうな

おめエごときじゃ命はねエぞ!!!」

「うるせエ!!! お前がそんな事決めんな!!!」

おれは知ってたぞ。お前海賊王になりてエんだろ!!!

”海賊王”になるのはおれだ!!!」

堂々と”白ひげ”の気迫に動じることなく言い放つルフィ。

「……………クソ生意気な……………」

ニヤリと笑みを浮かべる白ひげ。

…それはどこか嬉しそうな表情だった。

「足引つ張りやがったら承知しねエぞ ハナツタレ！！！！」

「おれはおれのやりてえ様にやる！！！！」

エースはおれが助ける！！！！」

ルフィは”白ひげ”に頼る様子を一切見せていなかった。

自分の兄貴は自分の力で助ける！！

そうルフィの顔に書いてあった。

「……………ふん……………邪魔しやがって……………」

誰しもが”白ひげ”に臆しないルフィに白目をむく中、クロコダイ
ルは、もう一度、”白ひげ”を倒そうと攻撃準備に入ったのだが……………

「!?!?身体がうごかねえ……」
「アンタは動かないでくれる?」

クロコダイルの前に現れたのは……さっきまで行動を共にしていた、
”正義の門”を開けた少女にそっくりな少女だった。
服装も…身長も…髪型も……違うのは、さっきまでの少女には表情
がなかったが、目の前にいる少女は、感情の豊かさが表情にハツキ
リと出ていた。

「…てめ…さっきとずいぶん様子が違うじゃねえか…」
「さっき?……つて…ええ!!妹達シスターズがもう一人、トリップしてたの
!?!?」

まだ海に半壊した状態で浮かんでいる軍艦の中に自分とそっくりな
少女を見つけて、驚く少女…

「…まあ、一方通行とか上条あいつもトリップしてきてるわけだし……」
「トリップ?……というかアレはお前の妹なのか…?」
「うん………いいや。妹で。」
まあ、それよりも……一旦は親父から離れてもらっつわよ。」

相変わらず身体が思うように動かない……というより全く動かないク
ロコダイル…

「…能力者…か…」

「まあそんな感じね。」

私の発電能力の応用で、磁力を操作して…あなたの砂を操っている
ってわけ。」

「…つち…」

満足げに話す少女に舌打ちをするクロコダイル……

クロコダイルは全身砂に変化できる砂人間………目の前にいる少女に”砂自体”を操られてしまっているため、全身のコントロールを奪われているようなものなのだ。

「…こんな小娘に………!!」

”白ひげ”からどんどん引き離されていくクロコダイル……

「あら、恥じることはないわよ。」

だってこの美琴様は学園都市・第三位の能力者なんだから!」

にっこり笑う美琴。…それに対し聞きなれないキーワードに眉をかめるクロコダイル。

「ガクエントシ?どついう意味だあ?」

「知らなくて結構。さあしばらく大人しくしててね!」

満面の笑みを浮かべ、クロコダイルを船からはるか遠くへ追い出す
美琴。

「さて…アイツはしっかりやってるでしょね？」

今頃…上条は赤犬と向かい合っているのかな…っと市街地の方を眺
め見る美琴だった…。

第14話 銭形がルパンを捕まえる日なんて一生来ない

「じゃあ、俺はもう行くな!!」

「き…気を付けてくださいね!!」

「生き残れよな!!」

敵である上条当麻に敬礼をするコビーとヘルメツポ。

一般人とはいえ海賊に協力している上条は、海軍の海兵である2人からしてみると敵ではあったが、先程、上条が敵であるはずの海兵を命がけで助けたのを見て…敵とは思えなくなっていたのだった。

きつとどこか…別の所であっていたら友達になれたかもしれない

……

コビーとヘルメツポにとって、そう感じる上条との出会いだった。

上条は振り返って手を大きく2・3度振ると走り出した。

「ったく…早くしねえとやばいかもな!!」

上条当麻が向かう先は”モビー・ディック号”。

スクアードへの説得が出来なかった……

このままでは、美琴が話してくれた原作通りならば、”白ひげ”がスクアードに刺されてしまう!!

”白ひげ”…こと親父と話したのは、たった数分だったが、突然やって来た謎の人物である上条と美琴を自分の”息子”と”娘”として暖かく迎え入れてくれるような大きな器…にひかれたのだろうか？

まだ出会って間もないのに上条は”彼を死なせたくない”と思うようになっっていた。

彼を死なせないために、”白ひげ”にスクアードが裏切つて刺そうとしているつといることを一刻も早く伝えなければならぬ。

上条はエース救出を一先ず置いておいて、親父救出（？）に向かったのだった。

処刑を速めるとは言っていた…でも、論理は分からないが、ともかく戦にルフィやあの一方通行が参戦したのだ！
これほど心強いことはない。

エースは彼らに任せて、自分は目の前で、危険が迫っていることを知らない命を助けようと走った。

だが、彼は1つ…大きなことを忘れていた…

彼がここまで来た道のりの半分は、ジョズの取り出した氷塊にしがみつく形で進んできたということ…

今度は自力で、その道のりを進まなければならない…

とはいっても、8月31日の日なんかは、全く手を付けていなかった宿題に追われながらも、昼間はアステカの魔術師と命を懸けた鬼

ごっこをし……ファミレスであらぬ罪を着せられたせいで店員さんたちから追われながらも攫われたインデックスを探しに走り……その延長戦でインデックス誘拐犯である魔術師・闇咲逢魔の願いを聞くため、学園都市から外出しなければならず、セキユリティを強行突破し……また、新学期があるので夜中に再度、強行突破して帰還した……というほぼ、走りまくりの一日を送ったことがあったので、この程度の距離は彼にはどってことないのかもしれない……

「はあ……はあ……」

荒い息をしながら上条は走り続けていた。

(ちつくしよー！全然距離が縮まらない気がする！！)

上条は軽い舌打ちをした。……だが、諦めないで走り続けていると

……

ドンッ！……！

とにかくモビー・ディックに向かって走り続けていたので周囲への注意がおろそかになっていたのである。誰かと激突してしまったのだった。

「わ…わりい!!」

「す…すみません!!」

「……た…たしぎい…!!?」

上条がぶつかつた相手は、ゾロの亡き幼馴染のくいなに外見も性格も瓜二つ…で、額にメガネをかけている海軍の女曹長…”たしぎ”
だつた。

「え…私の事…しっているんですか?」

「えつと…まあ…そう!あの、スモーカー大佐の一番の部下なんですよね?」

俺って、大佐のファンだから…その人の元で戦えるたしぎさんって凄いなあ…って思ってたんですよ!!」

…嘘…とは言い切れない。

ルフィ達から見たら敵である海軍の中でも、上条が…ファンとまではいかないが、まあ気に入っているキャラが、スモーカーとその部下であるたしぎだつた。

「す…凄いだなんて…というか…その…大佐じゃなくて准将ですよ?」

「えっ!!そうだつたんですか!??ってことは…たしぎさんも出世したんですか!??」

「まあ…曹長から少尉になりました。」

「へえ…!!。おめでとつ…ぞいます…!!」

上条がほめると、戦場なのに嬉しいのか顔を赤らめるたしぎ…
だったが、すぐに何かに気が付いたようだ。

「それはそうと、一般人が何でこんなところにいるんですかー！
？」

…：…どうやら、上条の事を勘違いしているようだ…

まあ…：服装からしたら標準的な高校生の着る制服を着用している上
条は、海軍にはもちろん、海賊にはあまり見えない…

が、この戦場の中、海兵でない格好をしているものは海賊としか考
えられないのに、たしぎは会話の内容から”一般人”と認識したよ
うだ。

まさか、海賊が自分たちの事を”ファン”というわけがない…：と
考えたのだろう。

だが…：それはある意味、上条にとって好都合であったかもしれない。

たしぎは能力者ではない、剣士だった。

だから頼りの右手は通用しない。

このまま一般人と誤解してくれていた方が、何かと助かるかもしれ
ないと、上条は考えた。

「えっと…：まあ…：確かに一般人ですけど…」

「ここは危険です！！私が誘導するので安全な場所へ避難しましよ

うー!!」

「いや…その…俺には用事が…」

「用事？」

「えっと…そう！モビー・ディック号に攫われた知人が乗っているとかいないとか聞いて…」

攫われてはいないが、知人（白ひげ）が乗っているのは確かだ。

上条は冷や汗を流しながら、たしぎから目をそらす。いかにも怪しい雰囲気だった……彼女はそんなことに気が付いていないようだ。

「攫われた知人がですか!？」

「え…ええまあ……」

「その方は私たちが責任を持って保護するので、貴方は避難してください！」

助けたいのは分かりますが、あの船は世界最強の男：“白ひげ”が乗っています。下手に一般人が動く、あっという間に死んでしまいますよ!？」

…まさか、その”白ひげ”を助けに行くなんて言えない…

「それでも、俺は…」

「ダメです！ほら、行きますよ。ついてきてくださいね？」

「たしぎいー！ー！何やってんだ!ー!」

少し離れたところから放たれた怒声。

「は…はい！なんでしようか、スモーカーさん！！」

「なにをチンタラしてんだ！？」

巨大な十手を振り回しながら、こちらを見てくるのは葉巻を2本啜えた男：

海軍大佐…じゃなくて准将のスモーカーだった。

「逃げ遅れた一般人を保護しようとしていたんです！！」

「一般人だあ〜？」

スモーカーの目が上条を捕えた。

「…こいつのどこが一般人だ！！そもそも、こんな戦場に一般人がいるわけねえだろ！！」

「え…でも…」

「シャボンディに避難する際に、住民全員避難船に乗ったかどうか、チェックしてから避難船は出航したんだ。つまり残っている奴はいねえはずだ。」

「…！？そうなんですかー！！？」

いや、そのくらいのこと知っておけよ…っと思の中でツッコむ上条だった。

「騙したんですね!？」

「いや…騙してなんかねえって!!俺は本当に海賊じゃない、ただの平凡な高校生であり一般人だし……あの船に用があるのも本当だし……」

「問答無用です!!」

上条に向かって刀を振り上げるたしぎ。

「ふ…不幸だ…!!!!」

バシィィ!!!!

「なっ!？」

「…あ……」

上条は、頭上に振り下ろされた刀を両手で受けていた……すなわち……

「真剣白刃取りい…!!!!?」

たしぎと上条の声はもった。

「ば…バカな…実戦でコレが出来る人が存在するなんて…」

「えっ？実戦向きの技じゃないの？」

「当たり前ですよ！！それは実戦向きの戦術ではないんですよ！？」

「へ…へえ……………」

「つたく…………ボサってしてんなら俺が殺るぞ！」

白い煙が上条の方へ向かってきた。

そう…たった一人の少年…上条を仕留めるのに手間取っている部下を見るに見かねたスモーカーが、己の手で上条を仕留めようとして来たのだ！！

「ホワイトスネーク！！！」

スモーカーの腕全体が蛇型の煙に変わり、上条を捕えようとした。

そう…海軍准将・スモーカーは”モクモクの実”の能力者で煙人間だ。

身体を自由自在に煙に変化させることができるのだった。

だから…通常なら物理攻撃なんて喰らわないはずだった…が…

「そう簡単につかまってたまるか！！！」

上条は右手に宿る幻想殺^{イマジンブレイカー}で、自分を捕えようとするスモーカーの

腕を、煙から元に戻すと、そのまま一気に彼の腹めがけて渾身の拳を放った。

「!?!」

自然系ロギアの能力者で煙に変化することで物理攻撃は無効化されるはずなのに、拳があたり一瞬、理解が出来ないスモーカー。

「煙の俺に攻撃しただと!?!……まさか……」 覇気” か?

いや……そんな感じには見えなかつたな……」

” 覇気” ?なんだよそれ……(後で御坂に聞こうか?)」

「……しらねえんだな……なら……… 新手の能力者か!?!」

そう言つて身の丈ほどもある十手を背中から引き抜くスモーカー……
上条はそれを見て焦った。

まさか……もう一度” 真剣白刃取り” が出来るとは思えない……

あれに当たつたら………” 死” が待っている気がした………

(つくそおー俺はこんなところで死ぬわけには………)

その時、現在の上条にとって都合のいいモノが目に入った。
彼にとつては迷惑かもしれないが、どうしても上条は船に行かなければならない。

となると………彼を利用するしか………なかつた。

「(すまん!!) …… ああ!! あんなところに” 麦わらのルフィ” が
!!!!」

「なんだって!!」

攻撃する寸前で、攻撃の手を止め、上条の指した方向を見るスモーカー…
確かにそこには、海軍大佐” 黒檻のヒナ” の攻撃をかわして進むルフィの姿が…

「麦わらあ————!!」

すぐさま身体を煙に変化させると、ルフィの方へ飛んでいくスモーカー。

あわててたしぎも後を追っていく。

「…助かった…」

元々あの二人組は自分たちの管轄であった” ローグタウン” で捕え損ねたルフィを捕まえるために、グランドライン偉大なる航路入りしたのだ。何があっても” ルフィ” を捕えることが最優先なのだ!!

「…なんかルフィとスモーカーの関係って、ルパンを追いかける銭形みたいだな…
って、こうしている場合じゃねえや!!」

2人から攻撃される心配が一先ず無くなったので、先へと上条は走り始めた……

危険が迫っていることを知らない親父の待つ船へと……

第15話 昨日の敵は今日の友 (前書き)

お気に入り登録件数が100を突破しました!!

ありがとうございます!今後も精進していきたいと思えます!

それから、この回からオリキャラを少しずつ登場させるつもりです。

第15話 昨日の敵は今日の友

「ジョ ダンじゃな いわよ う！」

くるくると回りながら海兵を蹴り飛ばしていく脱獄囚Mr.2…ボン・クレー。

忘れている人もいると思うので書いておくが、原作ではインペルダウンに残った彼（…いや彼女というのか？）だったが、ミサカの能力のお蔭で彼が残る必要がなくなり、ルフィー一行と一緒にマリノフオードに来ていたのだった。

「もう！ 麦ちゃんと離れちゃったじゃないの！
一体どこに行ったのかしらー！！！」

きよろきよろと自分の友人^{タチ}であるルフィーを探すボン・クレー。おそらく処刑台にいるエースの方へ向かっているのだと推測はされるが……
あの場所には、海軍の元帥と中将のガープがいる……：寿命を削つてまで治療をし、イワンコフが撃ちこんだテンションホルモンでなんとか身体を活性化させて動いているルフィー……：つまり本当は見た目より体はスタボロで動けないはずなのに、それを酷使して大技を繰り出し続けているのだ……。

その辺の雑魚とならやりあえる身体だと思うが、そんな大物を相手

路地の壁に向かって、せつせと何か作業をする人影を見たのだ。

「ちよつとー！？あんた何者！？」

人影はピタリ…と動きを止めて、ゆっくりとボン・クレーの方を向いた。

「って…なにしてんだよ…アイツ…」

上条は自分の目がおかしくなったのかと思った。

そう…あのラストオーダーとか呼ばれていた少女を助けるために来

たはずの一方通行が、何故か助けに向かわずに、海兵…ではなく海賊を倒しまくっているのだった。

「つてめ！！なにしてんだよ！！」

上条が呼びかけると、一方通行は不気味な笑みを浮かべて…おそろく足元のベクトルを操作したのだろう…高速でこちらに近づいてきた。

「つて、お前の”反射”は俺には効かない事忘れたのか!？」

右手で突進してくる一方通行アクセラレータの顔面を殴る上条。案の定、あらゆる能力を打ち消す右手は、一方通行の反射にも例外ではなく、メキッという音とともに、彼は殴り飛ばされた。

「……………つっ!?!?……………おい…なんでテメエがこの世界にいんだア？」

一方通行が立ち上がると、上条を見て言った。
が、ここで上条は違和感に気が付いた。

「おい…お前…俺だと分かかって突進んしてきたんじゃないのか？」
「突進？俺はそんなことしてねエぞ？」

おかしい…何かがおかしい…上条の中で違和感が広がっていく。そんな中、一方通行は何かに気が付いたのか、軽く舌打ちをして首筋についているデバイスの電源を切った。

「って…いつの間にかに電源がついてんじゃねエか。」

「電源？なんだよそれ？」

「あア？…これがねエと、今の俺は能力が、たった15分しか使えねエンだよ。」

まア、予備はたンまりとあるが、もったいねエだろオ？

「…か、テメエまで、なんでこの世界に来てンだ？」

「制限があるなら、なんでさっきまであんなに能力使いまくってたんだよ！？」

「何言つてやがる？俺はこの戦場に来てから一度も能力を使った覚えはねエ！！」

「じゃあ…さっきまでは一体…！」

「あれ？…一体どうしちゃったのかなあ？」

女の声が2人の耳に届いた。

声が出た方向を見ると、そこにはマントを羽織った小柄でフサフサした髪をした女性がいた。

見た感じからすると、海兵ではなさそうだ…私服っぽいし…だが、「白ひげ”の船では、まだ見たことない顔だった。

…彼女のはいている”網タイツ”からして、インペルダウンの脱獄囚だろうか？なんか分からないけど、脱獄囚の中には”網タイツ”を吐いている奴が結構いたし…

「その子は私の支配下にあったはずなのに……なんで洗脳が解けてんの？」

「洗脳？支配？どういうことだ？」

「……つーか、てめエ……インペルダウンの脱獄囚じゃなかったのかア？同じ船に乗ってたから、てっきり脱獄囚かと思っただぜエ」

「まつさか〜！私はね……」

バサリつとマントを裏返すと……そこには白地に”正義”の文字が

……

「私は海軍本部の中佐・ヨークシャー！」

インペルダウンに駐屯中の海兵で、あんたが軍艦を襲っているときは、たまたまトイレに行ってたから助かったのよ。

で、あんたのせいで死んだり瀕死になった海兵達の敵討ちをするために、脱獄囚になりすまして行動を共にしてたってわけ。

幸いにも、私……網タイツはいてたし……」

「……でもよ、どうやって洗脳したんだよ……こいつを。」

「簡単簡単！私は超人系悪魔の実……ファタファタの実”の能力者。簡単に言えば、対象者に幻覚を見せる能力なんだけど……ちよつとばかし、条件が合ってね……」

「条件？」

「そう。それは一度、幻覚を見せる対象者の背中に触れないといけないのよ〜。

だから、さつき落ちてくるときに、貴方の背中に触れさせてもらっただわ。

で、あとは貴方に幻覚を見せるだけで完成！

私の幻覚は超一級ものだから、幻覚をかけた相手の意識を奪い、洗

脳状態にすることなんてお手の物なのよ〜。
入隊したのが最近だから、中佐だけど…実力は少将にだって負けな
いって思うわ。」

うつすらと笑みを浮かべて話すヨークション。

「で…あなたにかけてた洗脳は何か分からないけど…解けたみたい
だわね……」

でも、洗脳したのは貴方だけじゃないのよ!!!」

その言葉を言った瞬間、上条と一方通行をズラリと取り囲む脱獄囚
……バギーについていたはずの脱獄囚からイワンコフについていた
脱獄囚まで…さまざまな脱獄囚に取り囲まれていた。
いや…脱獄囚だけでない。

ここに来てからさらに、洗脳した人を増やしたのだろう…なかには
”白ひげ”の海賊も交じっていた。

「さあ…終わりよ〜!!!」

さつき貴方は「15分しか使えない」って言ったわよね？

私が貴方を洗脳して、貴方の能力を使ったのは14分56秒。

電源をつけたとしても、たったの4秒で何ができるって言うの？

さあ…やってしまいなさい!!!」

海賊やら脱獄囚やらが一斉に彼らを襲う。

が………

「てめエ…自分の都合のイイとこしか聞こえてねエンじゃねエの？」

キンっという音がしたかと思うと、彼らを囲い込むように襲いかかっ
つていった海賊やら脱獄囚やらが、とたんに吹っ飛んでいった。

「デバイスの替えは、たんまりあんだぜエ？」

「こ…この4秒の間に…取り替えたの？」

「俺を誰だと思ってるんだア？」

学園都市最強の能力者だぜ……もともと、今はどうだか分かんねエ
がな………」

ニタリ…と笑う一方通行。

「つく…なら……『剃^{ソル}』！！」

6種類の超人的体技…通称…”六式”のうちの瞬発的に加速し、消
えたように移動する歩行術…”剃^{ソル}”を使い、瞬時に上条の後ろへ回
るヨークシヤン。

「貴方はさっき、この子の攻撃が効かなかったわよね〜！」

「じゃあ貴方を洗脳して、この子を倒してもらおうわー！」

トントンとヨークシャンが上条の背中に触れる……………が、

「あれ？」

何も起こらない……………上条は苦笑した。

「あ…たぶん、俺の右手の影響だと思う…。」

この右手のせいで”念話”^{テレパス}が聞こえなかったし、黒子の”瞬間移動”^{テレポーション}

”も効かなかったしな…”

「そ…そんな……………」

「んじゃア…覚悟はいいかア？」

一方通行の能力が炸裂する。

あっけなくヨークシャンは”反射”され、氷の割れ目から海へと落ちて行っただけ……………

「うわ…相変わらず恐ろしい能力だな……………」

「テメエの能力の方が恐ろしいだろ……………」

「まア、俺は先へ行くぜ」

彼の視線はすでに打ち止めの方を向いていた。^{ラストオーダー}

「んじゃあ、俺もさっさといかねえとな。」

一方通行とは反対方向…モビータック号の方を向く上条……だったが……。

「なんだよ…アレ……」

彼の目に映ったもの…それは……

数十体の、まるで”クマ”のような耳の生えた巨大な男がズラリと並んでいたのだった……

第15話 昨日の敵は今日の友（後書き）

一応オリキャラ紹介をしておきます。

・ヨークシヤン

所属：海軍本部・少佐でインペルダウンに勤務中（警備するため）

性別：女

容姿：ヨークシヤン・テリアみたいに小柄でフサフサした長い髪の毛の持ち主

悪魔の実：ファタファタの実

（ファンタジー＝幻術ということ）

対象者の背中に触れることで、触れた相手に幻覚を見せ、幻覚を強めて洗脳まですることが出来る。

一方通行に再起不能にされた部下たちの敵を取るため、脱獄囚のふりをする。

見事、ダイビング中に一方通行の背中に触れることができ、洗脳することが出来たのだが、上条さんの右手のせいで計画がすべて崩れ、最終的には海に落とされた。

海の落とされたので、たぶん今後の出番はない……と思う。

第16話 ヒーローは遅れて登場する

「……とうとう来たわね……」

美琴はゴクリ…とツバを飲んだ。

開戦から約1時間半……七武海のバーソロミュー・くまと同じ姿の
パシフィスタが約20体も現れた…

”パシフィスタ”とは、海軍の天才科学者Dr・ベガパンクの改造
手術による「人間兵器」……

王下七武海バーソロミュー・くまを再現した肉体をベースに鋼鉄以
上の硬度を持ち、口からは大将黄猿のレーザーを再現した金属をも
溶かすレーザーを発射する事が可能とした…人間兵器…

ちなみに、1体造る費用は、軍艦1隻分に相当するらしい……。

そのパシフィスタを率いているのが、海軍本部科学部隊隊長……Dr
・ベガパンクのボディガードで、黄猿の部下である”戦桃丸”
……名前だけ聞くとパシフィスタ同様、人間兵器のようなものを想
像するかもしれないが、こちらはれっきとした人で、昔話に出てく
る”金太郎”のような姿をしている。

「…つく…ここまででは原作とあまり変わってないわね……
何故か打ち止めが処刑されそうになっていて、氷塊が解けな
ラストオーダー
かった事と落ちてきたメンバーに一方通行と妹達とボンちゃんがい
アクセラレータ シスターズ
た以外は……」

原作通り…少し前に傘下の船を”白ひげ”の命令で移動させておいたため、包囲することが出来なくなったのに、それでも…包囲枠からはずれた”白ひげ”傘下の船から攻めていく海軍……

こうやって船の上から戦場を見ていると分かる……原作通りにパシフィスタが現れた途端…海兵たちが氷上から引き下がっていく様子が……

逃げているのではない……誘い込んでいるのだ……これから海賊たちが目の当たりにするであろう…地獄へと……

「…でも、そんなこと…させないんだから！
………ん!？」

その時……一人の男が船に上がってきたことに気が付いた美琴……
その人物が誰であるか気が付いた途端、ため息がこぼれた。

「…はあ…仕方ないわね……」

その人物はどんどん…近づいてくる……

「止まりなさい！」

美琴は指の上にコインを乗せると、手を男の方に突き出して言い放った。

自分の額から、緊張のせいか、うっすら汗がにじむのが分かった。

「…そこをどいてくれねえか…嬢ちゃん？」

「どかないわよ…」大渦蜘蛛スクアード”……あなたは間違ってるんだから…」

目の前にいる男…大渦蜘蛛海賊団船長で額に蜘蛛のマークを持つ海賊…スクアード”を美琴は睨みつけた。

「私の話を聞きなさい！聞かないと……うつわよ？」

「コレの威力は一度…見たと思うけど？」

開戦直後に美琴は超電磁砲レールガンを一度、放っていた。その威力は海軍大将の黄猿のレーザーに匹敵するほどだということは、スクアードも見ていたはず……

こうやって脅しをかければ……話を聞いてくれるはず……美琴はそう思っていた。

だが……

「すまねえな、嬢ちゃん……」

「え……っ!?!」

スクアードが瞬時に美琴との距離を詰めてきたのだ!

近づいたところまでわかったが、急なことで慌てた美琴は、とっさに能力を使おうとしたのだが、手遅れだった。

「かはあっ!!」

スクアードの拳が一発、美琴の腹に入った。腹の空気が抜けて……気が遠くなっていく……

「嬢ちゃん的能力は確かに強い……だが……」

実戦経験は俺の方がはるかに上だ……悪く思わないでくれ。」

どこか苦しげに言うスクアード……

「ま……待ちな……さい……」

だんだんと端の方から暗くなっていく視界……美琴は去っていくスクアードを引き留めようと、必死に手を伸ばしたが……視界が完全

に黒く染まり……意識が飛んでしまった。

「ちくしょー！ー！おい、御坂！すっかりしろー！」

数回、ゆするが起きる気配がない美琴。……だが、脈はあるみたいなので、上条当麻はひとまず彼女は置いておくことにした。

美琴の様子からして、気絶したのはついさっきの事……だと思う。

美琴から戦争開始前にもらった情報から考えると……これを行った人物は1人しか思いつかない……

この船に乗っているのは……美琴の他に……”白ひげ”が乗っているが、まさか彼が手を下したとは考えにくい……となると……

「……もう、スクアードって奴が来てるのか！？」

やばいじゃねえか！このままじゃ……」

上条は”白ひげ”がいるだろうと思われる方向に走った……このま

まだと……原作通りに”白ひげ”がスクアードに裏切られ、刺されてしまう……！！

何としてでもそれを阻止しないと……！！

「スクアード！ 無事だったか さっきでめエに連絡を」

「ああ…すいません…オヤツさん！」

後方、傘下の海賊団はえらいやられ様だ……！！ハア」

「持てる戦力は全てぶつけて来る……！！！！！！
後ろから追われるんなら望む所だ。

俺も出る……！ こっちも一気に攻め込む。

他にねエ……！！」

「そうですね おれ達も全員 あんたにや大恩がある。

白ひげ海賊団の為なら命もいらねエ……！！」

あと1つ…角を曲がれば……”白ひげ”の所にたどり着く……！！
つというところで、2人の会話が聞こえてくる。

上条は必死で走った。

そして……上条が角を曲がった時……

今まさにスクアードが大刀を引き抜く瞬間だった。

それを見た白ひげは、よもや自分を貫くためだとは思っていないらしく、再び前を向いた。

「やめろお……！！！！！！」

力の限り、上条が叫ぶのだが……

時、すでに遅し……

スクアードの身の丈ほどもある大刀が……”白ひげ”の腹を……

「七閃」

上条や”白ひげ”はもちろん……当のスクアードにも何が起きたか分からなかった。

ただ、急に手から腕、それから足にも痛みを感じよるめいてしまい……気が付くと、握っていたはずの大刀が床に落ちていた……

「まったく……まさかこんなところにまで首を突っ込むとは……
本当にお人好しですね……上条当麻……。」

上条が見たのは、2メートルほどもある日本刀の柄に手を置いてい
る…、ジーンズの片方は太腿の際どい所まで切断して露出し、Tシ
ヤツの片方の裾も根元まで切断しているという斬新な服装をした黒
髪ポニーテールの美少女……

天草式十字凄教プリエステスの女教皇で、イギリス清教会「必要悪の教会」に所
属する魔術師であり聖人……神裂火織が”白ひげ”とスクアード
の間に立っていたのだった。

第17話 安堵よりも疑念の方が広まりやすい

マリنفォードの住人達は、現在…避難勧告が出ており、避難先のシャボンディ諸島からモニターによって人々は公開処刑の様子を見守っていた。

各所より集まった記者やカメラマンもまたここから世界へ情報を早く伝えるべく身構えている…。

そしてたった今、そのモニター越しに映っている映像に誰もが釘付けになっていた。

「……ええ。……それが刺そうとしたのは”白ひげ”傘下の海賊団船長……新世界の海賊”大渦蜘蛛！！！」

「なんで反旗を？」

「それよりも、あの女は何者なんだ！？」

「いきなり現れたが……」

「というか、どうやってスクアードの剣をはじめたの！？」

「なにも見えなかったんだけど！？」

彼らの興味の対象は、”白ひげ”を刺そうとしたスクアードではなく、彼を止めた謎の美少女だったの方が圧倒的に強かった。

「か…神裂!？」

上条当麻は目の前に現れた女…神裂火織を見て啞然としていた。彼女は確か…イギリスにいるはずなのだ。なのになんでここに？

「まったく…本当に何にでも首を突っ込むのですね？先日もアドリア海で一騒動したそうだと聞きましたが？」

「!!…そうだ！それで思い出した！

ロンドンにアニエーゼやルチア達が言ったと思うんだけど……その…元気にしてるか？」

つい数日前に大覇星祭最終日。上条は大覇星祭の来場者数ナンバーズで1等を当て、北イタリア5泊7日のペア旅行を手に入れたのだが……イタリアのヴェネツィアで起きた魔術関連の事件に巻き込まれてしまったのだった。そして…その中心にいたローマ正教のシスターがアニエーゼというシスターとその部隊のシスターだ。

元々、その前に”法の書”という事件の関係で失態をしていたアニエーゼ部隊だったが、先日の”アドリア海の女王”の事件で正教から離反し、イギリス清教の傘下に入ることとなったのだった。

「ええ…清教の女子寮で元気に暮らしていますよ。」

「そうか…よかった……ってかなんで神裂がここに!？」

俺みたいにマンホールに落ちたみたいには見えないし……」

「あなたはという人は……………」

呆れた感じの目で上条を見る神裂……

「実は……………」

「スクアードオ……………!!!!」

神裂が説明しようとしたときに、どこからともなく不死鳥姿のマルコが飛んできて、呆然としているスクアードを取り押さえた。

「うるセエ……………」

こうさせたのはお前らじゃねエかア……………」

取り押さえられているのにわめくスクアード。

「こんな茶番劇やめちまえよ……………」白ひげ……………」

もう海軍と話についてんだろ!?

お前ら『白ひげ海賊団』とエースの命は助かると確約されてんだろ……………」

「……………」

「何言つてんだ!?!?どういう事だ!?!?」

「おれア……………知らなかったぞエースの奴が……………あのゴールド・ロジャーの息子だったなんて……………!!!!」

おれがアンタに拾って貰った時……！！おれは一人だった……！！
！！なぜだか知ってるよな！？

長く共に戦ってきた大切な仲間達をロジャーの手で全滅させられた
からだ……！！おれがどれだけロジャーを恨んでるか知ってるハズ
だ……！！

……… だったら一言、言ってくれりゃあよかった……！！エースはロ
ジャーの息子であんたはエースを次期『海賊王』にしたいと思っ
ると……！！

……… その時はすでにおれアお前に裏切られたんだ…… エースとも仲
良くしてた…… バカにしてやがる……！！そしてお前にとってそれ程特
別なエースが捕まった……！！

だからお前はおれ達傘下の海賊団43人の船長の首を売り……！！引
き替えにエースの命を買ったんだ……！！

白ひげ海賊団とエースは助かる……！！すでにセンゴクと話について
る……！！そうだろ……！！？

そんな事も知らずにどうだ……！！？おれ達は……！！……！！エースの為白
ひげの為と命を投げ出しここまでついて来て、よく見るよ……！！

海軍の標的になってんのは現に……！！おれ達じゃねエか……！！波の氷
に阻まれてすでに逃げ場もねエ……！！……！！

ここまで一気に叫んだスクアード。

周囲に動揺が走ったのが船の上にいる上条に出さえ分かった。

確かにあの人造人間……サイボーグ…… パシフィスタは、傘下の海賊団達しか現在
は攻撃していない……！！

集団心理…というのだろうか？
少しでも納得してしまい、疑い始めるともう止まらない。
あつという間に疑念が伝染していくのだ。

まあ……冷静になれば誤っていることに気が付くのだが、もともと戦場という場所は混乱しやすい場所……冷静になる方が難しいのだ。

「ハア…ハア………！！」

「オヤツさん！！？本当かよ~~~~！！！！」

「ウソだろそんなわけ………！！」

「言われてみりゃコイツらおれ達しか狙わねエぞ」

広まっていく疑念の渦……。

とはいっても、“白ひげ”が刺されなかったために、原作よりその度合いはかなり低いのだが、それでも疑念は広まっていく……。

「信じたくなかった…おれア目を疑ったよ………！！！！」

「バカ野郎！！！担がれやがったなスクアード！！！！
なぜオヤジを信じない！！！！」

「ためエまでしらばつくれやがって、マルコオ！！」

「だいたい、俺を止めたその女や、トリップしてきたとかいうガキ共も、本当は海軍の手のモノなんじゃねえか！？」

「はい？」

思わず間拔けな声を出してしまった上条……。
酷い言いかかりだ。言い返そうと口を開けたその時……

「……海軍とはなんですか？」

真顔で神裂がスクアードに尋ねた。
場がしーんっとなまり返る……。

「えっ……神裂？お前……まさか……この世界知らない？」

「はい。知りませんよ？……それがなにか？」

「……えっと……簡単に説明すると、世界政府直属の海上治安維持
組織……かな？」

で、俺とか親父……えっと……今刺されそうになってた人とか、あのあ
たりにいる人たちは海賊で、つかまっているエースっていう人を……
……ほら、あそこにいるだろ？海軍がアノ人の処刑をしようとしてる
から、阻止しようとしているんだ。」

「……そうですか……あなた達は海賊ですか……」

神裂が”白ひげ”を……次にマルコを……スクアードを……最後に戦場
を眺めた。

もう少しうまく説明出来たら……と上条は思った。

世間一般に”海賊”という悪役……好印象のわけがない。

「偏見の目は持ちませんよ、上条当麻。」

「へっ!？」

「…貴方が”親父”というほどの人物が悪人のわけありませんから。そうでなくても、いかにも”裏切り”というような感じで刺されそうになっている人を助けられないわけにはいきませんからね。」

「へっ!口では何とでも言える!

正直に言ったらどうだ?」

スクアードがまだ吠えていた。上条はムツとした。

刺されそうになったのを目撃した時から、まるで噴火口のすぐ下で辛うじて押さえられていたマグマが吹き出しそうになっているような気持だった。

それが今、完全に噴火した。

「いい加減にしろよ!!!」

上条の声がマリンフォード中に響き渡った。

「お前さあ、親父を何で信じられないんだよ!？」

この人が本当に家族を売ると思っているのか!？本当にエースと己のことしか考えていない様に見えるのか!？

確かに俺はまだ親父の事をよくわかんねえ。

でもよ、短時間一緒にいただけでも、この人がそんなことする人だとは思えない!!ましては長年一緒にいたならなおさらだろ?父親を信じられなくて、何が家族だよ!!笑わせるぜ!!」

スクアードの顔から怒りの色が消えた……といっても、改心したのではない。
呆然としているだけだ。

「みつともねエじゃねエか!!! 『白ひげ』エ!!!
おれは、そんな『弱エ男』に敗けたつもりはねエぞ!!!」

「……………」

「クロコボーイ……!!」

「クロコダイル」

……避けられたはずなのだ。

神裂が助けなくても、体調が全快だったのならば、例え心を許した
仲間の攻撃だろうと最強の海賊である”白ひげ”があ程度の攻撃
に反応できない訳がない。

それだけ……彼は弱っているのだ。

その時、いままで黙っていた”白ひげ”が動いた。

「スクアード……おめエ仮にも親に刃物つき立てるとは……とんでもね
エバカ息子だ!!!」

「ウアア!!!?」

「バカな息子を……それでも愛そう……」

”白ひげ”がスクアードを許すかのように、片膝をつき、スクアードを抱き寄せる……

その姿は本当に息子を許す父親のよう……

「ウグ……！！？」

ふざけんな！！！！お前はおれ達の命を……！！！」

「……忠義心の強エお前の真っ直ぐな心さえ……闇に引きずり落としたのは……一体誰だ」

「……海軍の！！反乱因子だ……お前を刺せば部下は助かると！！！」

赤犬、サカズキ大將は”絶対的正義”を旨とする海軍の中でも、一際苛烈・過激に正義を徹底する硬骨漢。

その思想には幾分の揺らぎもなく、たとえ民衆や味方の海兵であっても自身が『悪』と見なせば容赦なく始末する。

その冷徹さを目の当たりにした上条は、思い出して鳥肌が立ってきた。

そんな奴が海賊に対して結んだ口約束を守るはずがない。

……新世界の海賊なら、それくらいの情報を知っているだろうに。

「『赤犬』がそう言ったか……お前がロジャーをどれ程恨んでいるか

……それは痛い程知ってらア……。

……だがスクアード、親の罪を子に晴らすなんて滑稽だ……エースがおめエに何をした……！！？」

仲良くやんな……エースだけが特別じゃねエ……みんなおれの家族だぜ

……」

「……！！！」

その言葉に涙を浮かべるスクアード……やはりどこかで”白ひげ”を…親父を信じていたのだろう。

「まったく……衰えてねエなアセンゴク……！！
見事に引っ掻き回してくれやがって……！！」

じろり…とセンゴクを見る。

そして…”白ひげ”は両腕を外に向かって振るいおろそうと……

「ストップ！！！」

「！！？」

「み…御坂！？復活早っ！！」

もう復活した美琴が…よほど焦ったのだろう。肩で息をしていた。

「親父は病気でもう歳でしょ？両方の氷壁はきついって。

片方は私がやるわよ。」

コインを片手でいじくりながら、まっすぐ”白ひげ”を見る美琴…

「それに、怪我もしてるんでしょ？……って……あれ？なんで怪我

してないの?」

「それなら、神裂が止めてくれたぞ。」

「かんざき?……?」

神裂を見る美琴……すると美琴の表情にその……なんというか……”焦り”と”とまどい”の色が混じった。

「グララララ……ミコト……やるならやるつぜ?」

お前はそっちの方の氷壁を頼む。」

”白ひげ”に声をかけられハッと我に戻る美琴。

「了解!」

ピンつと音を立て、美琴の手から放たれ空を舞うコイン……それが再び指に戻った時、超電磁砲レールガンとして光の閃光が放たれ……

一瞬で氷壁は粉碎された。

「海賊なら信じるものはてめエで決めろオ!!!」

反対側では”白ひげ”がグラグラの実を用いて当然のことだが、氷壁の破壊に成功していた。

これで退路が出来た。動揺が収まるに違いない……だが……

(このギスギスした空気……なんとかならないのかな?)

上条をはさみ、だんだんと険悪な感じになってきた神裂と美琴……。

彼女たちが同時に上条に問いたですまで、あと5秒……。

第18話 女の説教って結構、一方的で長い

「上条当麻！私の見ていないところで何をやってたか説明してもらいますー！！」

「アンター！！私の見てないところで何やってたのよー！！」

上条に神裂と美琴のギスギスピリピリとした声がとんだ。

……上条に2人のステレオ説教が続く……

「まったく……緊張感のない奴らだよい……」

先程まで……というか今も戦場だということをおぼろげに忘れているらしい3人（……正確には美琴と神裂の2人）に向かってポロツと口にしたマルコだったが……

「アンタ……なんか文句あんの？」

「少し黙っててください。」

ジロリ……っとマルコをにらむ美琴と神裂……

……一瞬、2人から霸王色の覇気……のような気迫を感じ、少し後ずさりするマルコだった。

「グララララ…若いのはいいな。」

「親父…笑っている暇があるなら、トウマを助けるよい……」
「なんだあ？」

女の戦いを止められる奴はいねえよ。ああなったら、好きなだけやらせておけばいいのさ。」

まったく気にしてない…というより、むしろ楽しんでいる”白ひげ”……

そんな中……

上条に降りかかる不幸…をさらに悪化させる人物がもう1人…参戦していた。

「だからあなたという人は…能力がその右手しかないのに、自分の命とかどうと考えているのですか!？」

「本当にいっくも女が絡むと一気に思考力・行動力がアップするわけ？」

「あなたは何故、自分を顧みないで危険の中に飛び込んでいくのですか、つとミサカは問いただしてみます。」

「……なんか1人、ミコトそっくりなのが混じっているん気がするんだが…気のせいかい？」

「グララララ……気のせいじゃねえな。」

一方……微妙な空気が流れていたのは、海軍側も同じだったりする。何しろ、上条へのステレオ説教はマリンフォード中に響き渡っているのだった。

……聞きたくなくても耳に入ってくる……

「……ふん。まあいい。」

内輪もめをしている最中に、”包囲壁”を発動させる！」

センゴクは、緊張感がまるでなくなった戦場にため息をつくど、部下に命令したのだが……

「しかし……まだ、電伝虫が一匹……行方不明でして……

まだ回線が切れていません!!」

「早く見つけ出せ!!」

「そ……それが……脱走した囚人の一味が持っているとのことだったので、青キジ様が凍らせたはず……だったんですけど……」

口ごもる海兵……

「早く言わんか!!」

「ミサカが持つてるよ、ってミサカはミサカは女の戦いに面白いから参戦してみたかたったりするんだけど、出来ない身を嘆きながら言ってみる!!」

センゴクの隣で鎖につながれたままの打ち止めが、無邪気に言い放った。

「…ミサカとはもしかして……」

「えっとね…ほら！今、説教している人の中にゴーグルかけた子いるでしょ？」

あの子！！ってミサカはミサカは素直に教えてあげてみたり！！

原作知識に基づいて、少しでも”包囲壁”の作動を遅らせるために、ミサカは電伝虫をバギーたちから強奪したみたい…とミサカはミサカは…って聞いているの!？」

「……なんだとおお!!!!」

センゴクは絶句した。

ようするに……

まあ…現在のシャボンディはこんな感じだ。

『だからー！聞いてるわけ！ー！？ー！？』

『本当にあなたという人はー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

『ー！ー！ってミサカはー！ー！ー！』

3つあるモニターの中で唯一つながっているモニターからは、まったく戦況とは関係ないことしか流れていなかった。

「おい！ー！いつまでこれは続くんだ！ー！」

「”白ひげ”やエースをうつせ！ー！」

「っ！か、こいつら何者だ？」

「そもそも、この少年は？賞金首か！？」

「処刑はまだかよ！ー！」

クレームが殺到する民衆……

「はっ！ー！ざまあねえな！ー！」

「何をやっているんだ……海軍は……？」

「……哀れな……」

「……この状況がいつまで続くか占ってみるか……」

影からこっそりと戦況を見ていた超新星達^{ルキ}が意外とこの状況を楽しんでいたのは、別の話……

…さて、ようやく解放されたのは、それから15分後のことだった。

「はあ……」

「ため息をつくな。ここは戦場なんだぞ？」

「分かってるって……ってステイル!？」

上条の前に立つて煙草を吸っていたのは、赤髪にバーコードの入れ墨を頬にいれた……どこから見ても”不良神父”という風貌な男……イギリス清教の魔術師……ステイル”マグヌスがそこにいた。

「いつからそこに!？」

「……お前が説教受けている間だな。」

「じゃあ……助けてくれてもよかつたじゃねえか……」

恨めしそうにステイルを見上げる上条……

「出来るかよ。」

それに…お前のお蔭で手に入れられたからな。」

満足そうにサイン色紙を見せるステイル……

見るとそこには、”白ひげ”のサインとマルコのサイン…ついでにスクアードのサインに……

「なんでMr.2のサイン!?!」

「ああ。ルーンを張っている間に会った。」

「……ってか、お前って…ワンピースの読者だったのかよ……」

意外そうな目を向けると、ステイルは真っ赤になった。

「うるさい!人の趣味に口出しするな!!」

それよりも……なんでまだ”包囲壁”が作動しないんだ?」

話題を変えるステイル……

その言葉は、ああ…ワンピースって世界中で読まれてんだな……と、ボンヤリと思っていた上条を、一気に戦場に引き戻した。

「なんだよ、それ!?!」

「ああ…それでしたら…まだミサカが電伝虫を手にしているからです…ね」と言いながらミサカはソレを掲げてみます。」

周囲の人に電伝虫を見せるミサカ…。

「へえ…意外にかわいいかも…ちょっと見せてよ!」

「お姉様はゲコ太にうつつを抜かしていればいいのです、っとミサカは渡したくないので、そういつてみることにします。」

「うつつ…て!!そ…そんなことないわよ!!」

「つてか、今は関係ないでしょ!!さっさと貸しなさい!!」

「いやです、とミサ…」

「いいから!妹でしょ!!」

「いやなものは嫌です!!」

「よこせ〜!!」

「放しません!!」

ゴキイ!!ボキイ!!

「「あつ……………」」

結論

ミサカと美琴が引つ張り合ったため、一匹の電伝虫がお亡くなりになりました。

「グラララ……仲のいい姉妹だな。」

「親父……楽観的すぎだよい……」

なんか緊張感がまるでない船の上だった……

「よし！！ようやく通信が切れたぞ！！」

切れ方がちょっとアレだったが、気を取り直すセンゴク。

幸いなことに、上条に対するステレオ説教は海軍・海賊の目を引くものだったので、一旦、戦闘がストップしていたのだ。まあ…ルフィはそんな中でも助けようとしていたのだが、その間は3人の大将に遊ばれていたりする。

「包囲壁”を作動しろ!!」

3人の大将がルフィから一気に遠ざかって、陸地に上がったのを確認した途端！センゴクが叫んだ。

その瞬間!!

ゴゴゴゴゴ!!…と陸と海を遮断する壁が、海賊たちの氷上に閉じ込めたのだった……!!

第18話 女の説教って結構、一方的で長い (後書き)

くおまけ

エース「…な。アレを見て分かっただろ？
どう考えてもアノ女は俺に気があると思えるのか？」

エースは遠くにいる美琴を指差して言った。

美琴は凄い勢いで上条を怒っているが……
それは誰の目から見ても”嫉妬する女”そのものだった。

ガープ「……………」

エース「…ジジイ？」

ガープ「なるほど…そういうことか……………」

エース「よつやく……」

ガープ「お前…強姦したのか!？」

エース「おい!!!いきなりR15的発言してんじゃねエ!!!」

ガープ「…なるほど……」

本当はあの娘は、あの少年のことが好きなのに、エースによって犯され……

子まで作るはめになったということか……

だから、エースを助け、自分自身の手で復讐を下すために……」

エース「ストオオツプ!!!」

待て待てジジイ!!!勘違いだからな!そんなことあるわけねえだろ!!!」

打ち止め「み…ミサカの出生にそんな秘密があったなんて……」

つて、ミサカはミサカは面白そうだからガープさんの話に乗って、涙を流してみたり!!!」

エース「誤解を生むからやめろ!!!」

ガープ「エース!!!見損なつたぞ!!!」

エース「だから聞けよ!！」

エースの不幸という名の誤解はまだまだ続く……………

第19話 身内しか知らないことを他人が知ってたら焦る（前書き）

11月15日、大幅変更しました。

第19話 身内しか知らないことを他人が知ってたら焦る

「な…なんだよアレ!!」

上条当麻は、目の前にそびえ立った壁に目を見開いた。

さっきから、海賊たちが、それぞれの必殺技や、大砲を使い、壁を打ち破ろうとするが……全く効果がない。

見るに見かねた”白ひげ”も参戦し、グラグラの実の力を使って壁を破壊しようとするが、あまり効果がなかった……それほど、強固な壁ということだ。

「…包囲壁よ。」

「ホウイヘキ……って……包囲壁か!？」

「他に何があるって言うのよ……」

馬鹿か?っと言う感じで上条を見る美琴。

「つてめ!!なんでそんな余裕なんだよ!？」

「余裕に決まってるじゃない!」

ニイツと不敵に笑う美琴。

そして、側にいる上条にだけ、やっと聞こえるくらいの大きさの声

で、こつと言った。

「大丈夫…策はあるんだから。」

……「一気に湾内を囲む”包囲壁”

みると、壁には大砲が撃てるように穴が開いていて、全ての砲口が海賊たちに標準を定めていた。

……「ただ、よく見るとうまく作動できていない箇所が1つだけあった。」

「おい どうなってるんだ!!!完璧に作動させる!!!」

さっきから計画通りに進んでいないセンゴクは、苛立つ声を隠せなかった。

「…………それが、包囲壁があのおーズの巨体を持ち上げきれず…………！！
どうやら奴の血がシステムに入り込み、パワーダウンしてる模様で
…………」

見ると、序盤で倒れたオーズが包囲壁と包囲壁の間に挟まっている。
ますます、センゴクの眉間のしわが酷くなった。

まあいい…………目的さえ達成できれば…………

そう…………この包囲壁の最大の目的は、海賊共の足場である氷上を溶か
すことで、まず、能力者を溺れさせ、溺死させることができるとい
うこと。

いくら”最強の男”と称される”白ひげ”とはいったって、彼だっ
て悪魔の実を食べ、海に嫌われた人間…………泳げるわけがない！

それに…………奴らの逃走用の船で”白ひげ”の象徴…モビーディック
号も沈めることができ、海賊共の退路の確保を困難にすることが出
来るからだ。

「締まらんが…………！…！ 始める赤犬…………！！！！」

「”流星火山”」

巨大な無数の溶岩の拳が氷の足場に向けて放たれ…………

「…………？魔女狩りの王…………！！！！」
イノケンティウス

突如放たれてたその言葉と共に、姿を現した炎の巨人が、赤犬の溶岩が氷上の海賊たちには届かないように覆いかぶさった。

溶岩が巨人に当たるが…巨人の方が温度が高いので、びくともして
いない。

「…誰の能力じゃ!？」

この戦場で他に炎系統の能力者は処刑台のエースしかいない……
ちらり…と処刑台を見る赤犬だったが、彼は目を丸くしてこちらを
見ている……それ以前に海楼石の手錠をしているから、能力は使え
ないはず……

「一体……!？」

赤犬の身体がグラリ…と揺れた。

巨人が赤犬に攻撃を仕掛けたからではない。

包囲壁がいきなり、ドンドン下がり始めたのだ!!

「な…なんだ!？」

「これも、罨なのか!？」

「お…俺たち囲まれてたのに……」

なんで、あっさり元に戻ったんだ!!?」

素直に驚きが出てしまう海賊たち。

彼ら海賊を閉じ込めるための包囲壁の高さが、一気に下がり始めて……とうとう元の平らな土地にもどってしまったのだ！

「おい！……一体何が起こったというのだ！……」

センゴクが包囲壁を支配する部門に電伝虫コントロールを用いて尋ねてみると、そこを担当の海軍の巡査の、慌てたような声が聞こえてきた。

「わかりません！……」

ただ、何者かにハッキングされたらしく……どうも無理矢理入ったような痕跡がありますので、そこから逆探知をしているところですよ！……」

「ハッキングだと！……？
ばかな！……！つとなると、そいつは、この計画を事前に知っていたといことではないか！……」

……海軍関係者が、両親や子供に伝えたのか？

いや……ここに集めたのは海軍の”正義”に忠誠を誓ってもいい！……！

……といった海兵達ばかりだ。その海兵の中でも、凄腕の人が勢ぞろいしている、

そんな海兵達から、機密情報が漏れるとは思えない……

……一体、何が起こったんだ？

そもそも……あの炎の巨人は一体……

「私の体は、常に微弱な電磁波を流している……って言うことを利用してね……」

ちよつと、管理部屋にハッキングかけてみたら大成功だったみたいね。

包囲壁が下がって、元通りになったし。」

「ハッキングって……犯罪じゃないのか!？」

得意そうに話す美琴をたしなめるスタイル……

それを言われ、ムツとしたような顔をした美琴。

「いまさら、何を言ってるのよ!!
だいたい、”海賊”自体が犯罪者でしょうが!!
そもそも、貴方…どう見ても学園都市の人間じゃなさそうだけど…
なんで能力使えるの?」

胡散臭そうに先程、言霊を唱えると同時に炎を出したステイルを見る美琴…。

…彼女は『魔術』を知らない。だから彼は『バイロキシネス発火能力者』かと考えたのだが…
赤犬の能力に対抗できるくらいの炎を出せる能力者なんて聞いたことがなかった。

「それよりも!!なんで、おまえたち魔術師までこの世界に来たんだよ!？」

『魔術サイド』のことをバリバリ『科学サイド』の人間である美琴に知られるのは少々不味い…

だから話題を変えるために、さっきから聞きそびれていたことを聞こうとする上条。

それを聞いたステイルは煙草を口にくわえた。

「…そうだな…説明してやるか。…実はな…」
「まったく…説明は、あとでいいですから。」

それより、いつまで、ここでグズグズしているつもりなのですか？」

ステイルの言葉を遮り、そう言い放つと、突然、神裂が船から飛び降りた。

上条のようにだらしなく落ちる（落下する）のではなく、スタツ…と音を立てないで着地していた。

「おおい！！神裂！！いきなりどうして……？」

「あなた達…馬鹿ですか？」

あの”エース”という人を助け出しに来たのではないのでしょうか？」

「あつ……………」

すっかり忘れていた上条達だったりした…。

包囲壁が発動しないで終わった…だから、海賊たちの広場への侵入を、海軍はやすやすと許してしまっていた。

内部で第2ラウンド…っつても言うのがふさわしそうな、戦闘が繰り広げられている。

「おい！ここは女が遊びに来ていいような場所じゃないんだぞ！！」

そう言つて、神裂に刀を振り下ろす、大柄な海兵がいた。

それに引き替え細身の体型をした神裂……体格差は歴然としていて、誰も海兵の勝利を確信した。

「死ね！海賊め！！」

だが、彼らは知らない。

今…海兵が殺そうとしている女は…神裂火織は、元の世界で”聖人”といわれるほど、強い戦闘能力を持っている事を……それは、この世界に来てからも健全で、

「七閃」
ななせん

神裂の手が柄に伸び、刀を引き抜いた瞬間！！

「ぐ…ぐわあ！！！！」

いきなり体中から鮮血が噴き出す。

痛み之余り、海兵は神裂に振り下ろそうとしていた刀を落とし、

その場でうめいてしまった。

「命はとりませんが……先を急いでいるので……!!!!」

先に進もうとしている神裂の前に、黒い斬撃がはしる。

辛うじて斬撃を避けた神裂。黒い斬撃が飛んできた方を見ると……

「……いきなり襲うとは……礼儀知らずですね」

神裂は黒刀を手にした男……王下七武海の1人にして”最強の剣士”……ジユラキユール・ミホーク……通称”鷹の目”をにらむ。

神裂はミホークを知らない……が、彼が強いことは、先程の斬撃で分かったので、気を引き締めた。

……下手をすれば……自分が負けるかもしれない……

そう思うくらい、彼は強そうな気迫を放っていた。

「……俺の黒刀の斬撃を避けるとはな……」

一角以上の剣士のようだ。どうだ？一本手合せはどうだ？」

黒刀の先端を神裂に向けるミホーク……。

神裂は、はあ………つとため息をつくど、刀の柄に手を置いた。

「仕方ありません……お相手いたしましょう。」

第19話 身内しか知らないことを他人が知ってたら焦る（後書き）

以前、soliaさんが感想で書いてくださった『御坂のハツキング能力』を使わせていただきました！っとはいつても、ハツキング能力を使うのは包囲壁だけに対して…ですが…

第20話 ” 救われぬ者に救いの手を ”

「…抜刀術か…？」

刀の柄に手を置いている神裂火織を見るミホークだが……

「…いや…違うな。」

先程の考えを自ら否定するミホーク。

神裂は少し驚いてしまった。

確かに彼の言うとおり、今から使おうとしている技は、抜刀術ではない。だが、それを対峙しただけで見抜いてしまったのが分からなかった。

「なぜ…違うと思ったのですか？」

なるべく『驚いている』という感情を見せないように、平静を務めてミホークに問う。

「…先程、海兵を倒した技…それから”白ひげ”を助けた技…どちらも刀を引き抜いた様子が見えなかった。」

代わりに、七本のワイヤーのようなものが一瞬、光に反射して見え
た。

……引き抜くふりをして、本当は鞘に隠してあるワイヤーで攻撃し
ていたのではないか？」

「……当たりです。ここまで短期間で見破られるとは思いませんで
した。

ですが、私の技は”七閃”ななせんだけではありません。

”七閃”を抜けたところで、今度は”唯閃”が待っています。」

「……ほう……他にも技があったのか……」

ぜひ見てみたいものだ……」

世界最大の黒刀……”夜”を構えなおし、神裂に襲い掛かった。

神裂は、2 m以上もある日本刀……”七天七刀”をスラリッと引き抜
いた。

キィィン!!!!!!

”七天七刀”が”夜”の斬撃を受け止める。神裂の足が少しだけ地
面に食い込んだ。

(……重い……一撃の一つ一つが……ですが……!)

神裂は力を入れ直し、”夜”を押し返す。

その反動を利用して、後方へバク転をし、ミホークから距離を取った。

「…ほう…」

想像していたよりも俊敏に動く神裂を見て、感心したような声を上げるミホーク。

か弱い女かと思っていたが、そこそこな手練れのように、気を引き締めないとな…っと思ったとたん！！

「！……！！」

キイイイイン！！！！

一気に距離を縮めてきた神裂の七天七刀を受け止めるミホークの夜”。

(……………反応できなかったな……………)

近づいてきた神裂の速度に対応できなかったミホーク…。彼女の刀を受け止め、攻防戦を繰り返されていられるのは、彼女の速度を彼が見切っているからではない。

身体が…本能が…自分の体に刻み込まれた歴戦からの経験…つといた自分の意識と関係のないものが、ミホークの体を動かし、刀を振るっていた。

「…なかなかやりますね…」

「…お前…何者だ？」

お前のような剣士の噂など、耳にしたことがない。」

「…私は、イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウスに所属する魔術師です。

」

「魔術師？」

あまり耳にすることのない言葉に眉をひそめるミホーク。

グランドライン偉大なる航路の島の中には、魔術師やらなんやらといった”オカルト”は存在しているが、どれもこれもインチキ臭いモノばかりだ。

(例・ナマクラ島・貧困の国「ハラヘッターニヤ」)

が、剣を交わして直感したのだが、この女が、嘘をつくとは思えない…

恐らく、本気で”魔術”オカルトを信仰しているのだろう…っと、神裂と剣を交わしながらミホークは考えた。

「…”魔術師”が”火拳”と関わりがあるとは思えんな…」

「”火拳”？なんですかそれは？」

「…知らないのか？」

お前は、あの男…を助けに来たのではないのか？」

眉を上げて、驚きの意を示すミホーク。
そのまま片目で処刑台の方をチラリと見て、”あの男”が誰なのか
神裂に教えた。
神裂もその視線の先を見て、ミホークの言う”あの男”が誰だかを
悟った。

「私は別件でここに来たまでのこと。

”ポートガス・D・エース”を見たのは今日が初めてです。」

「別件だと？」

「あなたに話しても理解できませんよ。」

「……なら問おう……。」

なぜ、”火拳”の処刑の邪魔をするのだ？」

「……そう言えば言っていないませんでしたね……私の魔法名を……」

「魔法名？」

ピクリ……と眉を動かすミホーク。

そんな彼を見て「そういえば、この人は魔法を知らなかったな……」
っと思っ神裂。

神裂は無表情をなるべく維持しながら、口を開いた。

「もともと魔術師は己の目的のために力を振るう人の集団です。

そして”魔法名”とは、その己ごとの”信念”という主観的目標を
刻んだ名のこと……

……私の魔法名は……」

彼女の脳裏に浮かぶは、元々所属していた『天草式十字凄教』の面

々…
自分が持つ聖人としての強運のせいで、代わりに傷ついている周りの面々…

自分が救われるために、代わりに救えなくなってしまった面々…
常に自分のせいで傷つくものがあるということ…

だから、誉れ高き女教皇の座を辞してまで、異国の教会に加入したのだ。

そんな神裂が己に刻んだ魔法名…それは……

「……」 — S a l v a r e o o o 《救われぬ者に救いの手を》 !
! ! !

神裂の刀から一瞬、光が放たれ、一気にその力も速度も増した。

「…これで…魔法名は”殺し名”と呼ばれることもあります。
私は……処刑されそうになって居るあの人に手を差し伸べるため…
あなたを倒します!!」

「?!」

アクセラレータ
一方通行には何が起きているのか分からなかった。

何故、自分が傷を負っているのだろうか？

しっかりデバイスの電源が入っている……反射もしっかり行っている……

自分の演算は完璧なはず……なのに……!

「ヒヤハハハ!!まだやるつもりかよ!!」

”正義”の文字を背負った巨漢の男の拳が一方通行に襲い掛かった。

もちろん、反射をして跳ね返そうとする一方通行だが……

「ぐはア……!」

その拳は反射されることもなく、彼の顔面にクリーンヒットした。

「そんな…一方通行が…っとミサカは驚愕の色をあらわにしてみます。」

そのそばで呆然とそれを見ているミサカ…。

彼の能力…反射は、確実に行われているはずなのに……

あの巨漢の男の拳には効いていない……悪魔の実の能力でもなんでも反射する彼の力が…効いていないなんて……

「…往生際が悪いなあ！！さつさと倒れてくれないか？

この俺様は、こんな命令を終わりにして、とっとと3億の首を取りにいきてえんだっての！！！」

……原作には登場していない男……ゴクリ…とミサカは唾を飲んだ。

「……………分かっていないみたいね……………」

少し離れたところからこれを見ている、小さな影があるとは、一方通行もミサカも思ってもみなかったのだった。

第20話 ” 救われぬ者に救いの手を ” (後書き)

原作にないオリキャラ登場です！

あつ…でも、次回は番外編を執筆予定なので、本格的な登場はそのあとになるかも…。

番外編 もし”白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書目録』の世界に来てしまった

思いついた番外編です。

本編とは全く関係ありません。

「あぢー……」

どっと流れ出てくる汗……上条当麻は目が覚めた途端、とてつもない暑さに悩まされていた。

「…ゲツ！エアコン壊れてら……
昨日のビリビリ女の雷のせいか？」

とりあえず、栄養補給をするために冷蔵庫を開けるが……

電気類がすべてやれていたので、冷蔵庫の中から変なおいがした。

「全滅か……」

つて…うわあ！！水漏れが！！制服がつ！！借りてた漫画あ！！！！」

ぐしゃーっとなっている上条宅の床……

腐臭があたりかしこに漂っている……

（分かってたー！分かってましたよ！！）

夏休みになったからって、空から幸運が降ってくる訳じゃないって
さー！ー！！！！）

もう泣くしかない……とりあえず、びしゃびしゃになっていない制
服を着る上条だったが……

その時、何かに気が付いた……

「ん？布団？いつの間に干したんだ？」

何かが自宅の手すりに干されてある……上条がベランダに出て確認
してみると……

「！！！！！！？」

白い服に青い髪に同じ色の瞳をしたシスターさんと……

……上半身裸でボサボサとした黒髪の男が干されていた。

（お…女の子！？うわっ！シシシ…シスターさんだ！！

ってか、隣に何で上半身裸なお兄さんが！？…ってかよく見ると拷
問受けたような傷あるんだけどー！！…ってか…背中のはって刺青
！？）

上条が反応に困っていると……シスターと男は目をさまし……その眼が上条を捕えた。

「オーーー」

「二ーーーーー」

な……何か言おうとしている……上条は聞き取ろうと真剣な顔立ちになった。

「おなかへった……」

「肉ううう……」

「……………」

学園都市……超能力でさえ人の手で作り出す、この科学の町で……

その白いシスターと上半身裸の入れ墨男は七階^{ウチ}のベランダに引っかかっていた。

それが……夏休みの始まりだった……。――。

ガツガツガツ……むしゃむしゃ…ふがふが……

上条の家に唯一残っていた食料を食べつくしていく2人……
つというか、上半身裸の男はどこかで見ることがある気がするのだ
が……思い出せない上条だった。

「まずは自己紹介しなくちゃいけないね。」

シスターの方が、一旦食事を止めて口を開いた。

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ？」

見ての通り教会の者です。」

インデックス
「目次？」

……って誰が聞いても偽名じゃねーか！」

「あ！」

バチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だね。」

「意味わかんねえし……！」

妙だぞ……つと上条は思った。

この町のセキュリティーは一級品だ……このどっからどう見ても外
部の少女……つかシスターがどうやって入り込んだんだ？

……昨日のビリビリ中学生が引き起こした大規模停電のせいだ、一
時、セキュリティーがマヒしたのかもな……

「で、そつちは？」

「ん？俺か？俺は——」

ガタン——！！

「「えっ？」」

インデックスと上条の声が重なった。

目の前でいきなり男の頭が、がつくんと落ちたのだ！

……男はまるで死んだように動かない……

「ちょ……ええ！！俺、この年で逮捕とかされたくねえんだけど！！」

「ま……まさか……実はこの食べ物に毒物が混入されていたりとか……」

「ふ……不吉な事いうんじゃない！！！！」

不幸だ……夏休み初日から……こんなことが起きるだなんて……

ずう——んつと落ち込む上条。

「……大丈夫だよ、君は何もしてないって、出来る限り私が弁護してあげるから。」

可哀そうなくらい落ち込んでいる上条に、優しい言葉をかけるインデックス。

「…うう…見た感じ13くらいの子に慰められる高校生って…
まあ、慰めてくれて、ありがとな。」

ポンポンっと右手でインデックスの肩を叩く上条……

はらり

「なっ／＼／＼／＼／＼！！！！！！」

上条は自分の顔が真っ赤になるのが分かった。
なぜなら、突然、インデックスの修道服が……修道服が脱げて……彼女が全裸に……

それに気が付いたインデックスの目が潤み始め……

「イダダダダダダ！！！！」

インデックスの鋭い歯が上条の頭に襲い掛かったのだった。

「うっ…よく寝た…ん？どうしたんだ？」

死んだように眠っていた男が目を覚ました時、上条は噛み付かれた痛みで、なんか泣きそうだった。

「……できた」

「なんかウケるな！針のむしろみてえ！！」

何も知らない男が、元の形に戻りはしたものの何十本もの安全ピンでギリギリしている修道服を着たインデックスを見て笑った。インデックスは何か言いたそうな顔をしていたが……男の余りにも邪気のない笑いを見て、言う気が失せたようだった。

「で、アンタは？」

「俺か？俺はエースっていうんだ。おめえーは？」

「俺は上条当麻。」

「私はインデックス。よろしくね、えーす！」

「こちらこそ、よろしくな！トウマにインデックス！！」

にかぁーっと笑うエース。

「…ん？エースって言ったか？」

「ん？俺を知ってるのか？…って、知ってるか。」

「…ってか、俺…処刑されそうになって…ルフィの奴かばって死んだはずなのに…なんで生きてんだ？」

「胸に赤犬に穴開けられたと思っただけだな…？」

「頭上に？を浮かべるエース。」

「…ルフィ…ってまさか！！！」

友人の青髪ピアスから借りていた漫画…ワンピースを取り出す上条。

「やっぱり！！」火拳のエース”！！！！…って…逆トリップって奴か！！！！？」

「逆トリップ？なんだそれ？」

「とうま…分かるように説明してほしいかも…」

「うーん…えっと…」

「つまりエース…さんのいた世界ではなくて、エースさんは別世界に飛ばされてきた…ってことになりますね。」

上条の説明を聞きながらエースは、まだ腹が減っているのか…菓子を食べている。

「ふーん…別世界か……って…」

エースは少し考え込んだ。

「別世界…か…まだ、勝手がよく分からない。だからすまないが、しばらくここに置いてくれないか？」

「私はいくよ。」

玄関に向かって小走りで歩くインデックス。

「行くつて…お前！命狙われてるんじゃないか！？」

「命つて…ほんとかよ！？」

真剣な顔になるエース。上条も引き留めようとするが、こけたりなんだり、逆にインデックスに笑われてしまっていた。

「危ない目に逢うつて分かってて、お前を外になんか放りだせねーだろ…！」

「トウマの言うとおりだ！なんかよくわかんねえけど、命が狙われてるなら、俺が守ってやるつての…！」

「…じゃあ…私と一緒に、地獄の底までついてきてくれる？」

インデックスが2人に問いかける。

上条は、何て答えたらいいか分からなかった。

「ああ、ついていってやるよ。」

エースが言ったとき、インデックスは信じられなそうな顔をした。

「俺の弟は、俺を助けるためだけに地獄の底まで本当に降りてきやがった。」

なら、兄である俺だって、誰かのために地獄の底まで下りていく勇気がなくてどうすんだって話だ。」

にかあつと笑うエースをポカんと見るインデックス……だったが

……

「へ……平気だつてば！教会まで逃げればかくまってくれるはずだし！！」

そう言つて彼女は走り去つていった……

……のだが、エースとインデックスと上条は数時間後にまた顔を合
わすことになる……でもそれは……また次の機会に……

番外編 もし”白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書目録』の世界に来てしまった

また次の機会に…とか書いてますが、次の機会があるかどうか……
まだまだ未定です。

次回は本編に戻ります!!

第21話 漫画に出てくる図体デカイキャラって馬鹿が多い

「つく!!?どうなってんだア...!?!」

何故...先程から男の攻撃が...反射しているのに当たるのが、一方通行には理解できなかった。
アクセラレ

こいつもあの...先程ボッコボコに女どもに説教されていた少年と同じ力があるのか...っとも思ったが、そのようには見えない。

あの少年は、自分の”反射”自体を消していたのだ。

だが、目の前の男は”反射”しているのにもかかわらず、拳を当ててくる。

なぜだ?...学園都市No.1の能力者の脳は思考を続けた。

「.....つち...まだ倒れねえのか...はやくしねえと大物の首までとつて一気に准将まで4階級もUPしようと思ってたのによお!!計画が台無しじゃねえかよつと!!」

そう男がつぶやくのを、殴られ続けている一方通行は聞き逃さなかった。

(…今…奴はなんて言ったんだ?)

一方通行は”自身の”ベクトルの向きを操作し、一気に海兵から距離をとった。

「ヒヤハハハ!!!何だ!?逃げんのか?」

狂気じみた笑いを浮かべながら男は走ってくる。

……やはりバカだ……

弱い者が引いたら追ってくる……自分を恐れ…逃げているのだと思つて…

こんなバカに負けていたのかと思うと、一方通行は反吐が出そうになった。

「俺がただ逃げると思つてんのかよオ…三下がアア!!!」

「何を言っている!!!貴様はただ逃げているだけじゃないか!!!」

一方通行を追おうとする男だったが、追おうとすると海賊(無名)が現れ、男の行く手を阻む。

そのたびに拳で殴るわけだが……ココは戦場……敵は次から次へと湧いてくる。

そいつら一人一人に相手をしているうちに、目的であった『一方通行』の姿を見失ってしまっていた。

「つくそ……どこに行きやがった……!？」

自慢の拳をふるいながら逃げた一方通行を探す男……

が、”逃げた”と思っっているのは男だけで、一方通行は逃げたつもりはなかった。

わざと距離を置いて逃げたふりをし、他の海賊たちに男の相手をさせることで、何故、自分に拳を当てることが出来たのか……ということと、男の先程漏らした言葉について考えていた。

(奴の口ぶりから考えると、奴は大尉……。それに加え、誰かから指令を受けて動いているのかもなア……
ハッキリ言っただ奴は馬鹿だ。俺が下がったを見て、ただ逃げたと思っただ奴と追っただ奴が違った。
まともな奴なら何か策かもって疑うぜエ……普通は。)

一方通行は男の戦いを見ていた。

男の拳の威力は強い。しかも速い……異様に早い……だが、それだけで、特に能力を持っているようには思えなかった。

(つたく…このまま別の奴に任せてても構わねエンだが…性に合
わねエー！。

俺の”反射”…っていうか”ベクトルの向きの変換”かア…それ自
身を打ち消しているわけじゃねエンだから、どこかに突破口が…)

そこまで考えた時…不意に気が付いたことがあった。

彼の口がニヤリ…と曲がった。

「あるじゃねエか…馬鹿を倒す策がよオ！！」

「…はあ…はあ……つたく…あのガキイ…どこへ…」

「よオ…俺が相手してねエ間に、ボロンボロンじゃねエか？」

男の視界に一方通行が入った。

男の表情が途端にゆるんだ。

「ヒヤハハハ！！…わざわざ殺されに来てくれたのか！！雑魚が！
！！！！」

男はまっすぐに一方通行に接近し……

「グフアアア!？」

突如として地面にたたきつけられた。

何が起こったか分からない……突如として何か巨大な力が男を襲ったのは事実だ。

「てめ…何を…!!!」

一方通行の方を見ようとした…が…すでに遅し。

一方通行は倒れている男の背中に足を乗せて、能力を発動させた。

「グギヤアツアアア!!!」

一方通行の足が途端に重くなり、地形が変わるくらい地面に沈む男が、醜い悲鳴を上げた。

…ミシリ…ミシリ…とあばら骨及び全身の骨が鳴る……

「どうしたア？俺を殺さねエの？」

「ぐう……なんだコレは……」

「何だ…俺の力しらねエの？」

俺の力は”ベクトルの向きを変換させる力”……それは万物に値すんだぜエ？」

「!?!?」

一方通行の言っている意味が分からない男……苦痛と理解できないので顔をゆがませる。

「つまりだア……三下にも分かりやすく説明してやるよ……」

まず、テメエの上の”風”が進む向きを操って、箱の中に空気をためた密閉空間を作り出したわけだ。

ンで、その密閉空間の下の面だけ、ベクトルの操作を行わねエようにした……言うならば、箱に穴を空けた……ってわけだ。

ンで……その穴をテメエに向けた状態で、密閉空間の側面を一気に反射で叩きつける

……簡単に言えば、テメエの上空に”空気砲”を作り出して、一気にブチ放したってわけだ……

もっととつとり早く済ませても良かったンだけだよオ……念には念を……って事だア。」

悪魔の笑みを浮かべる一方通行は、そういう間にも男への制裁を止めない。

「テメエの力はただすばやく動けるっただけだ。嫌……ちげエな………拳がクソ早エだけだ。

つまりだア……俺の反射が適用される前に、手首を返す、つまり手前に引くことで、ベクトル変換を逆手にとって、テメエの拳を俺に

引き寄せてたつてわけだア。」
「!?!?!」

どうやら凶星だったらしい…男の顔色が悪化した。

「さて…だが、俺の能力については知らなかったみてエだな……
つてことは、こいつには必要最低限の戦法しか与えてねエってこと
か……」

おい…テメエ…返答次第では、その苦しみから解放させてやる……
正直に答えるオ……」

テメエにこの方法を教えたのは誰だア？」

男は涙目で一方通行を見上げた。

「か…海軍……本部…中将…」見聞色の覇気”の使い…手の……ア
イズ”様で……す……」
「どこにいんだ？」
「そ…そこまでは………」

一方通行は舌打ちをした。そしてほんの一瞬…能力を解いた。

男はほっとした感じの顔になった……」

「た…助かった…」

「アアン？何勘違いしてんだ？」

一方通行が笑う。

「命を助けてやるなんて…言ってねエゼ？」

戦闘不能な男を反射で遠くへと弾き飛ばした。

男は人ごみの向こうへ消えていった……なんかデカイサイボーグみたいなのがウロチョロいるところに弾き飛ばしたので、おそらく命はないだろう。

「……たく…俺をここまで追い詰めるなんて……」
「アイズ”って奴はどこだア？」

一方通行は一旦……助けるべき少女のことを置いて、その海軍中將を探すことにした……

今後の害にもなりかねない、その中將を……

第21話 漫画に出てくる凶体デカイキャラって馬鹿が多い(後書き)

オリキャラの名前…出さないで終わったな……

えっと…彼は海軍の大尉で、馬鹿です。

ですが、拳の速度が「黄金聖闘士にも匹敵すんじゃない？」ってくらい早いという設定です。

そこを買われ、オリキャラ中将”アイズ”の部下になります。

で、アイズの命で、一方通行抹殺に動き出します。

なんとなく木原みたいな攻撃ですが、何度も言うようですが、木原みたいに頭良くない馬鹿で、考えるのが苦手なので、一方通行の能力については教えられていなくて、ただ「こうしたら勝てる」としか教えてもらっていません。

なんか…かませっばいキャラになったな………ってか、かませですね。

ですが、中将アイズは”かませ”ではありません。

この人についてのことは、現段階ではまだ『見聞色の覇気』の使い手…とだけだしておきます。

第22話 他に好きなキャラがいると、主人公が空気になっていることが多い

オレンジ色のレーザーが、数体のパシフィスタの腹を貫く。その後から遅れて響く、レーザーのゴガツつと言つ音……

「あゝ！！スカツとする！！」

そういう間にも、キンツと指でコインを弾き超電磁砲レールガンをパシフィスタ目がけてぶつ放し撃ていく御坂美琴がいた。

いくつか腹に穴が開いたパシフィスタは派手な爆発音とともに散っていく……

その様子を、まるで、ゲームセンターのゲームのように結構楽しみながら壊していた。

「こりゃあ！何をやっとするんじゃ、小娘！！！」

まるで金太郎を思わす風貌をした男…戦桃丸が美琴の前に立ちふさがった。

「何って…あのデカブツを壊しているに決まってるじゃない。」

つといている間にも一体のパシフィスタがズカアアアンつと音を立てて爆発していた。

「つく！！パンク野郎がどんな思いをして作ったのか知らんで…！！！！」

アソガラ下ッコイ

”足空独行”！！！！”

「まずっ！！！！」

慌てて磁力を操り、砂鉄で防御壁を作る美琴だったが……

「くはああ！！！！」

戦桃丸の突っ張りを抑えきれずに、宙を飛んだ。

…なんとか地面に激突する寸前に砂鉄をクッションのように操ること
とで、ダメージは抑えられたが、それでも身体がふらついてしまっ

……

(長期戦は無理そうね……)

美琴はチラリ…と、処刑台を見て今がいつ頃なのかを確認した。

……まだ、エースも幼女も首が繋がっている……

ぶうううん………つというまるで蜂の音を何十倍にもしたような不可
思議な音が戦桃丸の耳に響く……。

見てみると、黒い鞭のようなものが、何十メートルもあるレイピア
のようなものが空中を漂っていた。

「…なんじゃいそれ？…砂鉄か？」

目を凝らしてみると、砂鉄の巨大な塊が磁力によって操られ、振動
しているらしい……

「さてと…行くわよ!!」

砂鉄の鞭が、戦桃丸に襲い掛かった。

……さて、この物語では空気と化しているルフィは……
青キジの氷の槍で右肩を貫かれ、その痛みでうめき倒れていた。

「お前のじいさんは恩人だが……
仕方ねえよな、男一匹選んだ死んだ道。」

青キジはそういうと、ルフィにとどめを刺そうと構えた…時!!

「イノケンティウス!!!」

青キジに炎の巨人が襲い掛かった。
あつという間に炎の中に閉じ込められる青キジ…

「はあ…はあ…アレは…さっきの…？」
「大丈夫か！？」

2人の人物がルフィに駆け寄った。

「……少し休んだ方がいいぞ。」
「関係ねエ！！俺が……エースを助けるんだ！！！！！」

気力だけで立ち上がろうとするルフィ。

「あーら…暑いねえ…」

イノケンティウスの炎には”覇気”がないため、青キジを”水”に
しただけで、復活を許してしまった。
……が多少はダメージがあったようだ。

「おい、上条当麻！ルフィの援護をしる。
三大将はここで僕が少しでも食い止める。」

「ステイル！？大丈夫か？」

「問題ない。先程、市街地全域にルーンを張ってきた。」

「……そっか……行くぞ、ルフィ!!」

フラフラなルフィの腕をつかみ、走り出す上条。

「先程の小僧……!!逃がすか!!!!」

身体を溶岩に変えてルフィと上条に襲い掛かる赤犬……だったが……

「いかせるかよ。」

ステイルがその間に入り込み、イノケンティウスで対抗した。

「……!!?ワシの炎が!!」

驚く赤犬。それに引き替え余裕の表情を見せるステイルは、煙草をふかしていた。

「……僕のイノケンティウスの温度は30000。

マグマなんかよりずっと上だ。」

「怖いねえ……新手のロギア系能力者だね。」

そこまで『怖い』とは思ってなさそうな顔をした黄猿がつぶやいた。

「…さてと…どれだけ食い止められることやら…」

炎の剣「吸血殺しの紅十字」を発動させ構えるステイル。

「…ぶつちやけ、先程からイノケンティウスを酷使しているせいで、体力の減りが半端なかった。

が、元の世界に帰るには…ここで『麦わらのルフィ』と最低でも『エース』か『白ひげ』を生かさなければならぬ。

ここでルフィに無茶させてもう一発『テンションホルモン』を撃たせるより、体力を温存させておいた方が好都合だ…とステイルは考えていた。

「…はあ…はあ…アイツ大丈夫なのか!？」

ルフィが少し前を走る上条に尋ねた。

「問題ないさ。ステイルは…あの炎は人を護るための力だからな。」

「…人と言つても、一人のシスターの少女だけだが…それでも『守るための力』には変わらない。」

「…それよりも、大丈夫じゃないのはお前だよ!!」

「問題ねえ!!」

「いや、ボロボロだろ!!御坂妹が言つてたぞ!!」

『猛毒を喰らったりしてフラフラなのに、テンションホルモンで痛みを忘れてる』って!!

あとで……」

「あとで俺の体がどうなっても構わねえ!!

それよりも……エースを助けられないほうが、死んでも死にきれねえ!!」

荒い息とともに放たれる主人公の言葉……それは彼の覚悟……

「……はあ……俺の不幸指数高まりそうだな……」

上条はため息をついた。

「じゃあ、出来る限り助けてやるから、無理すんなよな、主人公!

」!

「ありがとな……えっと……」

「俺の名前は……上条当麻だ。」

「そっか!ありがとな、トウマ!!」

2人の主人公が処刑台を目指す。

……エース処刑まで……あと数刻!!

第23話 怖いシーンって目を背けたくなるけど、ついつい見てしまう

「ここを通りたきゃ……」

ワシを殺していけい！！！ガキ共！！」

つといい伝説の海兵…であり、ルフィの祖父・ガープ中將がデンッと処刑台の下に位置する椅子に腰を掛けた。
伝説の海兵が守りに加わったつとということ、ざわめく海賊たち…

「つくそ…爺ちゃんか…」

ルフィも例外ではなかった…が、歯を食いしばり、身体に鞭を撃ちながら走り続けていた。

「えっ…あれ…お前の爺ちゃんなのか？」

原作知識が乏しい上条当麻が驚いて尋ねると、ルフィは処刑台の方を向いたまま、うなずいた。

「…つてか…爺ちゃんがいたとはな……」

意外だ……こいつにエース以外に血縁がいたとは……

まあ…それは置いておいて……上条は走りながら自分の右側を走るルフィをもう一度見た。

…冗談なしで全身が極限状態のようだ。彼が今、気力という力だけ

で走っているのだろう。

このままでは…ルフィの身体が壊れて再起不能になってしまうかもしれない。

だが、ここで『休め！』とは上条には言えなかった。

だって…自分が逆の立場だったら、再起不能な体に鞭を打ってでも走り続けると、思ったからだ。

上条は”家族” っというものがどんな感じだったか、いまだにピンとこない。

記憶を失ってから何度か家族とは会っているが、なんとなく他人…と感じてしまうことがある。

でも、ルフィは違うのだ。

”家族”として笑いあったり喧嘩したり冗談を言い合ったり…共有する時間があったはずだ。

生きている限り、笑いあえる…生きている限り、喧嘩も出来る…

生きている限り、助けられる…でも、死んだら何もできない…

だから彼は走り続けるのだ。

走って走って…命の限り走り続け…助けに行こうとする…

例えその道に…たぶん同じくらい大事な祖父が仁王立ちしてたとし
ても…

死に行く兄^{エース}を助けに走り続けるだろう…

上条は自分の右手を見た。

（神の加護を消す右手…これで…エースの死という幻想をぶち壊してやる！！）

ぎゅっと拳を握りしめ、ルフィの速度に合わせて走り続ける、上条だった。

「…どうした、火拳？」

地面に頭が着きそうになるくらい、背を丸めるエースを見たセンゴクが問いかけた。

「俺は…腐ってる…」

絞り出すように言葉を吐くエース……

そんなエースの耳に響いてくるのは仲間たちの声……

「エース~~~~!!!」 「エース!!! 必ず助けるぞ~~~~!!!」
「諦めるんじゃねえぞ~~~~!!!」

その声一つ一つが彼の胸を刺す。

「くそ…俺は…歪んでる!!!」

………こんな時に

親父が…弟が…!! 仲間たちが…!!

血を流して倒れていくのに…!!!!

俺は嬉しくて涙が止まらねえ!!!!!

ボロ…ボロ…つと大粒の涙をこぼすエース…

「今になって命が惜しい!!!」

肩を震わせ…涙を流し続けるエース…

「いいな…涙を流せてってミサカはミサカは羨望のまなざしを向けてみたり。」

彼の隣に座っている”打ち止め”がそつとつぶやいた。

先程までの年相応な子供っぽさが消え、まるで彼の母か姉であるかのような微笑を浮かべていた。

「ミサカは妹達シスターズの最終信号だから…それだけのために単価18万円ラストオーダー

で作られたモノだから……あなたとは違って、また作ることが出来る存在なんだってミサカはミサカは説明してみたり。

だから、ミサカと違って貴方はオリジナル……作り置きのないモノで必要のあるものだから涙を流せるんだよってミサカはミサカはそう言っ、ほほ笑んでみたり。」

その時の”打ち止め”の顔を見た者はいなかったが、その声は普段の彼女から想像もつかないような慈愛に満ちた声だった。

「お前……何歳だよ？」

「ん？まだ製造されてから一年もたっていないよってミサカはミサカは、前もこんなこと言ったよな……とか思いながらも元気よく答えを試みたり！！」

「……アクセラレータっていうかなんで一方通行来ないの！？あの人なら何でも反射させてくるって信じてたんだけどってミサカはミサカは少し顔を膨らませてみたり！！！」

「来ないわよ……その人は。」

聞き覚えのない声がエースと”打ち止め”の耳に入ってきた。

”打ち止め”が振り返ると、そこには”正義”の文字が入ったコートに着せられている感じの少女がいた。ツインテールが特徴的で歳はまだ小学生……にもなっていないのではないだろうか？

「……って、あなた！！今……私のことガキだっと思ったでしょ！！！」

少女が憤慨している。センゴクがため息をついた。

「誰でもお前のことはガキだと思つと思つぞ。」

「センゴク……お前もか……まあいい。もう慣れたから……よく聞けよ……えつと……」ラストオーダー「最終信号」つて言うのかな？

私の名前はアイズ！海軍の中将で歳は34の独身で恋人募集中だ
！！！」

そう言つてデンつとポーズをとるアイズと名乗る少女……じゃなくて女。

”打ち止め”が冷ややかな目を向けた。

「最後の恋人募集中つて言うのはいらないんじゃないつてミサカはミサカは冷ややかな目をしてみたり。

つていうか、海軍中将つて嘘つかない方がいいよ、うそつきは泥棒の始まりだよつてミサカはミサカは教えてあげたり。」

「嘘ついてないし。」

……そうだな……いいこと教えてあげようか……あんた……」

ジイ……つと”打ち止め”を見るアイズ……そうして、ニヤリつと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「……8月31日の深夜にアクセラレータという白髪の少年に、肌身離さず持っていた薄汚れた空色の毛布を奪われ、全裸を見られた……んでしょ？」

「な……なんでそれを知ってるの……！！……つてミサカはミサカは羞恥で顔が赤くなるのを押さえられなかったり……！！……」

”打ち止め”の顔が熟れすぎたトマトみたいに真っ赤になった。それとは逆に（すでに泣き止んでいた）エースが真剣な顔をしてアイズをにらんだ。

「そうか…噂には聞いたことがあったが……

相手の記憶まで読み取ってしまう程の”見聞色の覇気”の使い手なのに、容姿がガキという中将はお前か……」

「…君ねえ……まあ合ってるけど…ガキってどこ以外は。

それよりも……私はセンゴクに用があつてきたのよ。」

『ガキ』と呼ばれた怒りでピクピクつと眉を動かすアイズだったが、なんとか思いとどまりセンゴクに向き合った。

「…妙な少年が何人かいるんだ。

1人はまだいい……何でも反射する能力を持った少年で、こっちは私の部下総動員させて止めにかかっている。

で、もう一人は、お前も見えたかもしれないが……先程、船の上でハレム状態にあつた少年だ。

そっちの少年の方が厄介だ。」

「厄介だと？なぜだ？」

「……分からないんだ。私の”見聞色の覇気”を使っても、彼の過去は読めないんだ。」

センゴクの顔に衝撃が走った。

「…おそらくは…彼がさつきから見せている”能力を消す能力”に
関係しているんだと思うんだけどな。」

「……その少年に対する策はないのか？」

「あるに決まってるだろ？」

また、意地の悪そうな笑みを浮かべるアイズ。まるで…いたずらを
思いついたときの子供の表情に似ていた。

「…まあ…そのための下準備として……さつさと処刑をやった方が
いいと思う。」

彼の隣には今、”麦わら”がいるからね。”麦わら”は火拳^{エース}の首と
胴体が離れれば、動けなくなるのが目に見えているからね。」

「……確かにな……」

遠目でルフィを見るセンゴク。

そして…何かに決心したように息を思いっきり吸い込んだ。

「今からお前たちに”未来”がないことを見せてやる!!!」

身体が本調子とは程遠くて中々前へ進めない”白ひげ”……互いに
剣をぶつけ合っているミホークと神裂……そして満身創痕のルフィ
と上条をはじめ、海兵から海軍までが処刑台に注目した。

「やれ。」

非情の声がやけに広く混乱しているマリソフォードに響き渡った。

2人の死刑執行人が持つ剣が高く振り上げられた。

「やめろおおおー………！！！！！！」

力の限り叫ぶルフィ！！！！

無意識のうちに”霸王色の覇気”を繰り出すルフィ！！！！

………しかし、ここで忘れてはいけないことがある………

ルフィの隣には、上条当麻がいた。

……彼の右手に宿るは”幻想殺し”……すべての能力を無効化する力だ………

それは当然、”霸王色の覇気”にも適応される。

結果………”霸王色の覇気”は”右手”によって消されてしまい、ただの叫びとして木霊する。

ドサッ！！！

無情にも2本の剣が振り下ろされた。

第24話 あのだ刑台つて数時間で作り上げたものだと思う

ルフィの叫びが響く中……無情にも剣は振り下ろされた……

……が……

「……え……？」

エースの首は胴体とつながっていた。

剣は2本とも……エースの頭をかすって髪の毛2・3本を奪っただけで……彼の頭スレスレノところに刺さっていた。

「な……何をしている！！！！」

死刑執行人を怒鳴るセンゴク。失態を犯した執行人は慌てふためいて剣を再び振り上げようとするが、処刑台に勢いよく刺さってしまったので、なかなか抜けないようだ。

「……面白いことするね……」

セングクの傍らにいたアイズがくっくく…と笑った。

「…んで、抜けないからって尻もちでもついて…そのまま火拳の手錠に触れて…手錠を外してやるうってかい？

…そうだろ？ 執行人？ ……いや…

バロツク・ワークスのM 3とM 2！！」

言葉を放つのと同時にアイズは袖に隠しておいた飛び道具…クナイを執行人に向かって投げつける。

しかし…それは刺さることなく、片方の執行人の蹴りによって落とされてしまった。

「引つかかったわね…！！」

でも、あとちよつとだったのに…！！」

クナイを落とした執行人の顔が脱獄囚…M 2ことボン・クレーの顔へと変貌した。

「な…何バラしているんだカネ…！！」

よく見ると、もう片方の執行人の恐怖で歪んだ顔はM 3のモノだった。

「ここまで来たら、どうしようもないでしょ!!!??」

あの二人はアチシが相手するから、アンタはさっさと鍵を開けて、
麦ちゃんの兄貴と、その女の子を助けるのよ!!!」

「助けるだと?残念だが…それは無理という話だ!!!」

センゴクの体が急にデカくなり…金色に光り始めた。
その姿は…まるで大仏のよう……

「お前たち全員…私の手で処刑するのみ!!!」

ヒトヒトの実モデル”大仏”の能力者…センゴクの拳がボン・クレ
ーとM、3…そして手錠につながれ身動きが出来ないエースと”打
ち止め”に襲い掛かった。

「う…うひゃ〜!!絶体絶命かもってミサカはミサカは泣き叫ん
でみたり!!!」

「もうダメだカネエエ!!!」

「何諦めてんのよ!!!はやくドルドルで護りなさいよー!!!」

ボン・クレーは”打ち止め”と一緒に泣き叫ぶM、3に向かって、
クルクル回転しながら叫ぶ。

M、3も死ぬのは怖いので、あわてて自身の能力…”ドルドルの実
”の力を使い、腕から鋼鉄の硬度を誇るロウで防壁を出した。

白い口ウが4人を覆い衝撃を少しでも軽くしようと思構えていたが……いつまでたってもセンゴクの拳はやってこない……

「まったく……なに泣きべそかいてんだア？」
「……！」

1人の少年の声が4人の耳に届いた。
口ウをどけた向こうに広がっていたのは……

自身の拳を”反射”されて、よろめくセンゴクと……顔をしかめるア
イズ……そして……

「あなた一方通行！……！」

”打ち止め”は、赤眼で白髪の少年……アクセラレータ一方通行の姿を見つけると、
嬉しそうな声を上げた。

「助けに来てくれたんだね！つてミサカはミサカは嬉しさで涙を流
してみたり。

つてか、怖かったからもう少し早く来てほしかったかもつてミサカ
はミサカは本音をこぼしてみたり。」

「世話かけやがってエ……ガキが。」

ふくれっ面で涙目になりながらも、嬉しそうな顔をした”打ち止め

”の顔を見ると、安心したような表情を見せた一方通行。
そしてM　うから事前に彼がロウで作った鍵を受け取った。

「…つたく…後で再教育が必要ね…」

一方通行に負けた自分の部下を思い頭を押さえるアイズ…

「いいわ…その”打ち止め”って子は、連れ帰って構わないわ。」

「正気かア!?!」

「ええ…でも…」

火拳のエースは別よ!!!」

腰からフロントロック式のピストルを取り出し、引き金を引くアイズ…

だったが…

「エース!!!」

2人の間に割り込んできた人影の身体が、ぼよん!!!と銃弾を跳ね返した。

「…ルファイ!?!」

「麦ちゃん!？」

そう…その人物は、麦わらのルフィだったのだ!!

「ありがとな、ボンちゃん!それから3!!エースの処刑を邪魔してくれて。」

太陽を思わず満面の笑みを浮かべるルフィ。

処刑台の上は上で色々あったので、ルフィが革命家”イナズマ”が作った処刑台までの”橋”を使って処刑台に乗り込んでくることに気が付かなかったのだった。

ちなみに、その”橋”は海軍中将ガープによって壊されてしまい…なんとかゴム人間のルフィは渡ることが出来たが、身体的には常人の上条当麻は渡ってこられなかったのだ。

「はあ…はあ…今…鍵を…」

ハンコックから貰ったエースと”打ち止め”の手錠の鍵を取り出すルフィ。

だったが……

「!?!?」

突如放たれた黄猿のレーザーのせいで鍵がまっ二つになってしまったのだ。

「つてめエ…せつかくの鍵を……!?!」

怒りを隠せない一方通行だったが、その表情は足元が大きく揺れたので崩れてしまった。

元々急ごしらえの処刑台だ。

こんな大騒ぎに耐えられるわけがない。

処刑台が半壊し、一方通行・”打ち止め”ペアは落ちないですんだが、ルフィ達は落ちて行った。

268

「うぎゃあああ!?!どうすんのよー!?!?!」

「鍵を作る!今すぐ錠を外すんだカネ!?!」

ドルドルの実の能力を使い再度、ロウで合鍵を作り出すM 3。

「わがった!?!」

「逃がすな!?!処刑台ごと撃て!?!」

処刑台の上からアイズが海兵達に叫ぶ。
すると海兵達も同じことを考えていたのか、砲弾が発射された。

「早く受け取れ!!」

合鍵を作り終え、ルフィに渡すM³。ルフィは必死でそれに手を伸ばす。

そうしている間にも、砲弾が迫ってくる。

すでにアイズとセンゴク…それから一方通行と”打ち止め”は、砲弾から身を守るため処刑台を離れていた。

そして…すぐに砲弾が処刑台に激突し…大爆発を起こした。

「…本当にアイツら…無事なんだろうなア？」

ルフィ達を砲弾から助けに行こうとする自分を止めた”打ち止め”に向かつて、一方通行は問いかけた。
が、”打ち止め”は笑っていた。

「大丈夫だよ、ってミサカはミサカは笑顔で答えてみる!!」

「…本当かア…!!？」

その時、一方通行も”打ち止め”の言ったことが本当だと確信した。
なぜなら……爆炎の中に炎のトンネルが出来ていたから……

「お前は昔からそうさ……ルフィ!!!
俺の言うこともろくに聞かねえで
無茶ばかりしやがって!!!」

それは、エースの作り出した炎のトンネルだった。

「エース!!!」
「ウオオオオオオ!!! エース!!!!!!」

兄を助けることが出来た!!! というルフィの嬉しそうな声が……
そして、彼が自由になったことを祝福する仲間たちの声が……
戦場マリンフォードに響き渡った。

第25話 騎士道精神ってカツコイイ気がするけどめんどくさい

「火拳が…解き放たれたか……!!」

その様子を苦々しげに見たアイズは電伝虫を取り出して、何やら部下たちに指示をしていた。

「……まだそこにいたのか？」

戦場の方を向いたまま…一方通行と”アクセラレータ打ち止め”に語りかけるアイズ…

「テメーこそ…俺たちを放って置いていいのかア？」
「構わないさ。」

アンタの能力への対抗策は未定だし……
それに、そっちの嬢ちゃん知らないが、アンタはこの戦場に興味がないみたいだからな。

……とはいっても……元の世界に帰れないみたいだがな……
「!? テメエー…なんでそれを……!？」

アイズに詰め寄る一方通行。アイズは両手を上にあげて降参の意を示した。

「私は”見聞色の覇気”の使い手でね……記憶まで読み取れるのさ。」
「……方法は知っているのか？」
「ガクエントシとやらに帰る方法か？
さあな……ここに來ることが出來た理由を知っている奴ならいる
が……帰る方法は分からん。」
「……來ることが出來た……理由だと？」

眉をしかめる一方通行。

「あそこで……へばつてる赤髪の少年がいるだろ？
彼の知識では『古代ギリシャ系魔術の応用でクロノスとカイロスの
魔術構築式を無理矢理融合させたら、空間にゆがみが生じた』……
つと記されてあるぞ。」
「オカルト魔術？」
「まあ……これ以上は話しても無駄だな。
で……ものは相談だ。」

真剣な顔立ちになって、一方通行と”打ち止め”に向き合つアイズ
……

「どうだ？帰る方法が見つかるまで、海軍に入隊しないか？」

「待て！この場から逃げる気が、火拳に委わら。」

攻撃をかわし…時には反撃しながら進むエースとルフィの前に立ちふさがる、銀のような白い光沢のある槍を構えた一人の海兵がいた。『正義』という文字の入ったマントを着用しているので相当の地位なのは予想できるが、マントの下は普通に雑兵が着てそうな海兵の制服だった。

「敵に背を見せるとは……戦士として恥ずかしいと思わないのか！

」？

「「いや」「

声が重なるルフィとエース。

「だって俺たち…海賊だしな！！お宝取り返したら逃げるのが常套手段だ！」

「戦士じゃないんでね。」

その問いに怒りを覚えたのか、その海兵は槍の先端を2人に向けた。

「その答え！！男のくせに騎士道がなつとつとらんぞ！！
我が正してやる！！！」

「いや…俺たちに物理攻撃は無理だからな！！！」

そのまま『ゴムゴムのピストル』を繰り出すルフィだったが……

「な…なんだこれ！？」

槍に触れた瞬間、槍がグニャ〜と曲がり…溶け出し…液体となつてルフィの腕を捕えたのだ。

274

「ルフィ！！！」

「…貴公では弟を助けることは出来ん。」

「やってみねえと……」

「待つて、エース！！！」

火拳を繰り出そうとするエースの前に割り込む短髪の少女がいた。余程慌ててきたのだろう。髪がぐしゃぐしゃで息切れが半端なかったが、それでも残った力で立っていた。

「お前は…確か……俺の嫁疑惑が駆けられていた女！！！」

「よ…嫁！？し…失礼ね！！わ…私はまだ処女よ！！！！
それに私には『御坂美琴』っていう名前があるの！！！！
つて…そんなことより…火拳を使っちゃダメ！！」

耳まで真っ赤になってエースに訴えかける美琴…

「なんでだ！！？弟が…」

「あの光沢は、間違いなく『水銀』よ！！」

「すい…ぎん？」

水銀が何であるか分かっていないエース……だったが…

「当たり前だよ、御嬢さん。」

美琴の読みはどうやら当たりだったようだ。
パチパチっと軽く手を叩く海兵。

「我が名は海軍大佐メスヘル……見ての通り”マキユマキユの実”
……つまり”水銀”を操る能力者だ。」

「だから、水銀ってなんだよ！？」

「本当に知らないの！？」

常温でも液体という珍しい……非常に強う毒性を持った鉱物よ！！
それが火にあたって気化でもしたら……水銀中毒になっちゃうわ
！！！！」

それをきいて拳をひっこめ、唸るエース。

「さすがにそれは……ってか『騎士道』とか言っている割には自分が行っていることと矛盾してんじゃないか？」

「騎士道とは、主の命を叶えること……主に一心に使えることを最優先とするのだ。」

「主に仕える？意味わかんない！！」

どうせ主って言っても高みの見物している天竜人には頭も上がらぬへっぴり腰の弱虫な存在なのよ！？」

美琴が水銀対策を必死で考えている時間稼ぎで口にした言葉は、メスヘルを怒らせたようだ。

「……確かに我が主は海軍に所属している……ゆえに天竜人には逆らえない。」

しかし、それが今、何の関係があるのだ！？

我が主は……誤って実を食べたせいで……村で『異形』と罵られ能力で村を壊した我を……軽蔑の目で見ないで下さった！！

本来ならインペルダウン行きのを、元来の望みであった海軍への入隊を許可してくださった！！

我が主……アイズ様を罵るなど断じて許し難し！！！！」

槍をつかんでいない方の手を水銀に変化させ、美琴に襲い掛かった

のだ。

美琴はコインを取り出すが、疲労のあまり足がもつれてコインを落としてしまった。

カラカラ…っとコインが遠くへ転がっていく……

「まずっ！…！」

思わず目を閉じる美琴………だったが……

「あ…あれ？」

水銀はいつまでたっても来ない………恐る恐る目を開けると……そこには泥だらけの白いシャツを着た少年の後ろ姿が見えた。

「ば…ばかな…なぜ…我の水銀が…！？」

「水銀なんて危なっかしいモノ扱っくんじゃねえよ。」

そういうと、少年はそのままルフィを放さないでいる槍にも触れた。

もともと槍はメスヘルの腕の一部が変形してできていたものだったので、彼の”右手”が触れると槍はみるみる間に元の腕に戻った。

「ゲホツゲホツ……サンキューなトウマ……ってかすげえな。」
「じゃあ、俺が腕をつかんでいる間に、こいつを倒してくれないか？」

少年…上条当麻はそう言っただけで笑うと、エースがニヤリと笑った。

「言われなくてもな。
火拳……！」

「ぐわあああああ……！」

エースの技……火拳”の直撃で意識を混濁するメスヘル。
ちなみに、火が腕に移る前に上条は離れていた。能力は使えなかったのだが、久々の打撃攻撃をもらう浴びたことで、それどころではなくなってしまうていたのだ。

「ふう……何とか倒せたな……弟を救ってくれてありがとな。」
「当然のことでしたよ。」
「まったく……アンタにはいつもひやひやさせられるわ……」

はあ……つとため息をつく美琴……
そのまま親父こと”白ひげ”の方を見る。

見た限り、原作よりずうーっつと調子がいい彼……どうやら余程のことがない限り”新世界”と一緒に帰れそうだ。

海軍は戦意消失している人たちも結構いるし……。

このまま何事も起こらなければいい……美琴はそう思っていた……

第25話 騎士道精神ってカッコイイ気がするけどめんどくさい(後書き)

くオリキャラ紹介く

えっと…今回登場したメスヘルの紹介です。

・メスヘル

所属 海軍本部中将アイス直屬部隊

階級 海軍本部大佐

性別 男

悪魔の実 ”マキユマキユの実”

…マキユマキユというのは、水銀の宿星・マイキュリー水星”マイキュリーから取りました。

その名の通り水銀を操る能力者です。

当初はロックマン で登場したルーイズの1人… キュリーの
ような技・性格にしようと考えましたが、”騎士道精神”を持たせ

たので、おじちゃんになりました。

幼少期に誤って悪魔の実を食べたせいで忌み嫌われ…海軍入隊試験前日についてプッチンして村人全員を殺してしまった……のに、アイズに拾われ海軍に入隊したという少し変わった経歴の持ち主です。

もう少し活躍させてあげたかったかもな……

第26話 人生予想外のことばかり

「断る」

アイズが差し出した手をパシッと叩いた^{アクセラレータ}一方通行。

「つまり海軍には入隊しないと？」

「つたりめエだ。ンなめんどくさい組織に入れるかってんだよ。」

「ミサカも同感かも！ミサカを殺そうとした組織になんて入らないんだから！！ってミサカはミサカは恨めしげな眼をしてみたり！！」

「はぁ……」

大きくため息をついたアイズ……

「でもさ…アンタたちはこれからどうするつもり？」

「言っておくけど…アンタ達は”モビー・ディック号”に便乗させてもらう予定みたいだけど……」

あの船はもう沈むから無理よ。」

「…なに言ってるんだア？」

その場を去りかけた一方通行の足が止まった。その様子を見たアイ

ズは悪戯を考えた子供のような笑みを浮かべた。

「だから…あの船はもう沈むんだって。」

「意味わかんないんだけど！明らかに戦場は”白ひげ”優勢じゃない！！これをどうひっくり返すつもりなの！！？ってミサカはミサカは筋の通った説明を求めてみる！！」

「…ここから戦場を見てごらんよ…最終信号」
ラストオーダー

アイズと一緒に戦場を見下ろす一方通行と”打ち止め”……

だが、どう考えても”白ひげ”側が優勢なのは一目瞭然だった。歓声を上げて船へ戻る海賊たち……

追いかける海兵もいたが、正規の海兵は一握りだった。

……残る多勢は王下七武海の1人…ゲッコウ・モリアと彼の能力が作り出したゾンビ軍団だ。

一方通行は鼻で笑った。

「圧倒的にお前らの負け戦だなア」

「本当にそう思う？」

アイズは面白そうに問いかけた。

「馬鹿じゃないの？どう考えても……」

「海兵は…あれだけしかないかと本当に思う？」

「……そう言えば……なんで他の七武海は出てねェんだ？」

ココに来る途中でミサカに聞いた海軍にいるという七人の政府側の海賊の話思い出す一方通行。

戦場に来てから『アア……アレがそうか……』と思ったのを思い出す。

……が、今、戦場で海賊たちを追いかけている七武海は……モリアしかない……

「白ひげ”も落ちたな……

これで自分をもっとボロボロだったら、戦場に1人残って海賊たちを逃がす策を取ったかもしれない……

それだったら、この方法は使わなかったのにな……」

いつの間にか近くにいたセンゴクがつぶやいた。

「テメエら……何しようとしてんだ……？」

「……黙ってみていたら分かるさ。」

アイズが静かにそう告げる。アイズの顔から先程までの笑みは消え……ただ冷徹な光だけが眼に宿っていた。

その表情は“一方通行”打ち止め”に悪寒を走らせたのだった。

「お前たち…本気で逃げられると思うちよるんか……！
めでたいのう。」

巨大なマグマの手を放ち、海賊たちを吹っ飛ばす海軍大将・赤犬。
そのまま一気にルフィ・エース・御坂美琴そして上条当麻の近くまでやって来た。

「エースを開放して即退散とは…とんだ腰抜けどもの集まりじゃのう白ひげ海賊団。

船長が船長…それも仕方ねエか……！！

なにせ”白ひげ”は先の時代の敗北者じゃけえ！！」

その言葉を聞いたエースは走るのを止めて立ち止った。

「取り消せよ……！！…！！今この言葉……！！」

エースはいつになく…いつも笑顔を浮かべている彼からは想像もつかないような厳しい顔をしていた。

「エース!!!?何立ち止ってるのよ!!!」

美琴がエースの腕を引っ張って先へ進もうつと促すが、びくともしなかった。

彼は赤犬をにらみ続けていた。

「あいつ…親父を馬鹿にしやがった…!!!」

「エース!!!」

ルフィが叫ぶがエースは弟の方を見ない。ただただ…赤犬をにらむ…
すると赤犬は、何故自分が睨まれているのか分からない…っと言った顔をした。

「お前の本当の父親ロジャーに阻まれ『王』になれず終いの永遠の”敗北者”が”白ひげ”じゃア。

どこに間違いがある!

親父親父とゴロツキ共に慕われて……

家族まがいの”茶番劇”で海にのさばり……」

「やめろ!!!」

エースが叫ぶが、赤犬は声の調子を変えない。

「……………何十年もの間、海に君臨するも……………」

『王』にはなれず……………何も得ず……………！！

終いには口車に乗った息子という名の”馬鹿”に刺されそうになり、それらと共にまた海に戻る……………」

どうせ海に戻ったところで『王』にはなれんのかな。

……………実に空虚な人生じゃありませんか？

「やめろ……………！！」

「のるなエース……………戻れ……………！！」

ずっと向こうの方で隊長格のイゾウが叫ぶが、彼の耳にはもう何も届かない……………！！

ポポポ……………っと少しずつ……………身体を火に変化させ……………戦闘態勢を取るエース……………

「親父は俺たちに行き場所を与えてくれたんだ……………！！

お前に親父の偉大さの何が分かる……………！！」

「人間は正しくなけりゃあ生きる価値なし……………！！

お前ら海賊に行き場所はいらん……………！！

”白ひげ”は敗北者としてこれから死んでいくのだ……………！！

ゴミ山の大将にゃあ逃え向きじゃろうが……………！！」

「白ひげ”はこの時代を作った大海賊だ!!!
この時代の名が!!!”白ひげ”だア!!!!」

エースの憤怒が最大限に達した時!!火拳と赤犬の溶岩の拳がぶつかり合った!!

「うわあ!!!」

「な…なんでエースが焼かれてるんだ!!!?」

同じ”火”なのになぜか焼かれるエース…に上条だけでなく、ルフィや他の海賊たちも驚いた。

「そりゃそうよ!!!」

赤犬の火は”火”を焼き尽くす”溶岩”だもの!!!ただの”火”では勝てないわ!!!」

美琴はそう言いながら最後の力を振り絞り、大量の砂鉄を操っていた
く……

「…ほう……次にワシが狙おうとしたもう一人の大罪人が分かったのか……」

感心したように言う赤犬…

そう…今、美琴の操っている大量の砂鉄は、ルフィと赤犬との間に漆黒の壁を作っていた。

「はあ…はあ…早く逃げて！！溶岩相手じゃ長く持たないわ！！」

力尽きて倒れ込んでいるルフィに向かって、肩を上下させながら叫ぶ美琴。

呆然とするルフィにジンベエとボン・クレーが走り寄ってきた。

「あの嬢ちゃんの言うとおりだ、ルフィ君！

早く逃げるぞ！！」

「麦ちゃん！急ぐわよ！！」

「でも…でも…エースが…」

「エースは他の奴が連れて行く！今君が狙われてるんだ！あの嬢ちゃんの努力を無駄にするのか！？」

そう言っただけでジンベエがルフィを担ぐと走り出す。

赤犬は軽く舌打ちをした。

「…ジンベエなどすぐに追いつく…」

大罪人をかばった罪は重いんじゃないか…嬢ちゃん。」

溶岩を纏った赤犬の拳が美琴に襲い掛かった。

が……

「止める！！」

上条が間に入り右手を伸ばすことで、確かに溶岩……と一緒に実はま
とっていた”武装色の覇気”も消せたが、長年鍛錬してきた筋肉の
賜物である拳は消すことが出来ない……！！

「ぐわああ！！！」

「きゃああ！！！」

上条が赤犬の拳で飛ばされ、後ろにいた美琴も、とばされた上条に
あたり地面に打ち付けられた。

「わ……わりい御坂！」

「……へ……平気だって……ば！！！」

まだまだ動ける怪物みたいな体力の持ち主の上条が立ち上がり……も
うフラフラで立つこともままならなそうな美琴も……なんとか立ち上
がった……が、すでに砂鉄の壁は維持できなくなってしまった。

音を立てて壁は崩れていく……。

「さつさと船に戻りな。」

いつの間にか二人の側に”白ひげ”が立っていた。

「息子と娘にはかり無茶させてたら、親父の名が折れる。」

赤犬の方を向く”白ひげ”……。

「行け！船長命令だ！！」

俺もこの馬鹿を少し食い止めたら船に戻る。」

原作よりもはるかに元気がいい………というかこの戦争中、全く無茶をしていない”白ひげ”が長刀を構えた。

「……はぁ……はぁ……」

絶対来てよね！！！！」

美琴がそう言って走り出した。続いて上条も走り出す。

が………

「もう”白刃取り”はされませんよ!!!」

鋭い声の上条に向かって飛んできた。

上条がそして見たモノは…銀色に光る鋭いモノ……

「たあああ!!!」

「っ!?!」

避けることが出来なかった。

”白ひげ”に目を直前まで奪われていたからか……あるいは彼自身の疲労のためか……

迫りくる剣を避けることが出来なかった。

スパアアアン!!!

愛刀である”時雨”で上条の右腕を…肩の辺りから切ったのは、海軍少尉たしぎだった。

赤い血のラインを描きながら……上条の右腕は宙をくるくると舞っていた……。

第27話 度を過ぎた恐怖は人間を壊す

「よし……」腕が飛んだ！早く準備しろ！！」

たしぎが上条当麻の右腕を切断したところを見たアイズは、電伝虫に向かって早口で何かを叫ぶ。

すると、アイズたちがいる下の方から大きな大砲……のようなものが現れた。

「……何をするつもりだア？」

「あれは軍の科学者：Dr.ベガパンクが作り出した最新兵器……陽子収束弾で山1つ消すことが可能と言われている……が、実戦はおろか、試験も行ったことがない。

奴が言うには”の谷のナウシカ”に出てくる”巨神”が口から発射する光線と同じレベルの効力があるのだとか……」

「……なんで”ナウカ”知ってんだよ……」

それは置いておくが、そんなの発射した日にはためえら海軍側にも打撃があるんじゃないか？」

最もな疑問を口にする一方通行。

アクセラレータ

それに対してセンゴクもアイズは余裕の笑みを崩さない。

「…分からないのか？
今、戦場に立っているのは”自然系悪魔の実の能力者”^{ロキア}だけだ。
他の奴らには被害を与えないため下がらせてある……。」
「でも、モリアは自然^{ロキア}じゃないし、たしぎにいたっては能力者でもないよってミサカはミサカは疑問を口にしてみたり!!」
「…モリアは上からの命で”殉職”してもらったからな。
こうすれば確実に殺せる。……たしぎという女海兵は……」
「アレは私の命令だ。」

センゴクの言葉を遮るアイス。

「もともとスモーカーの部隊に入るまでは私が面倒を見てた海兵だ。
……このことを私の部下・元部下に連絡したところ、彼女が真っ先に名乗り出た。」

だから彼女に任せることにした。」

「つてめエ…人の命をなんだと思って……」

「10000を越える人造人間を殺した奴に言われたくないね。」

「…ッ!!」

『元帥!!中将!!』

砲撃準備できました!!』

電伝虫から伝えられる言葉……センゴクが重々しくうなずいた。

「よし…撃て!!……!!」

砲台から赤い閃光が、物凄い勢いで発射された。
”打ち止め”は思わず目をつぶった……が……

「……………え？」

……………何も起こらない……………

「な……なんで……？」

「……も……もう一発放て……！！！」

『り……了解しました……！！』

もう一発放たれる………が………光が戦場に満ちた………かと思うと………巨
大な力は………跡形もなくなってしまう………。

「……………どうして？」

あの右手は……………！！？」

アイズは絶句した。

右手は確かにない……………が……………

右手のあったところに………透明な”何か”が見えたからだ。

「なんなんだよ……あいつ……」

久々に震える身体を押さえられないアイズだった……。

……死ぬことに後悔はなかった……

確かに夢志半ばで死ぬのは悔しい……でも……あの人の頼みは聞き入れたかった。

それに、海賊からほとんどノーマークで、剣の扱いに長けているのは自分しかいない！っとたしぎは命令を聞いたときに感じ、まっさきに名乗りを上げたのだった。

……悔いはない。

先程であつた少年の右腕を何のためらいもなく切り落とせたのは、
そのためだ。

……あとは死を待つのみ……だったのに……

「な……なんで笑っていられるんですか？」

致死量に達しかねない血をダラダラつと流す少年……
激痛のあまりくるってしまったのかと思つたが……それとは違う気が
する……

……まるで”勝利”を実感しているみたいな普通の笑い……

たしぎは刀を更に強く握りしめた。

「……ちよつと……大丈夫なの？」

少年の仲間と思われる短髪の少女が心配そうに尋ねるが、少年は全
くそちらを向かなかつた。

ただただ……ばしゃばしゃと切断された肩口から信じられないくら
いの量の血液を流しながら……こちらに向かつてくる少年……

「な……何をしているのですか!？」

もうあなたは何をしようとも無意味です。もう……ここで私もあなた

「達も死ぬのですから!!」

ズドオオオン

遠くから何かを発射する音が聞こえた。

…それと同時に赤い光が全てを包み込む。

ああ…これで私の人生は終わった…そう思ったのに…

「…こんなもので俺が殺せるとでも？」

光が瞬時に消える…たしぎの前には元の世界が広がっていた。

…先程の攻撃を、目の前の少年の肩口に集まる” なにか ” が消している…いや、その肩口に集まる巨大な透明な力が” 相殺 ” しているということに気が付いたのは、二度目の光が消えてからだった。

「…う…うそ…」

動けない…全く動けない…

ただ立って…笑みを浮かべた片腕を奪われた少年がたどり着くのを

待つだけ……

逃げないといけないうと頭では分かっているのに……身体が全く動かなかった。

それはアラバスタでミス・オールサンデーこと、ニコ・ロビンに命を奪われかけた時に感じた感情に近かった。

涙がこぼれるのを抑えることが出来ない……

「おい。」

少年の言葉に、たしぎの身体はビクリッと震えた。

「まさか右腕潰したくらいで、俺の”幻想殺し”を止められるとでも思ったのか？」

「あ……あう……」

物凄い覇気……たしぎは自分の顔面が蒼を通り越して白になっているのが感じた気がした。

呼吸が出来ない……動くこともできない……

……逃げられない……

犬歯をむき出しにして、赤光すら放つかと錯覚するほどの眼光を見

せながら近づいてくる少年……

バタリ……

振り向かなくても分かった……後ろにいた疲労が極限状態にあったさっきの短髪少女が倒れたのだ。

各所で名のある海賊たち……海兵達が気を失っていて倒れる音が聞こえた。

今、少年の後ろで構えていた……白ひげ海賊団の隊長格……ハルタや傘下の海賊である遊騎士ドーマが倒れている……

自分も倒れたい……！でも……何かがそれを許してくれない……そんな空気が漂っていた。

瞬間

彼の右手に異常が起きた。

常に新たな鮮血を流し続けていた右腕に、噴水のように鮮血を流れ出していた右腕に……ぞぶり……と透明なガラスをまき散らしたかのように……得体のしれない何かが形作っていく……

「い……いや……」

透明な何か強大な力は”龍の顎”の形になった。
アニメとかで出てくるかわいらしい竜ではない。伝説上の生き物として本に出てくるような”龍”……海王類ですら逃げ出すのではな
いかという迫力をもった透明な『龍の顎』……。

恐怖のせいか、逆に意識がはつきりしていた。

見えないはずの透明な顎は少年の血で染まり……少年はそれが己の腕
であるように、のこぎりのような牙がズラリッと並ぶ口をゆっくり
広げた。

これが少年の力の正体なのだろうか？たしぎの思考は停止寸前だっ
た。

(む……無理……敵うわけ……ない！！)

恐怖……たしぎの心を支配しているのはそれだけだった。

己の追い続けた夢も未来も……海軍としての誇りもなく……

ただ胸の内にあるのは”死”への恐怖……

「……や……やめ……」

目をつぶることは出来なかった。

楽しそうに笑う少年が近づいてくるのを……龍がガバリッと口を広げたのも……黙ってみていることしかできなかった。

グシャアアアア

鮮血が飛び散る。

視界が深紅に染まった……が……

「え……う……うそ……？」

最後に自分のものではない鮮血を……自分ではない人物の腕が竜の顎に飲み込まれたのを見たとき……

たしぎの意識は、ようやくそこで深い闇へと沈んでいった……

第28話 しっかり準備してないと予測不能の事態の時に対処できない

「……う……嘘だろ……」

エースは……目の前で起きている考えたくない事実のせいで……逆に上条の発している『覇気』でつぶれかかっていた意識が覚醒していた。

上条の右腕を切った女海兵が、とうとう意識を失い地面に倒れ込んだことなんてどうでもいい。

それよりも……

それよりも……上条の右腕のあった場所に出現した、透明な『龍の顎』が飲み込んだのは……ある人物の左腕……それも……

「親父イイイ！……！！！」

自分^{エース}が誰よりも敬愛・尊敬していた親父こと”白ひげ”の左腕だったのだ！

「ぐッ……！！！」

「……っち……」

痛みで顔をしかめる”白ひげ”を見て、上条は笑みを浮かべたまま

舌打ちをしていた。

『龍の顎』が持ち上がり…そこからは無傷なままの”白ひげ”の左腕が現れた。

先程は、左腕が食われたことで、物凄い鮮血が飛び散っていたのに、跡形もない。

腕はちゃんと肩につながっていた。

「……グララララ……これで気が済んだか…トウマ？」

「親…父！なに…や…ってんだよ！！」

エースは思わず…動かさにくい口を動かしてまでして”白ひげ”に呼びかける。

”白ひげ”は、苦しげな表情を見せながらも、戻ってきた左腕をそっと撫でながら少し笑った。

「トウマを…俺の愛する息子を呼び戻すために決まってる…エース。」

「…どういうことだよ？トウマなら親父の目の前に……」

いつの間にかエースの隣まで来ていたマルコが問いかける。

…確かに”普通の上条当麻”では考えられない覇気や殺気を放っているが、それでも目の前にいるのは上条に違いはないはずなのだ。

「マルコお…お前にはアレが”トウマ”に見えるのか？」

アレはトウマじゃねえ……あの右腕に宿る化けもんだあ……たぶん

な。」

「化け物？酷い言い方だな。」

上条はため息混ざりの声を上げる。

そして視線をセンゴクたちのいる場所に向け、普通の笑みを浮かべた。

「たしぎは気を失ったからな……次はお前たちだ……海軍。」

海軍内に緊張感が走った。

このすさまじい覇気の中でも意識を失わずにいる海兵自体が少なかつたし、そういった海兵達は歴戦の猛者が多い。今回の『人知を超えた恐怖のようなもの』に対しても、出来る限り平静を保とうとしていたのだが……上条に完全に笑顔で標的ロックオンされたことで、緊張感が走ったのだ。

「グララララ……トウマ……お前……お前がしたいのは海軍を滅ぼすことじゃねえだろ？」

……”白ひげ”が問いかけるが、上条は”白ひげ”の方を向かない。ただただ……怯えと恐怖の色が一瞬見えた海軍を面白そうに眺めていた。

「お前はミコトと一緒にエースを救って、元の世界に戻ることが目標だろ？」

そんなテーマに不釣り合いな馬鹿でかい力を振り回して、海軍をせん滅することが目標なのか？

こっちに戻ってこい！！トウマ！！！！」

”白ひげ”が覇気を纏わせながら叫んだ時……！！

「ぐっ！！！！」

上条が苦しそうに低く唸り始めた。

「黙れ、時代遅れの老いぼれが……！！！！」

そう言って再び竜の顎を持ち上げた時……！！！！

ボンッッッ！！！！

上条は、自分自身の力で『龍の顎』を握りつぶした。

龍の顎が開きかけたとき、その上から、それよりもさらに強大な力の塊が口のように開き、丸ごと飲み込んでしまったのだ。まるで咀嚼するかのよう……彼の肩口の透明な空気は、砂糖水のように揺らめいていた。

あれだけの……隊長クラスの者の気をも奪う力を持ったモノが……

ほんの一瞬で……

「『テメエ』が……何をやるつかしてるかはわかんねエ……」

上条の口が動いた。……ただ……その言葉は、”白ひげ”……エース……マルコ……彼らの中の誰かに発した言葉ではなかった。その証拠に、彼は何も見ていなかった。ただ……『見えない何か』と対話するかのよう……言葉を紡いでいく。

「だが、この身体は俺のものだ。人の身体を黙って使うかよ……」
それに……ここは『俺』がどうにかするから『テメエ』は引っ込んでる……」

ずるずるずるずるずる……！！！！

つという湿った音が、しん……つと静まり返ったマリソフォードに木霊する。

そして、音が止んだ時には……竜の顎が消え、彼の右腕はすでに元のままの状態に戻っていた。

「ゼハハハハ！時間かかっちゃまったが……正義の門も通れたしな
！！」

下品な笑い声を上げる男がいた。

…彼こそが”黒ひげ”ことマーシャル・D・ティーチだ。

インペルダウンに”最凶の船員^{クルー}”を集めるために行つて、実際に囚人の中でも、震えあがるような名前と力を持った奴らを仲間に加え…いざ！！マリンフォードへ………っというはずだったのだが……

「……一体何が起きてるんだ!？」

「ミステリーだな……」

彼らが見たモノ……それは破壊の限りを尽くされた軍艦の数々……
アクセラレータ
一方通行が序盤で破壊した船のだが、ティーチ達はそんなことを知らないで、慌ていた。

乗ってきた海軍の船も使い物になりそうにない……そもそも、どこ
どうやったらあんな短期間で船をあそこまで破壊できるのかなんて、
ティーチには想像がつかなかった。

……仕方ないから即席の丸太船を何隻作って向かうことにした。……
……これから全世界に名をとどろかせるには貧乏臭いが……無い
よりはましだ。

……で、タライ海流に乗り、新しい仲間と共にマリンフォードまで
辿りつこうとしていたティーチ一行……つまり”黒ひげ海賊団”だ
った。

「ウイーーーーハハハ！！」

どれだけ混乱してるか、見ものだ！！」

海賊団の1人……プロレスラーを思い起こす仮面を着たジーザズが、
テンション高めに叫ぶようにして言い放った。

……その時だった……

ズドオオオン！！！！

『赤い閃光』が刹那！ティーチ達の船の側を通ったかと思うと……

ドツカアアアン！！

「「「うぎぎやああああ！！！！」」」

状況を把握する前に爆発が巻き起こり、強烈な光の後に爆発の音が即席海賊団に襲い掛かる。

……これで即席の丸太船は、粉々になり……
爆発で”自然系^{ロギア}悪魔の実”の能力者以外はダメージを直にくらってしまい死亡。

しかし……”自然系”とはいっても弱点がある……
そして彼らがいたのは不幸にも海の上……悪魔の実のせいでは海から嫌われた能力者たちは全て全員が泳げないことは周知の事実。

丸太船の破片すらないという状況なので、支えとするものがなく……
……ティーチは海に触れたことで力が抜けてしまい……
……抵抗も出来ないまま……海底へと深く……深く……沈んでいった。

”黒ひげ”海賊団…これにて壊滅…
だが、世間の皆がそれを知るのは…もう少し先の話…

第29話 誰にでも弱点はある

ゴキイイイン!!!

何かを弾く音がマリンフォード中に響き渡る。

それは上条当麻の復活した右腕が海軍の最新兵器である『赤い閃光』を弾いている音だった。

上条の”幻想殺し”はあまりに莫大な力だと消すことが出来ない。だからそのことを逆手にとって、海軍からの攻撃が来ると、その側面に掌を置き、列車のレールを切り替えるように押して、滑らせ、その圧倒的な力の攻撃の軌道をそらしているのだった。

『赤い閃光』は、そのまま海の方へと攻撃の進路を変えられている。もし、海に船でも浮かんでいたのなら大惨事になりかねないが、今現在…このマリンフォードに近づいてくる船があるわけない……と考える、上条当麻は攻撃を海の方へと軌道を変え続けていたのだった。

「これからどうするつもりだア？もう攻撃の手段は残ってないんじゃないの？」

意地悪い笑みを浮かべた一方通行はアイズの方を見た……が、そこにはセンゴクしかいなかった。
一方通行は顔をしかめた。

「おい……あのガキみたいな中将はどこに消えたんだ？」

「……アイズなら戦場に出て行ったぞ。」

「えええー！！？ちよつと意外かもってミサカはミサカは純粹に驚きを口にしてみたり！」

あの人って完全に後方支援のデスクワーク人間って見えたのに……」

「……まア俺たちには関係ねエ……」

とつとと俺たちも帰るぞ。」

一方通行がセンゴクに背を向けて歩き始めた時、センゴクの低く通った声が一方通行の足を止めた。

「……海軍をなめるんじゃないぞ。」

「……策ならまだある。」

「……この状況を覆せるほどのかア？」

「……お前たちはまだ若いから分かんたろうがな……」

所詮……人は誰でも『若い』からは逃れられないということだ。」

「^{ゲンコッ}拳骨・流星群”！！！！」

『赤い閃光』が止んだと思ったら、今度は大量の…余裕で10000発を越える超高速の砲弾が海賊たちに襲い掛かってきた。

…これはただの砲弾であるため、”幻想殺し”は通用しない。よって、まだ船に戻っていない海賊たちに容赦なく襲いかかっていく。

「うう…ここまで来て…不幸だあー！！」

砲弾の合間の駆けて行く上条だった…が…

「うわぁっ！！」

ドサアッ！！

これまでたまっていた疲労が出てきたのだろうか…。足がもつれ、派手に音を立てて上条は転んでしまった。

それを見計らったように、ピタリ…と砲撃が止まり…一瞬の静寂が
マリンフォードを覆った……が…

「いまだー!!」

女の鋭い声が戦場に響き渡った……のと同時に何人かの人影がすば
やく行動を開始し始めた。

まず、小柄で子どもと見間違えそうな女海兵……海軍中将アイズが、
丈夫そうな鎖のついた手錠を投げ上条の右腕を拘束した……のとは
ほぼ同時に、1人の美人女海兵……海軍大佐”黒檻のヒナ”が手を伸
ばし上条の左手と両足を通過させる……すると、彼女の能力……”
オリオりの実”の能力で、彼の左手・両足が黒い輪で固定されてし
まい、完全に自由を失ってしまった。

だから……完全に四肢のコントロールを失っている上条は、海軍中
将・モモンガが上条の心臓目がけて振り上げる剣を、ただ見ている
ことしかできなかった。

「くそ……!!」

上条が目をつむった時……

キイイン！！

何かが弾かれる音が聞こえた。

痛みは一向に訪れないので、目を恐る恐る開けると…そこに立っていたのは……

「神裂！！」

「まったく……迷惑を周りにかけすぎですよ…上条当麻。」

神裂火織がモモンガの剣を弾いた音だったのだ。

「丁度良かった！！このままこの鎖を……」

「分かっています……」

「させるか！！」

上条の右腕についている手錠と鎖を斬ろうとした神裂だったが、モモンガが再度剣を振り上げてきたので神裂は応戦することになってしまった。

少しずつ…であるが確実に神裂と上条の距離が離れていく……

「少し考えてみたら……こうして”異能の力”以外で右腕を拘束すれば、アンタはただのお子様なんだよな……」

鎖を引つ張つて上条を引きずり…自分の近くまで寄せるアイス…

「いや…アンタもガキだろ…」

アイズを見た上条が思わず口にした。

「わ…私はもう30台だつてば…!!…ねえ!!…そう見えるでしょ、ヒナ…!!」

「この少年に賛成にヒナ一票。」

「ヒナアアア……」

ヒナが落ち込むアイズを見てクスクスつと笑った。

「…で、この少年はどうするの…ヒナ疑問。」

「ん? ああ…こうして拘束しておけば……」

ここまで言ったとき、アイズとヒナの頭上に大きな影がかかった。

ズザアアアアン!!

避けたからよかったが、先程までヒナ・アイズ(+神条)がいたと

ころから、物凄い土煙が立っていた。

「……こうして息子が捕まっているのを黙っている父親がいると思う？」

煙が徐々に収まって……そこから姿を現したのは、右手の長刀を地面から持ち上げた”白ひげ”だった。

「グララララ……今助けるからな……トウマ！」

「ちょ……」白ひげ”を呼び寄せて大丈夫なわけ？ヒナ不安！！」

身構えるヒナの額から汗が落ちた……が、そんなヒナに反してアイズ表情はさわやかな色が見えた。

2人に”白ひげ”の長刀が振り上げられた。

「平気平気。だって……」

その長刀は2人に到達する寸前で、止まっていた。

アイズは”白ひげ”の上の方を見てクスツと笑った。

その視線を辿ったヒナも納得の色……と微かに嫌悪の色を浮かべる。

「サンキューなモフモフ男。」

「フフフフフ、ちゃんと名前呼びやがれ中将さんよ。」

”白ひげ”の上で…彼の動きを止めていた。ピンク色のフラミンゴを
思わせるモフモフコートを羽織ったグラサン男……王下七武海の1
人・ドンキホーテ・ドフラミンゴは不敵な笑みを浮かべた。

第30話 一度できてしまった流れに逆らうのは苦難の道

「……な……確かお前は……!?!」

上条当麻は”白ひげ”の背中の上に乗っているピンクのモフモフのマントを羽織ったグラサン男をにらんだ。

確か……記憶が正しければ、人身売買に手を出していた海賊……その名も……

「あなたは……『ドンキーコング・フラミンゴ』!?!」

「……誰だよ」「」

海軍サイドだけでなく、海賊側からもツツコミが入った。

「……フフフフ……俺の名前は『ドンキーホーテ・ドフラミンゴ』だ。」

ピキピキ……と額に筋が入ったドフラミンゴ。

「ああ……わりい……」

つて、なんで親父は動かねんだよ!?!さっさとその男をどけるよ

「!?!」

「どけられないんだよ。それがドフラミンゴの能力だ。」

上条の右手をふさぐ手錠の鎖を持ったままアイズが言う。

そして顔に似合わぬ意地悪い笑みを浮かべた。

「さて……これから脚本家兼監督……私とドフラミンゴによる、面白い舞台の始まりだ。」

じつくりとここで見物しようじゃないか……カミジョウ トウマ。」

「嘘……だろ……？」

変わり果てた戦場を、もう手錠はないのにもかかわらず…エースは
見ていることしかできなかった。

彼の目の前で繰り広げられている戦いは、彼にとって最も信じたく
ない戦い……

そう……敬愛する親父が長刀を振るう姿だった……
……家族である海賊たちに向けて……

「すまねえ!! 避ける!!」

「うわっ!! 親父!! どうしちゃったんだよ!!」

「ドフラミンゴを落とせ!!」

「だ…ダメだ!! 歯がたたねエ!!」

次々に薙ぎ払われていく仲間たち…否…エースの大事な家族…

原因は明らかだった……

”白ひげ”の背中に乗っているドフラミンゴが操って、海賊たちに
親父が望まぬ攻撃をさせているのだ。

親父の顔が苦痛で歪んでいるのが見える……

たすけたい……だけど体中が痛くて指一本すら動かせない……
ムリもない……エースは赤犬の攻撃で全身に大火傷を負っているの
だ。

彼の命は風前の灯だといっただろう……。

「つく……親……父い……」

這うようにして遠くにいる……遠くで望まぬ戦いをする親父に向かつて手を伸ばすエース。

自分の世界を変えてくれた人だから……
自分を受け入れてくれた人だから……

こんな呪われた血をひく自分をさげすまないでくれた大切な人だから……

自分の命に代えても救いたかった。

だが、運命の女神というものは厳しい。

身体に当たる風ですら激痛に感じる身体では、動くことなんてもつてのほかだった。

痛みをこらえて進もうとするが、身体がついていかない。

「ちくしょ……」

自分の無力さがこみあげてくると同時に、エースの視界が徐々にぼやけてきた。

…戦場の形勢は逆転していた…

操られた”白ひげ”を救おうとマルコやジョズといった気絶を
しなかつた隊長格が向かうが、それを阻む3人の大将と中将達。

赤犬に進行を阻まれる不死鳥マルコ……

青キジに隙を取られ、氷漬けにされるダイヤモンド・ジョズ……

まだ起動している2・3体のパシフィスタに進路をふさがれる大渦
蜘蛛のスクアードに花剣のビスタ……

こちらの味方である女…神裂は”鷹の目”ミホークと剣を交えてい
る。

悔しそうな顔をするトウマはアイズに捕らわれているままだ。

瞬間移動をした黄猿が”打ち止め”という少女を人質にとり、一方
ラレタ
通行という少年の動きを封じているのが、エースの位置からでも見
えた。

「…こんなところで寝てるとはな…」

上から声が聞こえた。

だが、彼に驚きを与え、エースをスモーカーの元から助けることく
らいの時間は出来た。

「る…ルフィ!?」

自分を抱えて走り出す弟を見て驚きの声を上げるエース。
さっきまで瀕死状態だったはずのルフィは、嬉しそうな顔をした。

「な…なんで……」

「ああ！イワちゃんに”テンションホルモン”を撃ってもらったん
だ!！」

「……て…テンション…?」

「まったく…反動でどうなっても知らないっチャブルよ!！」

いつの間にかルフィの横を一度見たら忘れない顔…ホルモンを自
在に操るオカマ王で革命家の”イワンコフ”が走っていた。
どうやらルフィは、彼…いや彼女に処置を施してもらい…痛みを忘
れさせてもらっているようだ。

「でもどうすんのよー!?!?!」がどこにいるのか分からないから、
手錠のカギが外せないわ!！」

クルクル回りながらあたりの海兵を蹴散らすボン・クレーが叫ぶ。

「そんなことは後回しじゃ。とにかく今は……」
「妻わらアア！……！」

ジンベエの言葉を遮ったのは、スモーカーだった。
身体を煙に変えて、まっすぐエース……じゃなくてルフィを捕えよう
と殺気を隠さずに向かってきた。

それを見てエースをジンベエに預けようとするルフィだったが……

「く……ジンベエー！！エースを頼む！」

「何を言っておる！！まだ”覇気”を完全に習得できていないのに

……

ここはワシが出る……！」

スモーカーの前に立ちふさがるジンベエ……だったが……

「いえ……ここはミサカがです……とミサカは先に進むように促しま
す。」

早々に戦線離脱していたため、体力が少なからず回復したミサカが
立ちふさがった。

「……嬢ちゃん、俺が……」

「倒せないかもしれません…が、時間稼ぎくらいならできますよ…
とミサカは断言してみます。」
「…寝言は寝ながらいいな。」

そう言っただけでミサカの真横を煙になって通り過ぎようとするスモーカーだったが……

「!?!」

その瞬間！スモーカーの身体に電流走り、身体がしびれて一時的にマヒしてしまった。

「……てめえか……!!」

「…お姉さまほどではありませんが…私も一応、身体から微弱な電磁波を放っています…今の攻撃は、その電磁波を当てただけです…
とミサカは得意げにつぶやきます。」

ミサカは表情を変えないまま、額にかかっていた軍用ゴーグルを元まで下ろした。

第31話 修学旅行の写真で好きな人が映っていたらつい買ってしまう

……目の前でゴーグルをつけた女が何を考えているのか、スモーカーには分からなかった……

先程から”攻撃”と思える”攻撃”を受けていない。

最初に一発当てられた電撃で、その時は痺れはしたが一時的なもので、1分をほどで元の状態まで身体は戻っていた。

……攻撃の軌道は単純……ではないが、自身の能力……煙になれば避けることが容易い電撃だった。

女は無表情のまま電撃を軌道を変えつつ放ちながら走り続ける。

「……そろそろですね……」

ポツリ……とミサカはつぶやいた。

……やはり何か企んでいたのか……！！……と思いきなりスモーカーは一気に距離を縮め……ミサカを地面にたたきつけた。

「わりいな……女に対して手荒な真似はしたくねえんだが……何かしでかす前に……くたばりな。」

「ミサカは何もしませんよ」とミサカは返答します。」

「……じゃあさっきまでの自信はどこに行ったんだ？」

「自信……ですか？」

そんなものありませんよ、ミサカがあなたにかなうわけないじゃないですか…とミサカは正直な感想を口にします。」

「ああん？なら一体……………」

パフォーム・ラフェムル
”芳香脚”！！！！”

慌てて煙になつてその場を離れるスモーカー。

そして体勢を立て直した時に、自身を攻撃してきた主に向かって叫んだ。

「てめえ…………ハンコック！！またしても邪魔を…………」

「何をしようとも余は許される…………」

なぜならば…美しいから！！！！”

そうやってスモーカーを見下す…………というか見下しすぎて見上げている海賊女帝…ボア・ハンコック。

その視線がチラリ…とミサカの方を向いた。

その視線は『ここはわらわが引き受けたから、行け』と言っているみたいに見えた。

(…ちよろいもんですね…………)

内心笑いながら…しかし無表情で船に向かって走るミサカ…

彼女の目的は『ルフィ』と『エース』の救出だ。

だが……このままだと彼らを助けることは出来ない。だから……

戦場でハンコックを見つけて取引をしたのだ。

……『自身の持っている写真をあげる代わりに、力を貸してほしい』と。

案の定……先程盗撮したルフィの写真をあげたら、顔を真っ赤にして喜ぶハンコックの姿があった。

……ついでに……ミサカの持っていた上条当麻の写真も欲しそうにしていたので上げてしまった。

ミサカに後悔はない。だって……また撮ればいいからだ。

ミサカネットワークを使えば、彼がどこにいるかなんてすぐにわかるのだし……

「……それにしても……目的は達成しましたが……命の恩人を助けられないのは胸が痛みますね、とミサカはしょんぼりしながら自身にお姉さまのような巨大な力がないことを恨んでみます。」

横目で捕らわれの身となっている上条を見たミサカは、策を考えながら船へと走った。

「フフフフフ……！！実に愉快だぜ！！」

”白ひげ”を意のままに操るドフラミンゴは絶好調だった。

反面の”白ひげ”は体力的にはまだ……問題はなかつたが、精神に深い傷を受け続けていた。

自分の愛する”息子”達をこの手で……自身の意志とは逆に切り捨てていけないといけないのだから……

「ツク……ドフラミンゴ……若造が……」

「その若造に操られている気分はどうだ？白ひげ……！！

あゝ……！結構面白いぜ……！！」

フフフフフと笑みを絶やさないドフラミンゴ。

”白ひげ”は目をつぶった……が、感触と悲鳴が……今も息子たちを斬っている事を非情にも告げていた。

「……………！？」

その時だった。

急に背中が軽くなり、自分以外の意志で押さえつけられていたような感じが一切なくなる。
あまりにも突然だったのでよろめいてしまったが……そこは”白ひげ”。

地面に片膝をついただけで、完全に転びはしなかった。

「フフフフ…邪魔するんじゃないよ、ワニ野郎。」

「…ジャマなんかしちゃいねえよ…ドフラミンゴ。」

ドフラミンゴに攻撃をして”白ひげ”からどかせたのはクロコダイ
ルだった。

”スマイル”は崩していないがイラついているのが分かるドフラミ
ンゴ……それに対するクロコダイはイラつきを全く隠していなか
った。

「フフフフフ……」

「だいたいよお……」白ひげ”の首を取りたいんじゃないのか？
何で助けてんだよ？」

「助けたつもりなんてねえよ。」

葉巻煙草の火をつけ直すクロコダイル。

「こんな老いぼれを殺ることなんか簡単出来る。
気に入わねえのは、海軍の思い通りのシナリオに戻りつつあるって
事だ。」

掌の上で小さな砂嵐を作り出すクロコダイル。

「小僧が……いつちよまえの口きくようになったじゃねエか……」
「うるせえ……てめえは俺が殺るって決めてんだ。
簡単に死ぬんじゃねえぞ」

ジロリ……”と”白ひげ”をにらむクロコダイル。それを見た”白ひ
げ”は微かに口角をあげたのだった。

「はあ……はあ……本当に大丈夫なのか……エースは!？」

抱えているエースを見て叫ぶルフィ。
それを聞いたイワンコフは微妙な顔をした。

「火傷が酷すぎるわね……もしかしたら麦わらボーイ……アナタと同じ治療ホルモンを撃つことになるかもしれないっチャブル」

「じゃあ問題ねえな！エースは俺より強いんだ……！」

「ははは……照れ……るじゃねえか……ルフィ」

動かすも辛い口を開けながら笑うエース。
それを見てルフィも笑ったが……

「逃がしはしないぞ……！」

ドシン……！！

つと巨大な音と共に目の前に現れた人物に……だれもが言葉をなくし立ち止った。

「末期の祈りを聞いている猶予も与えん……
ここでワシが始末する……！」

そこに仁王立ちで現れたのは……

黄金の大仏を思わす巨体をした男……能力を開放した海軍元帥”セ
ンゴク”の姿が行く手を遮っていたのだった！！

第32話 ”利益” も大事だけどそれだけじゃ物足りない気がする

「せ…センゴクー!!」

船を目指していた一行…ルフィ・エース・ジンベエ・イワンコフ…
そしてボン・クレーの表情が一気に険しくなった。

なにせ彼らの前に立ちふさがるは見上げるほどの巨体………といっ
てもそれだけならこの”偉大なる航路”を生き抜いているものなら
ば驚く人は少ないだろう。だが、目の前の男は黄金に輝いているの
だ。それだけでも威圧感があるというのに、その上…海軍の元帥だ。

「つく…ジンベエ、エースを頼む!!」

覚悟を決めた目をしたルフィは、抱えたエースをジンベエに託そう
とする。

「何を言ってるのよー!! 麦ちゃんはイワさんの”テンションホ
ルモン”を二回も受けてんのよー!! 元帥なんかと戦ったら……」
「でも、ここで誰かが戦わないとエースを船に、はこべねえだろ!!
運べなかったら治療もできねえ!!」

「た…確かにそうだけど……」

「仕方ないっチャブルね……」

ゴキ…ゴキ…っと手を鳴らすイワンコフ。

「ヴァターシがセンゴクの相手をするわ。」

「イワちゃん!？」

「ヴァターシにはドラゴンの息子であるヴァナタを援護する義務がある。」

ヴァナタは先に進まないといけないうっチャブルよ。」

「……すまないのおイワンコフ。」

ほら、ボサツとしてないで先に進むぞ!」

ジンベエが走り出す。続いてボン・クレーが走り出す。少し躊躇していたが、ルフィも走り出した。

「ありがとな、イワちゃん!!絶対追いついてこいよな!!」

「全員先へは行かせんぞ!!」

拳を振り下ろすセンゴクだったが……

「”DEATH・ウインク”!!!」

突然、イワンコフの”ただの”まばたきから生じた爆風により態勢が少々崩れてしまったのでルフィ達には当たらなかつた。センゴクはジロっとイワンコフをにらんだ。

「オカマ王が……やってくれる!!」

「ヴァナタはここでヴァターシがケチヨンケチヨンにするから、覚悟するつチャブルよ!!」

「ヒーハー!!!!」

「まったく……だからいくらやってもムリだって。あきらめなよ。」

手錠を外そうと悪戦苦闘する上条当麻を見たアイズはハア…っとため息をついた。

「私は貴方を別に拘束しようとしているわけじゃない。

というより…私の下につかないとあなた…インペルダウンっていう”生き地獄”に入れられて…死ぬよ？」

「お前にはつかないって何度言ったら分かるんだ！」

「なんでそこまでかたくなに拒否するの？」

「エースを処刑しようとした奴とつるむわけないだろ…！そんなことするくらいなら死んだ方がましだ…！！」

「…つぶ…ははははは…！！」

真剣な顔でそう言った上条だったが…いきなり笑い出したアイズを見てポカン…とした表情になってしまった。

「そうね…確かにそうだ。」

笑いすぎて出た涙を手で拭うアイズ…そのまま上条から視線を外し、海軍優勢の戦場を眺めた。

「だけどさ…この世は”情”なんて儂いモノだけじゃ生き残れないんだよ。」

「…そうとは言い切れないんじゃない？」

「いや、違わなくなんてない。」

キツパリと上条を否定するアイズ。

「確かに私は…今の部下のほとんどは事情もちで”情”をかけて海軍に入れさせてやった…：ように見えるだろうな。

だけど…：それは”情”から来たものではない。

いいかい…：この世に大事なものは”利益”だ。”利益”がある方に物事は動いていくものさ。」

「じゃあ…：テメーは…：テメーについてきた部下をなんだと思ってるんだ！！？」

この戦場で対面したアイズの部下…：メスヘルを思い出す上条。

彼はこのアイズに”助けられた恩”だけで仕えていたわけではないように思える。それ以外の…：忠誠心を持っていた。言うでなればアイズに対する”おそれ畏”。

「”敬愛”とか”忠誠心”ってのは”利益”だけで生まれるもんじやねえだろ！！」

「そう言う奴は自分が分かってないのさ。」

冷たく言い放つアイズ…：その眼は外見とまったく合わない冷ややかで感情のこもっていない眼だった。

「自慢ではないが…私の”見聞色の覇気”は逸脱している。だから昔から人の心つてのを見てきた。人つてのは”利益”がないと動かないのさ。”敬愛”だの”忠誠心”だのなんて所詮見せかけ。そう口では言っていて本心の深いところでは”そう演ずることで得られる利益”を求めている。」

たとえば”忠誠心”を示すことで与えられる地位だとか……”敬愛”を演ずること得られる”好感度”……すべて自分の”利益”を求めて人は生きている。私には今のアンタの心が右手の能力のせいが見えない………だけどさ、本心では”なるべく痛い思いをしないで生き残りたい”と思ってるはずだ。」

そして指で戦場の一点を示した。そこではイワンコフとセンゴクが死闘を繰り広げていた。

「例えばイワンコフがこの戦場に来た理由は”ドラゴンの息子の護衛”……つまり革命軍のお仕事の延長線だ。こうすることで更に上司からの好感が得られる………ってかんじかな。本人は無自覚かもしれないけど、心のどこかでは彼…いや彼女はそう思っている。」

「……………でも俺は……………」

そう言った上条の目からは光が失われていなかった。

「そうなら……そんなに”見聞色の覇気”が凄いなら”革命軍”とやらのアジトをさっさと調べればいいだろ？もし”利益”が全てなら……そしたらさらに高官になれるかもしれないねえの！」

それをしないのは……お前が”利益”以外に何かを求めているからなんじゃないか？」

「ばかばかしい……！」

少しイラついた声色をしたアイズ。

「この世は”利益”が全てなんだよ……常に人は……私は”利益”のある方に動いている……！」

革命軍のアジトは今の段階では明らかにしない方が得策だ！今は”白ひげ”討伐に全力を注ぐ時なのに……貴重な戦力を二分割したら効率的によくはない……だから……！」

「本当にそれだけなのかよ……！」

「ええ……！そうよ……！」

”愛”だの”恋”だの……”忠誠心”だの……くだらないことだ……！！」

そう言った瞬間！物凄い勢いで黒い鞭のようなものがアイズに襲い掛かった。

アイズはハツとして直撃を避けたが、鞭はアイズを元々狙ったものではなかった。

バシィー！！

「！！！」

黒い鞭は、アイズが持っていた上条の右手の手錠から伸びた鎖と断ち切った。

それで上条の右腕は自由になった。

急いで自分の両足・左腕を拘束しているヒナの作り出した黒い拘束具を打ち消して自由になる上条。

鞭の持ち主が誰だかは考えるまでもなかった。

「利益」が全てつてのには、納得いかないわね。」

少し怒気を含んだ声の上条とアイズの耳に届く。

2人の目の前に……ふらつきながらも姿を現したのは、御坂美琴だった。

第33話 怒っている時って誰に矛先が向いてもおかしくない

「み…御坂!!?」

そこには、フラフラな状態の御坂美琴が立っていた。

彼女のトレードマークでもある名門・常盤台中学の制服は泥まみれ。美琴は、はぁ…はぁ…と肩で荒い息をしながら…上条当麻をにらんだ。

「何してんの!? 自由になつたんだから早く逃げなさいよ!」

「逃げるつてもよ…お前だってフラフラじゃねエか!」

「おしゃべりはそこまでにいた方がいいんじゃない?」

アイズがイラツとした感じの口調で話した直後! 腰に下げたピストルの引き金を引く。

が…放たれた銃弾は美琴の作り出した砂鉄の黒い壁によって防がれてしまった。

「アイツは能力者じゃないんだから、アンタより私の方が有利よ。だからさっさと行きなさい!!」

青い火花を前髪からバチバチっと散らしながら上条に向かって叫ぶ美琴。

「……つく……！すまねえな、御坂！！
でも……お前だつてボロボロなんだからさっさと切り上げるよ！？」

上条は彼女に背を向けて走り出した。

「逃がすか！！」

「させないわよ！！」

そう言つて、アイズが引き金を引く前に、砂鉄で出来た漆黒の鞭を振るう美琴。

アイズは、飛び跳ねそれを避けると宙を舞った状態で引き金を何回か引く。

が……やはりそれらは美琴に到達する前に漆黒の壁で遮られてしまつていた。

「……いいの？能力を酷使して……」

アンタ……もう”電池切れ”何じゃないの？」

スタツと音を立てて着地に成功したアイズが、余裕の笑みを浮かべながらピストルを美琴にまっすぐ向けてそう言つた。

でも美琴も負けてはいない。フラフラでありながらも……彼女の顔からは”勝てる”という自信が溢れていた。

「アンタだって、さつきから飛び道具ばかり使って……能力者じゃないのなら、こっちにも歩があるわ。」

「能力者だけでこの世が成り立っているわけじゃないんだ、御嬢さん？

だいたい……能力者って意外と弱いんだ。海に落とせば誰もが溺れ死ぬ。

”自然系”^{ロキア}だって”覇気”を使えば倒せるしな。

それに……御嬢さんだってそれは経験済みだろ？なにせレベル0の無能力者にまだ1勝もしてないんだからな。」

「あ……アイツはただのレベル0じゃないからよ!!！」

一瞬……なんで目の前の女が自分の過去を知っているのか分からなくて動揺した美琴だったが……そういえば、この女は”見聞色の覇気”で記憶を読み取ることができるのだ……っと思いついたので、言い返すことが出来た。

（まったく……原作に登場してないキャラ相手だとやりにくいかな……弱点とかもイマイチ分からないし……）

美琴はコインを取り出した。

それを見たアイズはニヤツと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「さつきと決める……ってこと？」

でもさ……アンタ……私に勝てるって本当に思ってるの？」

「……何が言いたいの？」

「……だからさあ、本当に”私に勝てる”って思ったからトウマを逃がしたの？」

いや違う……アナタは彼に気に入られたくて、本当は戦うのがしんどいのに、身体に鞭を撃って私の前にいる。」

「そんなわけないでしょ！！」

私は私の意志で……そんな、よこしまな事なんて考えてないわよ！！」

「どうかな？」

アイズは手でピストルを弄びながら美琴の顔を窺った。

「彼の周りには、それはもう……たくさんの女の子……しかも”自分にはないモノ”を持った子が沢山いる。」

そんな少女たちと戦って……勝ち残っていくためには……貧乳のアナタは超電磁砲（のうじょう）に頼るしかないんじゃないかって分かってるんじゃないの？」

「ひ……貧乳！？し……失礼ね！！あと3年もすれば私だって……！！」

「でも、その3年の間に……彼（トウマ）に本命の女が出来てしまっていたら？いや……もうできているかもしれないな……」

「あの馬鹿に限ってそんなわけないでしょ！！」

「っていうか……あの馬鹿の事なんて私はなんとも……」

「思っていないの？」

真っ赤な顔をした美琴を面白そうに見るアイズ……

”こいつは美琴（しづか）の記憶を讀んでいたところを突こうとしている”
って分かっているのに……分かってしているのに……顔が赤く染まるの

を押さえられない美琴。

「自分ではどうにもならなかった妹達を破壊する計画…えっと…”絶対能力進化実験”だっけ？その凍結をしてくれた時も…？海原って人に化けた謎の人物の手から助けてくれたときも…？何も彼に感じなかったとは言わせない。」

まあ…それは置いておいて…でもさ…

今のアンタで…本当にその超電磁砲シュペルマグだけでトウマを手に入れられるとでも？

努力すればなんとかなるって？そんなことない。

え…？「私は努力して”最低ライン”から、学園都市でも稀な”レベル5”まで上げた」…？

努力だけでレベル5までのし上がったって、本気で思ってるの？

「…どういう意味？」

アイズ彼女の言葉には耳を貸さない……そう心に決めていたはずなのに、美琴は聞き返してしまった。

「『アナタのDNAマップを元に軍用クローンの大量生産計画』

…でもおかしいとは思わなかったの？

あの当時は『レベル1』だったのに……なんで将来『レベル5』になるなんて学園都市上層部は分かったの？」

「……………！！！」

考えもしなかったことを言われ、驚く美琴。
赤かった顔が急に白くなっていくのを満足そうに見るアイズ。

「努力つてのは無意味なんだよ。」

元々持っている能力の上限は決められている。だから人はソレを補おうとする。

それは私だったら、この飛び道具……他の奴らだったら”悪魔の実”。

分かった？ 『努力したら何でもできる』 なんぞ神話なんだよ。

アンタみたいなやつは……努力してもトウマを手に入れられるとは思えない。

3年たてば貧乳を卒業できるかもしれないが……その前に……たとえば、あそこで戦っている女とかがトウマの本命になっている可能性が高いな。」

アイズはミホークと互角に戦っている美琴よりずっとスタイルがいい女……神裂を指差した。

が、美琴はそんなことは聞いていなかった。

「……その話……本当なの？」

「……少し考えればあなたにも分かると思うけど？」

「じゃあ何？ 最初から学園都市上層部は知ってたの？」

「じゃあ……能力開発の”カリキュラム時間割”に参加する前から……成功する人は成功して、しない人はしないって……どれだけ努力しても報われないって決まってたの？」

「……私に聞かないでよ。」

私は”海軍の人間”よ。でも……少し考えるだけでも、そうだと思
うぞ。」

美琴は真っ青になった。

自分は…努力してこの地位を手に入れたと思っていたのに……
それは、…あらかじめ決められていた事実の上で踊らされていただ
けだったのだろうか？

それだけじゃない……もし、それが本当なら……

彼女の脳裏に1人の少女の顔が思い浮かんだ。

長い黒髪の1つ年下の少女……佐天涙子……

彼女は無能力者だ。普段は明るくふるまっているけど、そのことが
強いコンプレックスに感じている。

……そしてそのせいで……レベルアップ幻想御手に手を出してしまった。

……レベルアップ幻想御手とは文字通り、聴くだけでレベルを進化させる道具……

……しかし反動は大きく、使用した人は昏睡状態に陥ってしまうのだ。
……佐天も例外ではなかった。

結果として…目が覚めた後、彼女は悩みを吹っ切り、元の明るい性
格に戻ってくれたが……でも、もし学園都市が最初から……カリキュラム時間割
の手を抜いていなければ……

佐天涙子は、少なくとも”無能力者”としてのコンプレックスに悩
んで”幻想御手”に手を出すことはなかったはずだ。

彼女だけではない……他の”幻想御手”を使ってしまった学生にも同じことが言えると思う。

それに……美琴自身とはあまり関わりがないが……無能力者としてのコンプレックスから不良に身を落としてしまった武装無能力集団スキルアウトの少女少女たちだって……能力が手に入れられたかもしれないに……！！

「許せない……」

「いや……その怒りは、私じゃなくて学園都市に向けるモノだろ……で……ここからは相談だ。アンタ……私に協力してくれない？学園都市に帰る方法はまだ不明……復讐するにしても、私達”海軍”で働きながら帰る術を探した方が手っ取り早いんじゃない？……って……え？」

ゴゴゴゴゴ！！！！という音と共に、地中の砂鉄がみるみる間に宙に浮かんで鞭に取り込まれていく……美琴の周りには、いくつもの鞭が形成されていた。

「……なるほどね……そうやって数を増やして攻撃か……
って……！！！！」

アイズはこの先の言葉を紡げなかった。
なぜなら、美琴が幾本もの鞭を速度もパワーも滅茶苦茶に振るい始めたからだ。

その軌道がアイズには全く読めなかった。
いつもなら、すぐに解析出来て、避けられるのに……感情に任せて
振るわれているので解析しにくかったのだ。

「協力？それってさ……」

アイズが鞭の猛攻から抜けて片膝ついたとき……キンツ……っと何か
を弾く音が耳に入った。

「アンタも私を……」

しまった！！と思ったときにはもう遅い。
空を舞った1枚のコインは美琴の指の上へ戻り……

「利用しようとしているだけでしょ……！！！！！！！！」

空気摩擦で赤熱したコインは、オレンジ色のレーザー……超電磁砲^{レールガン}
と化してアイズに襲い掛かった。

超電磁砲^{レールガン}の一撃が生み出した土煙が収まった時……左腕をなくし、
気を失って倒れているアイズの姿があった。

「……学園都市は恨むけどさ……」

人の心に土足でズカズカと入ってきたアンタの方も許せないわよ！
」

超電磁砲レールガンの御坂美琴はそう言い放つ……が……グラリ……っとその瞬間に視界が揺れた。

「やばい……電池……切れ……れ……？」

美琴の意識が闇に染まるのに時間はかからなかった……。

第33話 怒っている時って誰に矛先が向いてもおかしくない(後書き)

くオリキャラ紹介く

・アイズ

所属 海軍本部

階級 中将

性別 女

武器 ピistolやクナイとか飛び道具系

覇気 見聞色の覇気 武装色の覇気

実は、本名が”ポートガス・D・アイズ”というルージュさんの歳の離れた妹という裏設定がありました。

彼女が愛していた海賊王ロジャーがいなく、『自分がエースを育てる』と張り切っていたアイズで、そのことをルージュさんも知っていたのですが、ルージュさんがガープにエースを預けたことで『結局、情より利益の方が大事』だとそこで思ってしまった。

そのすぐ後に常人の域を超えた”見聞色の覇気”に目覚め、人の記憶を見るようになってから、その考えを確信にしています。

∴彼女のセリフに『正義』が出てこないのは、彼女自身が『正義』というものの存在を認めておらず、海軍にいるのも『生きるため』なので『正義』というものを考えていないからです。

個人的に好きだったキャラなので、ずいぶん長々と出ていたな〜
って思いました。

番外編 2：となりの土御門（前書き）

番外編第2弾です。

一応…前回の続きという感じですが……土御門が主役の話です。

番外編 2：となりの土御門

逆立った金髪：アロハシャツにサングラスといった派手な格好の少年が、クーラーのよく効いた部屋で、メイド関連の雑誌を読んでいた。

…彼の名前は、土御門元春。

この学園都市のレベル0の能力者……というのが表の顔で、本当は魔術結社”イギリス清教”の一員……つまり多角スパイというやつだ。

そのため、結構学園都市内部の機密情報や魔術関係の事件にも詳しい。

なので……彼の住む学生寮の隣人であり友人が、魔術関係の”事件”に昨日巻き込まれていたのを知っている。
助けられないのかって？

そんなことはしない。なぜなら彼はスパイなのだ。隠密裏に動くために目立つ行動はしてはいけない。

だから、今ものんびりと”平穩”な時間をクーラーのよく効いた部屋でゴロゴロと過ごしていた。

ペラペラっとメイド雑誌をめくり…音楽を聴き、時折…宿題の事を思い出すけど、夏休みはまだ始まったばかり…っということと頭の片隅に放って置くことに決め、またページをめくる。

……だが、”平穩”というものは続かないモノである。

ドッシャアアアン！！！！！！！

「！？」

誰もいないはずの隣家から……おそらくベランダの辺りに、なにかが落つこちてきたような音が聞こえた。

なんだろうか……っと思ひ、ベランダに出て確認をした土御門は、一瞬言葉を失った。

……外の蒸しかえるようなアツさなんて吹っ飛ばす”異常事態”がそこでは起きていた。

……隣家……であり友人の上条当麻の家のベランダは修復不可能な状態になっていた……

正確に言うと、修復不可能な状態に”された”というのが正しいだろう。

立ち上がったら見上げるほどの巨大な男だろうと予測が出来る人物が、倒れていたのだった。

……おそらくは、空から落ちてきて…ベランダに引っかかったが、重量オーバーでベランダが破壊された…のだろう。

……一体…どうすればいいのだろうか……

この素性の分からないオッサンを放って置くのか……どうするのか……

……
最悪な事に、上条当麻は今、家にいない。

そしておそらく当分の間は帰ってこれないだろう。

……何日かかるか分からないが、彼が帰って来るまで”アレ”を放置していたら、この夏の元氣いっぱい太陽が生み出す日差しの中で、干物になってしまいかもしれない……

別にこのオッサンがどうなっても構わないが……というか、ぶつちやけ関わり合いを持ちたくない…。

だが、このまま放って置いて死なれて、警察の事情聴衆とかに”隣人だから”という理由で付き合わされるのは面倒だ。

いや……だからといってこのオッサンを引き取るのはちょっと……

……土御門は考えを保留にすることに決めた。

……問題を先送りにしたのだった。まあ……あとでいい案が見つかるだろう。

もしかしたら”アレイスター”辺りが回収してくれるかもしれない。

っと思つてクーラーの効いた部屋に戻り、また雑誌を読み始めた直

後！！

「ぎゃああああ！！！」

ひ…人が…人が倒れてます！！ど…どうしたら……」

……聞きなれた少女…のような大人の女の声が隣の部屋から聞こえた。

なんで彼女が上条の部屋を訪れたのかは不明だが……嫌な予感がしてきた土御門……

案の定、予想は的中した。

ピンポン！！ピンポン！！ピンポン！！

「つ…土御門ちゃん！！開けてください！！土御門ちゃん！！！」

ドンドンドンドンドン！！！！

つと物凄い勢いで玄関を叩く音がした。

やれやれ…っと思いつつ開けてみると、そこにいたのはピンク色の髪をした、どっからどう見ても小学生にしか見えない高校教師…であり土御門と上条の担任でもある”月詠小萌”が涙目で立っていた。

「んにゃー？どうしたんだにゃー先生？」

「き…聞いてください、土御門ちゃん！！」

実は今、上条ちゃんが先生の家に居候しているので、上条ちゃんの日用品を取りに来たんです！！

そしたら、上条ちゃんの家ベランダに…ベランダに…！！！！

謎の男が倒れていて、ベランダが破壊されてたんです！！」

「へ〜、そんなことがあったんのかにゃー…」

だがよ、先生…俺に何をしろっていうんだぜよ？」

「実は……………」

土御門ちゃんが彼を引き取ってくれますか？」

「……………はい？」

聞き間違えかもしれない…と思い聞き直した土御門……だったか……

「ですから、土御門ちゃんが引き取ってください。

先生が本当は引き取っても構わないのですが……上条ちゃんとシスターちゃんとエースちゃん…の2人も居候しているので、先生の家には、この人を引き取るスペースは無いのです。

だから引き取ってほしいんです。」

「だがにゃ……………警備員アンチスキルに連絡するとか……………」

「土御門ちゃんは、目の前にいる困った人をたすけないんですか！？」

先生は…先生は、土御門ちゃんをそんな子に育てた覚えはありません……！」

うるうるとした目で土御門をにらむ小萌……

……そして彼は……

「兄貴……、来てやったぞ……!?」

義兄である土御門元春の学生寮の一室のドアを開けた土御門舞夏は、中にいる人物を見て、目を丸くした。

その人物は見上げるほどの大男で…上半身裸で、白い立派な髭を蓄えていた。

どこかで見たとある気がする…と思う前に……

「兄貴……野郎趣味に目覚めたんだなー！」

「ま…待つにや！！誤解だぜよ、舞夏！！！」

「すまないなー、ちよつと用事を思い出したのだ。

一週間後にまた来るぞー！」

「ちよ…舞夏…！！！」

ガタン

玄関のドアが閉まった音が聞こえた。

「グララララ。兄妹仲がいいな、モトハル！！！」

「……どこがいいように思えるんだにや………」

……はあ……とため息をつきながら、面倒なもの……”白ひげ”ことエドワード・ニューゲートを居候させるはめになってしまったことを嘆く土御門元春だった……。

第34話 自分の父親から親父臭がするとなんか憂鬱な気分になる

「ニューカマー拳法44のエステ奥義”無^む打^{だけ}擊^し処^{しょ}裏^り拳^{けん}”……!!」

残像が見えるくらい超高速チョップで攻撃するイワンコフ。

さすがの海軍元帥センゴクも防戦をせざる負えない……今は巨大化しているので『的』がデカいのだ。

だが……

「どうした？これでしまいか？」

肩で息をするイワンコフを見下ろすセンゴク……インペルダウンでマゼランの毒から奇跡の生還を果たしたとはいえ、体調は万全とは言えず……また、この戦場でも『くま』と戦ったり走り回ったりで体力を消耗してしまっている。

それに比べてセンゴクは、ほとんど動いていなかった。だから体力はまだまだ十分にある。

コレが2人の差だった。

「……さて……いくぞ……!!」

「……!!」

センゴクの拳がイワンコフに襲い掛かった。

(この距離じゃ避けられないっチャブル!!!)

覇気を高めセンゴクの拳を正面から受け止めるイワンコフだったが

……

「ぐっ!!!」

まるで神仏と対峙しているみたいの圧迫感。
拳もものすごく重い。脂汗がイワンコフの額から流れ落ちた。

そして……

「!!!」

ミシリ……と腕が鳴ったかと思うと……ボキッと何かが折れる音と共に両腕に激痛が走るイワンコフ。

「これで終わりだ!!!」

両腕が封じられたイワンコフに覇気を最大限に高めた拳を振り上げるセンゴク。
だったが……

「イワ様!!」

イワンコフの頭から出てきた男：イナズマが両腕に持っているハサミで地面を切り裂き盾を作った。
もちろん…即席の盾は粉々に粉碎されたが、おかげで避ける時間が出来たため、被害は最小ですむことができた。

「つく…しぶといオカマめ……」

「イワ様!!」

「…両腕が死んだみたいね……」

「一旦対戦するわよ、イナズマ!!」

「させるか!!」

ずんずんっと地面を揺らしながら近づくセンゴク。

「両腕が封じられたくらいでヴァターシが殺されるとでも思ってるチャブルの？ヒーハー!!!」

” DEATH - ウィンク ” !!!!!

バチョーンっという巨大な音と共に繰り出される” ただのまばたき

”…さねど、その威力は凄まじく、爆風はセンゴクをよるめかせた。

「……………つく!!!!」

海軍の威信にかけても…ここからは逃がさん!!!!」

「…ちよつと親父臭で死にそうだから助けてほしいかもってミサカ

はミサカは訴えてみたり！！！」

黄猿に捕らわれている”打ち止め”は絞り出すような声を上げた。

「ちょっとその言い方はひどいんじゃないの？」

「ミサカは事実を言ったまでだって！！ミサカは呼吸困難に陥る寸前なので助けてほしいかもってミサカはミサカは必死の懇願を続けてみたり！！」

「……オマエ…緊張感のねエ奴だなア……」

思わず呆れた口調が隠せない一方通行^{アクセラレータ}……

だが、状況は非情に悪いのだ。

このままでは……ここから脱出することができない。

「っち…仕方ねエな……」

チョーカーの電源を再びONにする一方通行。
その瞬間！！

ズウウウンッと黄猿の足元の地面が割れるように沈んだ。

「おやおや…怖い怖い……」

もちろん軽く避ける黄猿。

黄猿は”打ち止め”をしっかりと捕えているままだった。

「危ないことはしちやいけなよ。

じゃないとこの子にも被害が……………」

そう言った瞬間！一方通行がベクトル操作で一気に黄猿との距離を詰めた。

「関係ねエな！！」

「え？」

先程までの”打ち止め”への配慮がまるで感じられない返答…思わず啞然となる2人……

「ちょ…何を言ってるのってミサカはミサカは…目を丸くして見たり……」

「本当にいいのかい？この子…本当に殺しちゃうよ？」

「別にかまわねエ。」

テメエがソイツを殺せばテメエを守る人質はいなくなる。そしたらテメエを殺せばイイ。

ンで”打ち止め”が人質じゃなかったら…そのままテメエをブツ殺す。……つまり！！」

一方通行は人の悪い笑みを浮かべた。

「人質なんて意味ねエンだつてのオ!!!」

「……………!!!」

唾然となる黄猿……まさかこんな論を唱えてくるなんて思わなかった
……………

「隙有りすぎだぜエ!!!」

キインっという音と共に一方通行の”反射”が作動した。
とっさに”人質”としての能力を果たさない以上、足手まといにな
る”打ち止め”を投げ捨ててかわそうとする黄猿……だったが……

いつまでたつても、攻撃が来ない。

それもそのはず。

一方通行の目的は、”打ち止め”が解放された段階で果たされたの
だから……

この少年は、もう黄猿になんて興味はなかった。

「ぐすん…本当に怖かったんだから!!…ってミサカはミサカはしくしくと嘔泣きにみせかけた本物の涙を流してみたり!!」

「ウルセエな……」

ほら、行くぞ……」

「……うん!!」

2人はその場から消えるように立ち去って行った……

「不幸だ……!!……!!」

こう叫ぶのは、やはり上条当麻だった……。

「逃がしてたまるかいの!!」

上条に自分の面目を丸つぶれにされた赤犬に追われていたのだった……
彼は能力を使っていなかった。どうせ上条に効かないのだし……

その代り……どこから拝借してきたのかはしらないが、巨大な剣をもっていた。

覇気もろくに効かない以上、勝ち目があるとするのなら刃物による殺傷のみ！

……ただ……右腕だけは傷つけてはいけないが……

それ以外の箇所……たとえば”首”をやられたのであつたら……いかに上条当麻が凄くても、わずか16・7年の命をそこで散らすことになるのは必須だろう……

「ふ……不幸だ……！」

「終わりじゃけんの……！」

剣を振り上げる赤犬。

……だったが……

「やれやれ……子供一人に海軍は何をしているのだから……」

何者かが2人の間に立ったことで、戦場が一旦シーン……となった。

「つてめえ……何をしに来た!!?」

「俺かい……?」

俺は………

この戦争を終わらせに来た!!!!」

赤髪海賊団大頭にて四皇の1人……”赤髪”のシャンクスが現れた
ことにより……

混乱（？）を極めた長く続いたこの戦争の……幕が閉じはじめる
音が聞こえ始めていた……

第35話 片腕なのに”四皇”って言われている赤髪って凄い

「あらら…しぶといね……」

青雉はぼそり…と、半分氷漬けになりながらも、まだ息をしている巨男を見てつぶやいた。

……ここはマリンフォードの裏町……

まだ、戦争は続いていたが、2人の男が対峙していた。

一方は海軍大将青雉。対するは……七武海の1人…半分氷漬けになったゲッコウ・モリアだった。

「く……貴様…青雉……!!」

「悪いけどさ、君の力だと、もう”七武海”の称号を背負うには力不足なんだよ。

君の名誉のためにも”頂上戦争で戦死”の方が”政府に消された”よりいいんじゃない？」

「……誰の差し金だ？……はあ……はあ……
テメエの独断には思えねえし……センゴクか？」

「いや……もつと上だな。」

そうだけ言つと青雉はモリアにとどめを刺そうと、モリアに手を当てた。

「これで終わりだ。」
アイスエイジ 氷河時代”！！！！”

悲鳴を上げる間もなく凍りついてしまったモリア……
ふう……と一息つく青雉。

「さてと……戦場はどうなってるかな……って……あらら……大変な男が来ちゃってるよ……」

戦場に戻った青雉が見た人物とは……赤犬とトウマという少年の間に立っている赤髪の子海賊……四皇の1人……“シャンクス”だった。つい先日……同じ四皇の“カイドウ”と新世界で小競り合いを起こしたばかりの当の本人が、もうマリンスフォードに現れたのだ。

まさかの展開にシーンとなる海賊たちと海兵達…

「し…シャンクス!!!」

シャンクスを見つけたルフィの驚く声が最初に沈黙を破った。
そんなルフィを見てシャンクスは笑った。

「ははは！デカくなったな…ルフィ!!」

「し…シャンクスって…第1話でルフィに麦わら帽子をあげた海賊…だよな…!?!」

上条当麻は記念すべきONE PIECE第1話を思い出す。

「…そうだ…この男はルフィを助けるために片腕をなくして…それから”必ず返しに來い”と言ってルフィに、彼のトレードマークとなる”麦わら帽子”を渡したのだった。

「おっ！お前…そのことをよく知ってんな!!」

えつと…トウマだったか？」

「えっ!!!?なんでシャンクス…さんが俺の名前を…!!?!」

「ん？だって…そう呼ばれてただろ？」

いや…実はもう少し前から来てたんだが……タイミングがつかめ

なくなてなー!!」

あははつと笑うシャンクス……一体どのあたりからいたのだろうか？
そんなシャンクスに近づく、同じく四皇の1人……白ひげ”の姿が
あった。

「…何しに来たんだ…小僧。

口出しすんなと言ったはずだぜ……」

「そうだったか？

だが……ここはもう引け。これ以上やっても意味ないぞ。」

「……………」

「海軍ももう終わりにしたらどうだ？」

今度はセンゴクの方を向いて言うシャンクス。

「馬鹿言え!!ここで引いたら海軍の面目が立たない!!」

「だがよ……結果的に海軍がやや優勢に思えただが……。」

だって、エースの火傷具合から察するに、もつてあと数時間つてと
こだ。

あんだだけ全身に火傷を負ってるんだ。もうあれを回復させることが
できる者は、俺の知る限り”革命軍のイワンコフ”くらいしかない
……

だが…彼…おつと失礼…”治療ホルモン”を撃つために必要な彼女
の両腕は、2本ともセンゴク…アンタによって壊されている。
だから……エースはもう助からない。」

「そんなー!!
何とかならねえのかよ、シャンクス!!!」

ルフィの悲痛の声が戦場に響く。

……それを無言で肯定するシャンクス……。

ルフィの顔に絶望の色が広がっていった。

そんなルフィをすまなそうな感じの顔で見たシャンクスは、話を元に戻した。

「で……もう一つ……それは”白ひげ”の能力……”グラグラの実”の力が失われたことだ。」

「「「!!!」」」

意外な事実にあぜんとする一同。

「ドフラミンゴは気が付いてたんじゃねえか？」

だってよ、使えるなら奴に操られたときに使ってたんだろ？

恐らく……トウマの腕から現れた『龍の顎』で腕が食われたときに

……能力が消えたんじゃないか？

”白ひげ”は無言だった……その無言が答えを示していた。

得意げに……されど重々しく冷静さを欠かせない声が響かせるシャンクス。

「遠からず確実に死ぬ…海賊王の子であり革命家ドラゴンの息子…ルフィの義兄である”エース”と、化け物と恐れられるほどの強い力を持った海賊にもつとも近い男…”白ひげ”……」

この2人に対する”恐れ”が消えただけでも、海軍にとってメリックトなんじゃねエか？」

そうしたやり取りを、神裂と戦いながら片目で見たミホークは、彼女と距離を取ると剣を収めて、この場を去ろうとした。

「逃げるのですか!!」

神裂が問いただすと、いったん立ち止まるミホーク。

「お前との戦いは面白かったが……赤髪もこの戦いに参戦するとなると話は別だ。」

”白ひげ”とその一味と戦うことは承諾したが……

”赤髪”と戦うことは協定の範囲外だ。」

それだけ言うと、また歩き出すミホーク。

神裂はしばらく黙って彼の後姿を見ていたが、彼女も彼に背を向けると刀を収めた。

シャンクスは仁王立ちをして、その存在感を海賊にも海軍にも示した。

「……………これ以上欲しても、両軍の被害は無益に拡大する一方だ！！！」

それでも…暴れたりなえ奴がいるなら……

来い！！

俺たちが相手をしてやる！！！！」

赤髪海賊団の迫力に押される両軍……………。

……………誰も彼とまで戦う気力がない……………

海軍は序盤から海賊たちの勢いに押されてヘロンヘロンだし、海賊は海賊で、右腕を失ったときの上条の”覇気”のせいで、一気

に気絶をする海賊が続出した。そうでなかった者も一気に疲労がたまってしまっていた。

「この場合は……俺の顔を立ててもらおう。」

「ふ……ふざけるな……！」

海軍中将モモンガが抗議の声を上げる……が……

「いや……いい。」

「元帥殿!？」

通常サイズに戻ったセンゴクが口を開いた。

「確かに目的である”エースの処刑”は大方成功した。
その上……脅威であった超人系最強の悪魔の実……”グラグラの実”の恐怖を取り除くことに成功したのだ。

……負傷者の手当てを急げ!!
戦争は……!! 終わりだ……!!」

「嫌だ！！！」

弱弱しいが通った声が響き渡った。

皆の視線が、その声の主の方を向く。

声の主は、フラフラと立ち上がると……愛用のピストルをシャンクスの方……ではなくルフィに担がれているエースへ向けた。

「私は……エースを許さない！！」

だから……ここでエースだけは確実に殺す！！！」

「おいおい……ピストルの弾じゃ”自然系”^{ロキア}のエースは……」

シャンクスが困ったように言うが……声の主はニヤッと笑ったままだった。

「……甘いな……今装填されているのは……」監獄弾”！！」

パアアン！！！！

声の主……アイズが引き金を引くと、乾いた音が戦場に響き渡った……。

第36話 もし過去を見られたらって思うとその人物を殴りたくなる

”監獄弾”……それは対能力者捕獲用の海楼石が仕込まれた網を放つ銃のことだ。

もし、この網にとらえられた能力者は……いかに強力な力を持つていようと、自力では脱出することが出来ない。

それが自分と義兄エースに迫っているということに気が付いたルフィは、ただ前へ前へ走り続けることしか出来なかった。

『ギア2』辺りを使えば何とかなるかもしれないが、もう今のルフィはエースを背負って走るだけで精いっぱいだった。

「ちくしょ……!!」

「ルフィ！俺を置いて逃げる!!」

全身大火傷を負っていて、肌に当たる風すら激痛に感じているエースは……それでも弟のルフィのことを心配して言った。

「やだ！こんなところで……そんなことしたら俺は……死んでも死にきれねえ!!」

構わず走り続けるルフィ。

そして……

キィィン!!

網が開く直前に、ルフィ達の間割り込んできた人物が網に向かって手をかざすと、網は見当違いの方向に弾かれてしまった。

388

「まったく……もう退場した奴が復活してンじゃねエよ!!」

吐き捨てるようにつぶやく一方通行。
アイズの顔が歪んだ。

「邪魔するな、アクセラレータ!」

「俺は邪魔する気なソてねエな。」

ただ……このガキがウルセエから助けたまでだ。」

「ちよ……このガキつてもしかしてミサカの事!?!ミサカは確かに見

た目は子供かもしれないけど中身は立派なレディだってミサカはミサカは主張してみたり!!」

アクセラレータ
「一方通行の足元にいた”打ち止め”が抗議の声を上げる。ますます顔をゆがませるアイス……」

左腕を失った痛みには耐えながら、片手で別の弾を装填しようとするアイスだったが……

「!?」

「…なにしようとしてんのよ…アンタ……」

アイズの足をつかむ美琴……。

「……離しな。死にぞこないが。」

「死にぞこないはアンタもでしょうが……」

…これで本当に終わりにするわ…さすがにどっかの馬鹿じゃあるまいし、ゼロ距離で喰らったら防ぎようないでしょう!?!」

ビリビリっと青白い電気が美琴の前髪にはしった!っと思った瞬間!!

ズガシャアアアン!!!

「ガッあ！！！」

美琴とアイズが青白い電流に包まれた。

アイズが完全に力尽きて再び地面にドサリ…と倒れ込む。

反対に美琴は荒い息をしながらも立ち上がった。

「はあ……はあ……」

これでもう…戦闘不能な…はず…」

美琴がそう思った時だった。

…えさん！！！！…姉さん！！

「えっ…？」

突然、美琴の頭の中に声が響いてきた。

この感覚は…以前にも味わったことのある感覚だった…。

美琴の脳内に直接流れ込んでくるのは…とある一人の女性の過去

……

「姉さん！返事して！！」

ようやく手に入れた休暇。

訓練やら何やらのせいで汚れてはいるが、まだ真新しい海軍の正装を纏った少女が、小さな家の中で叫んでいた。

(…これは……アイズの記憶……でも……どこかで見たことがあるような……)

それに……アイズに”そばかす”なんてあったっけ…?)

原作では見かけなかったはずのアイズの過去なんて美琴が知っているはずがない。

だが……アイズがいる家は、どこかで見たことのある風景だった。

「姉さん！この部屋にいるの？」

バタンつとドアを開けるとそこにいたのは……一組の男女……
アイズの顔から色がなくなった。

「あ……アイズ？帰ったのね。」

「う……うん……休暇だから……って……
早くその男から離れて！ルージユ姉さん……！」

美琴（ルージユ！？って……まさか……エースのお母さんの？
それじゃあ……隣にいる髭の男は……！！）

「待って！落ち着いて、アイズ！この人は……」

「ゴールド・ロジャー！その人は海賊王よ……！
早く離れて……！ここは私が……！！」

ガクガク震えながらも、先程も構えていたピストルを髭の男……海賊

王に向けるアイズ。
ロジャーはニンマリと笑った。

「ガハハハ！こいつがルージュが言ってた”海軍に入ったばかりの10歳の妹”か！

歳がかなり離れてんじゃねエか？」

「母親が月のモノがあがるギリギリに産んだ妹だもの。そのくらい年が離れていて当然よ。」

「悠長に話してないで！！早く……！！」

その瞬間…部屋の空気が変わった。アイズの額からドツと汗が滝のように流れ落ちる。

そのまま膝をついてしまう。

「つく……！！……何をした……！！」

「ほう……！さすがルージュの妹だな。

手加減してるとはいえ、俺の”覇気”を当てられても気を失わないとは……

いいな……海軍なんてやめて俺の海賊団に入らないか？」

「こと…わる…！私…！！」

身体が思うように動かない分、思いっきり睨みつけるアイズ。

「冗談だ。

それに海賊団は解散してるしな！」

一気に部屋の空気が戻り、身体を縛っていた緊張感が解けて、へなへなと床に座り込むアイズ……

「俺は今から自首しに行くところだったんだ。

ま、立派な海兵になれよ。」

「……はい？」

ポンポンっとアイズの頭を軽くたたくと部屋から出ていくロジャー。

「ロジャー……いつてらっしゃい。」

その背中に優しく呼びかけるルージユ。

ロジャーは振り返らなかつた。まるで……ふらりと散歩に出かけるような足取りで出て行った。

それをアイズはただ眺めることしかできなかつた……

場面が切り替わる。

少し厳しい顔立ちをしたアイズが海軍本部らしきところを歩いていく。

そして、立派な木でつくられたドアの前で立ち止った。

「失礼します！先日より海軍本部所属の伍長となりました、ポートガス・D・アイズと言います！」

「ガープ中将に呼ばれたので……」

「おう！来たかアイズとやら！！」

アイズが言い終わる前にバタンッとドアが開きガープが現れた。

「えっと………なんのご用件でしょうか？」

なんで着任して間もないのに、こんな大物中将に呼ばれたのか分からないといった顔をするアイズ。

その顔を品定めするかのようにみるガープ。

「1つ確認しておくが……お前さん……あの”南の海”バテリラ出身……だな？」

「……何が言いたいんですか？」

海賊王との関係に気が付かれたかもしれない……っと思ひ、身を固くするアイズ……。

そんなアイズを見て「ぶわっはははは」っと大声で笑うガープ。

「そうか！ルージュの妹か！！」

確かに似ておる！そばかすのあたりがな！！」

「！？な……なんで姉を……！！？」

「そうそう……姉と言ったら……」

残念な知らせだが……お前の姉は……死んだ。」

「……え？」

さあーっつと表情がなくなっていくアイズ……

そんなアイズを見るガープの顔には悲痛の色が浮かんでいた。

「そ……そんな……まさか……殺されたとか……じゃないですよね？」

「違う。」

知っておるだろうが……彼女は妊娠していた。20か月も……」

「……」

「そして一人の元気な男の子を生み……名づけをした後に力尽きて死

んだ。」

「……生んだ子は……その子はどこにいるんですか？
孤児院ですか？だったらすぐに私が引き取って育てます!!」

真剣な表情で……目の前にいるのが海軍の中将だということを忘れて
アイズは、ガープに詰め寄った。

「いや……あの子はすでにワシが引き取って知り合いに預けた。」

「引き取って……預けた？」

「うむ。」東の海”の知り合いにな。」

「な……なんで……？」

なんでガープ中將が引き取ったんですか？」

状況が理解できないアイズ……顔面は相変わらず蒼白だった。微妙
に身体が小刻みに震えている。

「実はの……この間処刑された男に頼まれてな。」

『これから生まれる俺の子供を護^{ガキ}ってほしい』とな。」

「……あのひげ野郎……」

「で、そのことをお前さんの姉に話したら、姉さんの方も『よろし
く頼みます』ってな。」

そう言われたなら引き取らざる……」

「嘘だ!」

思わず叫ぶアイズ。

「嘘！もしもの時は私が引き取るんだって姉さんに言ったもん！
私が…！エースかアンを育てるって…！約束したんだもん…！」

「だが、考えてもみる！」

”バテリラ” 出身のお前がこのタイミングで赤子を養子に迎え入れてみる！

”CP9”に目をつけられること間違いない！ただでさえ、”バテリラ”出身だということを目をつけられかけているのに…！！
ルージュは…生まれ^{エース}た子供の身の安全だけでなく、お前の身の安全も考えてワシに預けたんじゃ！安心せえ。アイツは立派な海兵になるように、しっかり育てる。

あ奴が海兵になった時に、引き取ってやればいい。己の隊を持っていたのならその隊にな。」

ま…話したいことはこれだけだ。

そう言っ^てガープは去っていった。

部屋にはアイスだけが残った。

「ずるい…私が育てる^{って}約束したのに…結局、『情でした約束』より『益のある約束』を取るんだ…そりゃそうだよな…ガープさんの養子だったら…一気に出世も出来るだろうし…立場も守られるだろうしな…」

部屋からトボトボとでるアイス。

また場面が切り替わった。

アイズの顔には…包帯が巻かれていた。

包帯を巻いた顔のまま…海を眺めていたアイズ……

その時、誰かが部屋に入ってきた。

「失礼します……って……み……ミイラ男が！！アイズ少将の部屋に！！！」

「……落ち着け、たしぎ……まず眼鏡をかける。」

包帯を巻いたアイズの隣に立っていたメスヘルがため息をついた。たしぎがメガネをかける……それでようやく彼女は『ミイラ男』アイ

ズ』だということを認識できたようだ。あわてて土下座をするたしぎ。

「す…すみません！…気が付かなくて！」

「いいよ。……で、書類は？ローグタウン派出所への移動の前に終わらせないと後が大変だぞ。」

「は…はい！！…そうですね！えっと……これが書類ですけど……その……」

上目づかいでアイズを見るたしぎ……

「……ああ……別にこれは負傷したからじゃない。」

”見聞色の覇気”でたしぎの考えを読み取ったアイズが答えた。包帯グルグル巻きの顔にそつと触れる。

「なに、ちよつと整形手術で”そばかす”を取り除いただけだ。」

「せ…整形なんかしなくても、アイズ中將は可愛いと思いますよ！？」

「我も同じことを言ったのだがな。」

「はあ……余計な詮索をするな、メスヘルにたしぎ。うつとうしかつたから取っただけだ。」

……さつさと2人も用事をすましたら執務に戻りな。

たしぎはこの間の海賊討伐の件のレポートが未提出だ。それから……メスヘル…これがお前が大佐になってから初の仕事だ。この海賊団

の現在地及び構成員を調査しろ…期待してるぞ。」

「は…はい!!」

「了解しました!!」

たしぎは転びそうになりながら部屋を出て、メスヘルは書類を受け取ると一礼してからその場を去った。

アイズは2人が去ったのを見届けると、机の引出しをあける。

そこには先程メスヘルに渡した書類に記されていた海賊団の船長の手配書が入っていた。

”DEAD OR ALIVE”と記されたそれに描いてあるのは、そばかすが特徴的な少年の姿…名は…

「ポートガス・D・エース」…たく…ガープの奴は海兵にするって言ってたじゃないか!」

……アイズはため息をついた。

そのまま窓の外に広がる、疲れも何も知らなそうな青い空を眺めた。

「……姉さん……アンタの子…エースが海賊になった。」

空を見ながら今は亡き人に話しかけるアイズ……

「姉さんには悪いけど…私はエースを…エースの父であるロジャーも許さない。

だって…あの2人さえいなかったら…姉さんはまだ生きていたかも…ううん、生きてたよ絶対に！」

…姉さんは何考えてたんだよ…情とか愛なんかじゃ人は生きていけないんだよ。

私が海兵になった理由だって、家の経済難的な問題で…遊郭みたいなどころに売られるくらいなら海兵になって稼ぎたいって思ったからだし…

…だから…せつかく手に入れた職を、エースとの繋がりのおかげで失いたくないから…だから私は手術で”そばかす”までとったんだ…

…本当に…分からないよ…

なんで海賊なんていう不安定な職の奴…しかもそれすらもやめた経済力皆無の犯罪者と一緒になったの？

なんで…その男との子を死ぬ覚悟で産んだの？」

「…い…今は…」

頭を押さえて、地面に横たわるアイズを見る美琴……。

この感覚は前にも味わったことがあった。

レベルアップ
幻想御手事件で…対決した木山に同じようにゼロ距離電撃を喰らわせたとき…

電気信号の回線が偶然生じて彼女の記憶を垣間見たのだった…

……今見たのは……アイズの記憶……

「…アナタ……エースの……」

「言っんじゃないよ。」

気絶しているアイズの横に立ったのは……海軍中将…大参謀の”つる”だった。

「この女は海軍にとって必要な女さ。ここで失うわけにはいかない……」

腕組みをしたままアイズを黙って見下ろすつる……。そして彼女は顔をあげると…センゴクの方を見た。

「私もアンタの案には賛成さ、センゴク。

このままやつても被害が広がるだけだ。さつさと海賊共はずらかりな。こつちの気が変わらないうちだね。」

「……ふっはははははは！まさか、おつるさんが締めるとはのお！！」

大笑いをするガープ。

それをつるはキツとにらみつける。……なんか緊張感ないな…っと思いつながらセンゴクが口を開いた。

「……これで戦争は終わりだ！負傷者の手当てを急げ！！」

ポカン…っとして戦局の変化を見る美琴……そのまま立ちすくんでいた。

「まったく…なにここでぼんやりしてんだよ、ビリビリ。」
「ひゃー!」

後ろから突然、声がかかったので跳び上がる美琴。
振り返ると上条当麻が立っていた。

「早くしないと置いていくぞ。なんでこんなところでボサッとしてんだよ。」

「ぼ…ボサツとなんかしてないわよ!」

「だいたい私はアンタを逃がすために、この女と戦ってあげてたんだからね!」

「でもさ、もうとっくに戦いは終わってるだろ？」

「つてかさ、顔真っ赤だけど大丈夫か？熱あるんじゃない？」

「うるさいうるさいうるさい!」

「ほら、とっくと帰るわよ!」

真っ赤に茹であがった蛸のような顔をした美琴は、彼女の感情を『熱』と勘違いした上条当麻より早く、船に向かって走り出した……。

そして……これで本当に海軍と海賊の頂上戦争は……幕を閉じることになったのだった……

第36話 もし過去を見られたらって思うとその人物を殴りたくなる(後書き)

元々美琴の電撃を利用してアイズの過去を書こう！って思った話で、それで終わる話でしたが……そういえば、おつるさん出してない！
！って気が付いて書いた話でもありました……

最終回っぽい感じですけど、まだまだあと数話続きます。

なんか主人公が美琴さんっぽくなって……けど、主人公は上条さんです！

あと少しですがよろしくお願いします！

第37話 あの人は今……

―海軍本部・マリンフォード―

「……そうか……マゼランは無事なのか？」

戦いが集結し、しばらくした頃……通信の途絶えていたインペルダウンから届いた報告を読み上げた少佐・ブランニューに尋ねるセンゴク。

ブランニューもまさかの事態に戸惑いを隠せないまま…報告を続ける。

「ひどいやられようで虫の息との事……！」

現在医療班が集中治療を行っています。

真面目な男です……！！ずいぶん責任を口に行っている様子で……

身体が動けば自決しかねない精神状態と……」

「…そんなくだらないマネ絶対にさせるな！！」

……獄内では一体何が起きたんだ？」

あのマゼランがボロボロになるなんて……

センゴクには想像できなかった。

”麦わら”一行だけでマゼランをボロボロに追い詰めたとは考えにくい……まあ……あの”アクセラレータ”という少年だったら話は

別かもしれないが……

だからと言って、あの少年の目的は、アホ毛が生えた幼女救出のみだったはずだ。

マゼランをそこまでボコボコにする理由が彼にはない。

ブランニューは、どこから話したらいいか迷った挙句……ようやく重い口を開いた。

「……………結論から申し上げますと……………LEVEL 6は特に惨劇

……………」

「惨劇だと!?!」

驚きを隠せないセンゴク……………。

ブランニュー自身も驚き戸惑いながら……………説明する。

そう……………簡単に説明すると……………

世界最悪の海賊たちが秘密裏に収監されているLEVEL 6にたどり着いた”黒ひげ”ことマーシャル・D・ティーチは、獄内の海賊たちに殺し合いをさせ、その中で生き残った選りすぐりの4人と一緒に外海へ出た……………との事……………

しかし、明らかに4人以上の海賊の行方が分からなくなっている……………
とのこと……………

「……………そうか……………他にも脱獄者が……………」

人数と名前を早急に確認し、すぐに手配書を世界に公表しろ！！
LEVEL 6クラスの囚人など、たった一人でもどこかの国に紛
れ込むだけで、人々に及ぶ危険度は甚大だ！」
「……………」

しかし、ブランニューは困惑した顔を浮かべたまま答えようとしな
かった。

「……………どうした？」

「それが……………世界政府により……………このことは包み隠せ……………と
これ以上の失態は政府の信用にかかりますので……………」

みるみる間に、センゴクの顔に激怒の表情が浮かんだ。

「ふざけるな————！！！！！！」

「……………鼓膜が破れるかと思ったわい……………」

部屋の隅にいた海軍中将ガープがつぶやいた。

……………だが、怒りの度数は彼も同じらしく、彼は持っていたジョッキ
を粉々に握りつぶしていた。

「……そんな大それたことをしている”黒ひげ”が七武海に居座り続けることがムカつくのう……」

「あ……それでしたら……」

ブランニューがガープの問いかけに答えた。

「実は……”黒ひげ”の乗った船が”マリソフォード”に向かうタライ海流に乗ったとの報告を受けたのですが……まだこちらには着いていません。」

「なんだと!?!」

「……恐らくですが……彼らが個々にたどり着く時間を逆算すると、丁度……ベカパンク様の最新兵器である”赤い閃光”を使用している最中だったのことで……」

その”閃光”が放たれている時に海の方から、かすかに悲鳴を耳にしている海兵がいました……

おそらく……その時に当たって沈んだものと思われます。」

一瞬、静まり返るその場……

「ふわっはははは!!そうかそうか!あれも少しは役に立ったのだから……経費の無駄遣いで終わった兵器になるかとおもったんじやが……」

ガープが笑いながら言った。

いくらかセンゴクの表情から怒りの色が消えた……が、厳しい顔で

あることには変わらない。

「…油断は禁物だ。奴の死亡をしっかりと確認しろ！」
「了解しました！」

敬礼するとブランニューは部屋を出て行ったのだった。

「……どうやら、戦争は終わったみたいだな……」

潮風を肌で感じながら、ファー状の帽子にパーカーを着た細身の男がつぶやいた。

この男は……超新星の1人で懸賞金2億ベリ……”死の外科医”
という異名を持つ男で”ハートの海賊団船長”トラファルガー・ロ
ー。

「よし、また海底にもぐるぞ。

海軍が見逃すと決めたのは”白ひげ屋”の一味だけだ。俺たちまで見逃すとは保証できない。

だからとつとこの場を立ち去るぞ。」

ローは”PENGUN”と書かれた帽子をかぶった船員に命じると、船内に戻る。

…海賊船といったら罽毼マークのついた帆船を思い浮かべるだろうが、この男の率いる”ハートの海賊団”の海賊船は一味違い、潜水艦だった。

だから浮上している時もあると言ったらあるが、結構、海底を進んでいる時が多かったりする。

「あつ！キャプテン！！」

船内をローが歩いていると、向こうからドタドタと…一足歩行をしていて言語を操っている白い熊が近づいてきた。

「ベポか……一体どうしたんだ？」

「あの人、目が覚めたみたいだよ！」

「あの人？……ああ……アレか。」

「ねえ……あの人……これからどうするの、キャプテン？」

「……」

白熊……ベポの問いかけには答えなくて、”目を覚ましたあの人”のいる部屋へ向かうロー。

ベポもその後をついていく。

「あの人ヤバイよ、キャプテン！！」

だって”火拳”を倒しちゃうくらい強いんだよ！！いくらキャプテンでも……」

「うるせえ。」

「……すみません……」

心配するベポを低い声で叱るロー。
精神的に結構撃たれ弱いベポは、途端に先程までの威勢をなくし、
しゅん……とする。

そんなベポに構わないでさっさと歩みを進めていくロー。

そして、とある一室の前に立ち止まると、そのドアを躊躇いもなしに開けた。

「よお。目が覚めたいみたいだな。」

中のベッドで、海楼石の手錠で拘束されている1人の男が、ローを見た。

「ゼハハハハ。俺を助けたのはアンタか？」

男……”黒ひげ”ことマーシャル・D・ティーチが笑い声をあげながら尋ねた。

そう……”赤い閃光”に当たって船が木っ端みじんになって……壊滅したかと思われていた”黒ひげ海賊団”。
実際、船長であるティーチ以外は……残念な結果に終わったのだが、生命力も運も強いこの男は、為す術もなく海に沈んでいく途中……たまたま通りかかったローの船に救助されたのだった。

「礼を言っぜ、小僧！」

だが……妙だな。なんで”死の外科医”ともいわれる残忍な男のお前が俺を助けた？」

「簡単なことだ。」

”黒ひげ屋”は新世界から来たんだろ？俺はこれから新世界に入る予定だ。

だから少しでも知識をつけておきたい。」

近くの椅子に腰を下ろすロー。

そんなローを面白そうな目で見る”黒ひげ”……。

「つまり俺を利用しようってわけか……」

だが、俺が嘘の情報を教えるかもしれねえぜ？」

「その点は心配無用だ。」

キツパリと断言するロー。

そのまま、まっすぐにティーチの腹を指差した。

「実は”黒ひげ屋”が気絶している間に、”黒ひげ屋”の体内に”ウソ発見器”を埋め込んでおいた。

艦隊に効果を説明すると……”ウソ”をついた瞬間に、爆発する仕組みになっている。」

「!?!?」

「もちろん”自然系”^{ロキア}の能力者のお前には効かないかもしれない……が、お前の手には”海楼石”の錠を着けた。これで覇気を纏っていない攻撃でもお前を殺せるってことだ。」

「……キャプテン……いつの間にそんな仕掛けを……」

「さっきの楽しい手術^{オペ}の時間にだな。

他にも裏切らない様に多少、改造^{改造}したが……見た感じこいつの体の構造は異常だったから、日常生活には特に問題ないだろ。」

「「……………」」

ローの発言に何も言えない2人……

「さてと……話してもらおうか……お前が持っている新世界の情報を。」

人の悪い笑みを浮かべるロー。

”ハートの海賊団”の海賊船でもある潜水艦は、人がいいのだから悪いのだから分らない船長と、クマの船員。それから出番が少なく名前すらない幾人かの船員と……新たに加わった”白ひげ海賊団の裏切者”を乗せて……

今日も海底をひっそりと……誰にも気が付かれることなく進んでいく

……………

第37話 あの人は今……（後書き）

……ということ、この回はトラファルガーと行方不明で死亡したと思われていた（はずの）”黒ひげ”の回でした。

あと登場させてないのは……登場させるのが困難なキャラしかないな
いぞー！？

……とりあえず、次回は上条達の話に戻ります。

第38話 行きはよいよい帰りは怖い

あの戦場を生き残った船：“モビーディック号”の船尾で、1人海を眺める少年……上条当麻。

他の仲間たちから離れて、1人で海をただただ眺め続けていた。

「こんなところで何をしているのです？」

振り返るとそこには、神裂火織が後ろに立っていた。

「いや……俺がいたら治療の邪魔だろうって思ってたさ。」

現在、甲板ではステイルがエースの治療を行っていた。

基本的に治療魔術は専門外のステイルだったが、炎系の魔術を使うからだろうか？火傷なら治せるらしい。一時は死への階段を上りつつあったエースだったが、この術が成功すれば、またもこのように活動できる。

だから、その場の上条当麻がいてはいけない。

彼にその気がなくても、右手に宿る”幻想殺し”が問答無用でステ

イルの術を打ち消してしまつかもしれないからだ。

「本当にそれだけですか？」

「…ああ。それ以外に何かあるのかよ？」

「……………その場にいいにかつたからなのではありませんか？」

「……………」

黙り込む上条…………

そう…………それが上条がこんな船の端っこにいる本当の理由だ。

彼自身はあまりはつきりとは覚えていないが…………彼の失われた右腕から現れた竜の顎が…………この船にいる人たち全員の”親父”であり船長の”白ひげ”が最強の海賊と謳われる理由の一つ…………超人系悪魔の実最強の実…………グラグラの実”の能力を奪い、彼を結果的に危機へと追い込んだのは、上条当麻なのだ。

「何言ってるんだよ。俺は全然気にしてないぜ。」

どうせこの後の展開って、『エース&親父の救出クリアしたから』ってことで、よくある二次小説的な展開だけ…………急に身体が透けたりなんだから元の世界に戻るんだろ？

もうこの世界に来ないんだから、どう思われたって別にかまわないっての。」

笑いながら答える上条を黙って見つめる神裂…………

「そのことなのですが……」

上条当麻…あなたが帰れる見込みは低いですよ？」

「……………」

……………はい？」

「私やステイルは帰る術があります、他の学園都市の人間も帰れると思います。ですが……………あなたが帰れる可能性は極めて低いですよ。」

そう言っつて神裂は上条の右手を見た。

「いやいや待て待て待て！！」

この右手のせいなら、この世界にはダイブしなかつただろ？してたのはそのまま下水道にダイブしてたつて！！」

考えてみると、この世界に来てから、まだ一日くらいしかたっていない……………のに、数か月前に起こつた出来事のような感じがする。とはいっても……………記憶を失っているので数か月前つというのがどういった感覚なのかは知らないが……………

「そういえば、貴方には説明していませんでしたね。」

「説明？」

「はい。貴方たちが、この世界にダイブしてしまった原因についてです。」

「原因で……分かってるのか原因が!？」

無表情のままコクリっとうなづく神裂。

「実は、これはギリシャの古魔術の影響です。」

「ギリシャ正教ってことか？」

「いえ。」

教会は属さないフリーの魔術師ですね。その魔術師がギリシャ古代の魔術を応用して使用したのです。

時の神”クロノス”とその弟神”カイロス”の術式を融合させようとしたが、この2神は物凄くかなが悪いので、融合など無謀な事なのです。

そこで、その魔術師は可能性を探るべく海を渡って学園都市に入り込みました。

科学の力を使えば成し遂げられるかもしれないと考えたようですね。

「ちよ……ちよつと待て!!」

魔術師が能力を使ったら………」

そう……魔術を使うものが能力を使うと……例えその能力がレベル0だったとしても、文字通り『死と隣り合わせ』の状況に陥ってしまう。

つまり……

「そう。貴方も知つてのとおり魔術の力と科学の能力を同一人物が使うことは、ほぼ不可能。

結果としてその魔術師は、全身から血を噴出させて死亡しました。

そして……その魔術師が発動させた魔術が暴走して……あなた達を巻き込んでしまったということです。

……それで、飛ばされたあなた達を元の世界に戻すために、私とステイルが派遣されたということですね。

こちらと向こうの世界をつなぐ道を作りだし、あなた達を連れて帰る……ということですよ。

ですが、貴方がその道に入った瞬間、その右手のせいで魔術式が崩れ、帰れなくなってしまふ可能性が高いのですよ。」

「で……でも！！俺は……」

「こちらに来ることが出来た……ですよね？」

それは、おそらくですが……」

「海軍が来たぞ！！！！！！」

神裂がその先の言葉を紡ぐ前に、見張りの船員の叫び声が船内に響き渡った。

「なんだって!?!」

「ほら、あそこだ!?!一時の方向に海軍の軍艦が……一隻!?!こちらに向かっているぞ!?!」

上条と神裂は身を乗り出してそちらの方角を確かめる。

すると確かに海軍の軍艦がまっすぐこちらへと向かっているではないか!?!

「っておいおい!?!」

アイツら『戦争は終わりだ』って言ってなかったか!?!」

「確かに言っていましたね……約束を破るなんて……最低ですね。」

神裂は刀の柄に手を添える。

「これが最後の一戦になるといいな……」

そろそろ家が恋しい……とか思いながら上条当麻は拳を構えたのだった。

余談だが……………

(珍しくアイツが落ち込んでいるようだったから来てあげたのに……
もう…………… 一体あの2人何話してるのよ!! 入りにくいじゃない!!)

上条と神裂が話しているとき…………… 2人から少し離れたところにあつた木箱の影に、こっそりと美琴が隠れていたりした。

が、もちろん上条は、そんなところに赤面している美琴が隠れていたらなんて、気が付いていなかったのだった……………。

第38話 行きはよいよい帰りは怖い(後書き)

うん……なんか説明っぽい回になってしまいました…

次回はちゃんと戦闘シーン等々を入れていきたいと思えます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727x/>

とある魔術の頂上戦争

2011年12月25日01時53分発行